

不日に敏景殿誅伐せらる、由も聞え候ひしかば、所詮は加賀一方より寄來る計なり。然らば橋口に城をかまへ、此和田五郎を居置き候は、吉崎へ寄來る事あるべからず。又三國の本龍院を大將として、潮越の方より攻來る風聞ありといへども、潮水を隔てれば氣遣ひなし。その上濱坂の照順、松本新左衛門、赤尾彌七郎、池田太郎左衛門などといふ一騎當千の兵士候へば、潮越の方こゝろ易し、唯人夫を以て掘切をいたし申すべしと、一人立ちて申しける。一山の多屋衆これに同心せしめ、然らば明日より其要害をかまへ、出城の義は大聖寺の前波八兵衛が家をかまへ申すべしと評議せり。因茲此趣を上人へうかひ申上げしかば、蓮師きこしめされて宣ふは、各の申さるゝ所一つとして道理に叶ざるなり。其故は去る文明のはじめより、當年まで三ヶ年の間、此山に居住せしむること、更に榮花榮耀にあらず。又名聞利養の爲にもあらず。只北陸の僧俗、安心未決定のゆゑに、あるひは邪義を執心し、却つて正道を信受せず、空しく三途に墮す事不便の至りなり。そもこれは何故になれば領解相違して門下の輩邪義を信じて正義と思へり。當流眞實の法水を受けて、其門下々に化益せば末々の門徒までも、決定眞實の信を發すなり。今度の一大事の往生を遂げなば、誠に自信教人信の釋義にも相叶ひ、且つは祖師上人へ報恩謝徳にもなりなんと思ふによつて、御門下一人なりとも信心決定あれかしと思ふこと、晝夜懈らざる念願なり。此地は冬に至れば、濱邊のあらし烈しく、浦端の浪の音、漁船の綱引の聲、あるは年毎の深雪に途を失ひ、寒風に閉ぢられて來る年を累ぬるに、老病つ

よく起りて、萬につけても勞苦いやまし、心常ならざれども、只加越の道俗當流の眞實信心をとらしめんと思ふ計に、此山に兩三年の間居住せしむるものなり。たとひ諸寺諸山偏執の族出來りて、此山を破却し、我命をとるとも、前業の所感なれば是非に及ばざる事なり。然るに橋口に出城を構へ、人數をあつめ置かんこと、無益の次第なり。此山を攻取るべきならば、我此山を退出して、上洛すべき覺悟に内々究め申すなりと、御言葉をつくして仰せられければ、多屋衆一々拜聽して重ねて申上げけるは、仰の趣き心魂に徹し有難く存じ奉り候。しかしながら上人は、京へ御登りなさるべし。此當山百餘家の者何方に身を隠すべき所なし。山野海濱に露命をさらし、由なき惡賊に身を亡す事なれば、一つは我等が爲にても候ふ。又は上人一度御下向ありて、此山に御堂をいとなみ給ひ、北陸の道俗大半御教化をうけ、御法流に基き候ふを、空しく他山の惡徒にとられ申すべき事甚歎しく存じ奉ると、異口同音に申上げれば、上人答へて、各の申さるゝ處一々至極なれども、獨生獨死獨去獨來と經にも説かせ給ひ、妻子珍寶及王位臨命終時不隨者とも演べられて、山野に身を棄つるも驚くべき事にあらず。諸牢人どもに財寶を奪はれ、この山破却に及ぶといへども、朝倉敏景とは龍華三會の曉まで契約にて、本願寺相傳の山ならば、又もや再び御堂造立すべき事易かるべし。必ず必ず要害を構へて、防戦の企て無益なりと、かたく制誡し給ふなり。多屋衆拜謝して、御教訓の條々一々承知仕り已來は急度相愼み申すべし。しかしながら一揆蜂起の事國主へ相知らせ申すべし。敏景殿の存念もあ



るべき事に候と強ちに申しければ、蓮師も是非に及ばず飛札を認め、超勝寺本覺寺を使僧として、朝倉敏景へ仰遣さる。其文に曰く、

態と一札を以て啓達せしめ候。兩三ヶ年の間當山に居を止め申す根元は、名聞利養の爲ならず、又は榮華榮耀を事とせず、唯往生極樂の爲計なり。然るに當國加州越中の士民百姓等、徒に惡業を作り、一善を修せず一行をも勤めず、空しく三途に墮落すべきの間、不便の至り極りなし。こゝに幸彌陀如來の本願、末代の根機相應の法門たるに依て、偏に念佛往生の安心を勧むるの外他事なき處、近頃牢人出張の義、諸方より種々の雜説、言語道斷迷惑の次第に候。予更に所願所帯に於て、曾て所望なきの間、何を以て其罪咎に處すべき哉。不運の至り悲歎なほ餘りあるもの歟。於是心靜に念佛修行せしめんと欲す。其要害なき時は、一切魔魅そのたまりを得、山海の群賊障礙をなす。故に近日要害を構へんと欲する所なり。其餘は所用なき所なり。然りといへども無理非道の子細等出來せしむる時は、今度順次の往生を遂げ、佛法の爲に一命を捨て、合戦すべきよし、兼日多屋衆寄合ひ、一同に評定せしめ候。猶御内意承り度候恐々謹言。

文明五年三月日

多屋衆

朝倉彈正左衛門尉殿

兩僧此書翰を持參せられければ、朝倉敏景對面あつて、逐一に披見せられ申されけるは、返禮を以て

申すべき事に候へども、使僧まゐられ候上は、その義に及ばざる事なり、立歸りて上人其外一山の多屋衆へ申さるべきは、今度要害の事御斷り神妙に存じ候。魔魅或は盜賊の爲に要害を構へらるゝ事は斷りにも及ばざる事なり。若牢人或は惡僧など來つて、理不盡の働きたし、寺破却に及び候は、其時此方より加勢を進すべく候。吉崎の方より御手を出され候事は、無用に候とて、兩僧へ時服三つ、金子十兩づつを賜りける。兩寺立ちかへりて此由を申上げしかば、上人斜ならず御悅ありて多屋衆を呼よせ給ひ、仰渡されけるは、今度要害をかまへ候事、全く合戦の用意にあらず。四壁をかため、門戸にも修理を加へ、掘切を穿ち、又は人夫の用意を備へけるのみなり。此方より勢を出し合戦の義かたく停止なりと仰渡されける。



卷之中

加州富樫政親一揆を鎮らる、事井川崎專稱寺兵火の事

文明五年八月上旬より、吉崎の山上に要害の沙汰ありければ、加賀の浪人一揆申しけるは、吉崎の山はさしも要害の地なる所、其の上又嚴重に要害をかまへらるれば、何の世にか破却せしむべきや。追々日吉崎繁昌に及ぶ事、是偏に國主朝倉崇敬せらるゝゆゑなれば、只恨むるは敏景なり。又加州の國主富樫政親殿は、我等が宗派なれば、若し今度の軍に討負け候とも、富樫殿加勢し給ふべし。まづ事始として川崎專稱寺を破却せよとて、二千餘騎八月十五日專稱寺へ亂入り、堂舎一字も残らず焼きて拂うて軍神の門出よしと、勇み進んで吉崎へ攻寄る所に、後の方より三百騎計りの勢來つて、返せ戻せと大音聲にて呼はりける。諸軍勢これを見て驚破富樫殿より加勢を賜りつると、楯を叩て喜びけるに、思ひの外鬨を上げて切つてかゝる。一揆等大に周章し何事ぞや心得難しとつらたへ騒ぎける處、加州の大將山田太郎左衛門大音聲にて云ひけるは、當樞殿の仰には、今度蓮如上人越前へ御下向なされ、吉崎に一字を營み給ひ、普く衆生を化益し給ふ事、願うても欣ぶべき事なり。況んや正理に順ずるものならば、汝等も吉崎へ參詣して、日頃の邪氣を改宗し、安心の趣きを相傳すべき所に、却て一揆を起し存外の働き言語道斷の至りなり。既に汝等も親鸞上人の御流れを汲みながら、御本席の寺務

職蓮如上人に敵對奉る事、大逆無道の至りなり。速かに此の陣を引き去るべし。左もなくば微塵になさんと大に怒つて云ひければ、一揆ども案に相違して一言の返答もなく、蜘蛛の子を散すが如く、みなちりちりに逃げ去りける。こゝに川崎專稱寺は、不慮の放火にかゝり、焼亡難義の體なれば、山田太郎左衛門申しけるは、專稱寺の焼失は一揆どもの所爲なり。かれ等早速再興致すべしとて歸られる。吉崎へ此の由聞えければ、和田五郎進み出でて、專稱寺焼亡されつるこそ奇怪なれ、いで此方より、逆寄にして、一揆の奴原悉く誅戮せんとぞひしめきける。下間法眼も是を聞き尤なりと同心しければ、蓮師御涙を流し給ひ、此の吉崎の滅亡は安藝法眼と和田五郎にあり。六國を滅すは六國にして秦にはあらずと、古人の語の如く、此方より逆寄にして戦ふならば、汝等七生迄勘當なるぞと、聲あらゝげ宣ひければ、兩人は斷をなしてぞ止りける。上人われ此の山に居住せしむるによりて、かかる騒動も發り侍る。危きを見て退くに如ずといふ本文あれば、早々上洛すべしとて、安藝法眼が子息下間源五郎、平井又左衛門、大家彦左衛門、松永慶順、福田乘念寺、赤尾彌七郎を御供にて、藤島超勝寺へ退去し給ひける。

蓮師御制誠十一箇條を書給ふ事井川崎專稱寺再建の事

今度加州一揆專稱寺を焼討せしこと、加賀國主富樫政親大いに憤り給ひ、一揆の張本安樂寺覺力に仰せ付られ、一味の奴原より專稱寺の望に任せ、堂舎再建致すべしとありければ、無念には思ひながら



も、國主の用意なれば是非に及ばず、一揆の面々より金銀を聚めて、專稱寺、御堂、書院、厨、土藏まで、始めより勝れて不日に成就せしめける。其の時何者やらん、門前に一首の和歌をぞ立てたりける。

川崎へ高田の流れこみ入りて澤邊の焼田穂ぞ出でにける

朝倉殿吉崎の多屋衆を呼び寄せて、仰せけるは、今度加州一揆前代未聞の事なり。富樫殿理非明白に計ひ申されたり。左もなくば、越前より退治すべくと存せし處、其の儀に及ばず、珍重の至りなり。蓮如上人は藤島へ御退去あつて、やがて御歸京あるべきとの御ことなり。當國もはや無事なれば、急ぎ上人を當山へ御還住なし奉るべき旨仰せ渡されければ、即時に藤島へ參り、かくと申上しかば、上人御承引なく、早く花洛へ歸らんにはしかじ、近日發駕あるべきと其の用意をぞなされける。敏景これを聞き給ひ、上人の思召道理至極せり。さりながら今度は敏景に對し、思召止り給へとて、舍弟朝倉與三左衛門尉恒景を使者として藤島へ遣はして、吉崎へ再び御歸住の義強て願ひ給へば、上人も是非に及ばず、時節も日を追うて寒氣になり、通路もいかげなれば、先づ當年は歸住致し越年致すべき由、御返答なされ遣しける。八月十六日より九月十一日まで、藤島に御逗留あつて、吉崎へかへらせ給ふ。それより後は世上もいと静かになりて、何事の沙汰もなく、目出度時節なりと國中の悦び限りなし。上人仰せけるは、干戈を視る時は鬪はん事を思ひ、糸竹をとれば奏せんことを思ふならひ、不

信心の者を見ては、安心決定させたく思ひ、多屋の面々を見ては、法義に入れよかしと思ふばかりなり。今は快く勸化し、當山の衆中自今以後、此の旨を相守るべしとて、十一ヶ條の制狀を認め示し給ふ。其の文に曰、

- 一 諸神并に佛菩薩を輕んずべからず。
- 一 諸法諸宗を誹謗すべからず。
- 一 我宗の振舞を他宗に對し難ずべからず。
- 一 物忌の事佛法の方には是なしといへども、公方並びに他宗に對して、かたくこれを忌憚るべき事。
- 一 本宗に於て無相承の名言を以て、恣に佛法讚嘆いたす事然るべからざる事。
- 一 念佛者に於て守護地頭を輕しむべからざる事。
- 一 無智の身を以て他宗に對し我意に任せて、我宗の法義を憚りなく讚嘆いたす事、然るべからざる事。
- 一 自身いまだ安心決定せずして、人の詞を聞いて法門讚嘆すべからざる事。
- 一 念佛會合の時、魚鳥を食すべからざる事。
- 一 念佛集會の日、酒は本性を失ふ程飲むべからざる事。
- 一 念佛者の衆中博奕かたく停止すべき事。



右此の十一ヶ條制法の義背くに於ては、かたく衆中退出すべきものなり。仍て制法狀如件。

文明五年十一月

同年十一月祖師の御正忌會の時、右の御制誠を御披露ありて、自今以後此の旨をかたく相守り申すべ  
きよし、仰せ渡されたり。然るに此の御正忌には、雪もふらざれば、加越兩國の道俗參詣群集して、  
上人も喜悅の眉をひらかせ給ふ。霜月御正忌の御文章の奥に、

五十地にあまる年までながらへてこの霜月にあふぞうれしき

蓮如上人

三とせまで命ながきぞ霜月の法にあひぬる身こそたふとき

同

のちのとしまた霜月にあはんこと命もしらぬ我身なりけり

同

哀傷御消息の事并慶順乗念の二弟子卒去の事

爰に松永道林寺の新發意慶順と申すは、上人別して憐みをかけ給ひて、殊に若輩ながらも法義も堅固  
なりけるが、文明五年十二月四日二十二歳にて病死せられ、又福田寺の乗念も無二の信心者なりしが、  
これも同日に往生せられければ、老少不定のありさま眼前にありとて、一山の多屋衆に、哀傷の御消  
息をぞ賜りける。

夫人間の爲體を靜かに案するに、老少不定と云ひながら、つれなきものは我等ごときの凡夫なり。こ  
れによりて、身體は芭蕉の葉に同じ。只今も無常の風にあひなば、則やぶれなんことは、たれの人

かのがるべき。たゞふかく厭ふべきは、娑婆世界なり。又ねがふべきは安養世界なり。このたび信  
心決定して佛法修行せずば、いつの世にかはうかむことを得んや。こゝに過ぎぬる秋のころ、多屋  
人數のなかに、松長の道林寺卿の公慶順は、年をいへば二十二歳なりしが、老少不定のいはれや遁  
れがたきによりて、つひに死去す。あはれなることなかく云ふばかりもなし。ことに佛法に心を  
入れし間、惜まぬ人もこれなしと思ふ處に、今月四日に又、福田の乗念も往生す。彼の道林寺も同  
日にあひ當つて往生せしこと、誠に信心の通りも一味せるいはれと思ひ侍るなり。そも乗念は滿六  
十なり、松永の慶順は二十二歳なり。是れ則若きは老たるに先立ついはれなれば、道林寺やな、か  
れもこれも後れ前立つ人間界の習ひは、たれも遁れがたきなり。さりながら同一念佛無別道故の本  
文にまかせて、誠に一佛淨土の往生を遂んこと、本願あやまりあるべからず。あらあら殊勝や〜  
穴賢々々。

此の御消息を多屋衆へ披露に及び、殊に一七ヶ日報恩講の間に於て、多屋衆其の外の人々まで、大略  
信心決定せしめたるよし目出度、本望これに過ぎず。さりながら其の儘うち捨て候へば、信心もうせ  
果て申すべし。細々に信心の溝をさらへて、彌陀の法水を流せといへる事あり。只怠りなく信心相續  
け申さるゝ事肝要に候。我れ年來北國下向の本意、今年成就しけりと御歡びかざりなし。

朝倉敏景子息氏景吉崎へ參詣の事并三ヶ條の制狀披露の事



蓮如上人藤島におはします間に、加賀の山中の温泉へ御湯治あり。其の砌富樫殿へ御音信なされける。是は加賀一揆御鎮ありけるにより、其の御禮の爲とぞ聞えたり。御供の人々には、下間源五郎超勝寺等なり。さて今年も暮れば、翌くる文明六年正月に、重ねて三ヶ條の制状を示し給ふ。其の文に曰、

一 諸法諸宗を誹謗すべからざるの事  
 一 諸神諸佛菩薩を輕しむべからざる事  
 一 信心を執しめて報土の往生を遂ぐべき事

右此の三ヶ條の旨を守つて深く心底に貯へ、これを以て本とせざらん人々に於いては、當山へ出入を停止致すべき者なり。仍如レ件

文明六年甲午正月十一日

ある時上人の御言葉に、去る文明第三の曆仲夏の頃より華洛を出て、同じき七月下旬の頃、既に此の當山の風波あらき在所に草庵を卜て、此の四ヶ年のあひだ居住せしむる根元は、別の仔細にあらず、此の三ヶ條の趣を以て、北陸の國々に當流の信心未決定の人を、一味の安心になさん爲のゆるなれば、今日今時まで諸事堪忍せしむる處なり。此の趣を信用せば、誠に此の年月在國の本意たるべき物なりと宣ひて、此の制誡の條々を下し給ひ、披露に及びければ、參詣の道俗いよ／＼物靜かにて、多屋の面々も深く法義に入られぬるこそ有難けれ。斯くて春も半になりぬれば、殘の雪も消えて長閑なる日

影うららかなれば、國々よりの參詣袖をつらね踵をついで夥しく、其のうへ加賀越前兩國の守護職、深く尊敬し給ふことなれば、國主の權にや恐れけん、又上人の徳をや慕ひけん。今は諸寺諸山の偏執もなく世間の雜説も止て、目出度かりし代となりぬ。同年三月下旬、朝倉敏景子息氏景十六歳になり給ふを誘引給ひて、吉崎の御堂へ參詣し給ふ。一夜御滞留ありければ、一山の多屋こと／＼く宿房にぞなりにける。扱敏景父子蓮師に對して、終夜御物語ありし上、敏景宣ひけるは、此頃承り候得ば、去る年霜月に十一ヶ條の御制誡を認められて、加越兩國の御門下へ示し給ふよし粗承り候。其の一件はいか様なる箇條にて候ふやらん。拜見申度よし所望ありければ、上人答へて、みな守法の義にて曾て珍らしき事もなく候へども、近年諸寺諸山より當山を妬み申す事、全く他人の惡きにあらず、自流の人惡きによつてなり。是によつて其の輩を鎮んが爲に、書付候なりと宣ひて、自筆の制状を出させ給ふ。敏景頂戴ありて一覽し給ひ、子息氏景に對し宣ひけるは、惣じてよろづの司となる人は、其の器量天然と備れり。此の十一ヶ條の趣一つとして疎なる事なし。汝いまだ若冠たりといへども、此の制状をよく／＼感見せしめて、身の守りと致すべし。我れ館に歸りなば、汝が爲に家の制法を書て與ふべし。此の御筆の物は、氏景へ賜り候へと御所望ありければ、上人仔細なく進らせ給ひけり。

蓮師敏景に對し法話の事并富樫政親吉崎を尊敬の事

其の時敏景蓮師に尋ね給ふは、此の條數の中に物忌といふことは、佛法の中にはこれなしといへども、



公方あるひは他宗に對して、かたく忌み申すべき事と御示し候。何とて佛法には、物忌と申す事は御座なく候や。上人答へて曰く、吉日良辰なんと申す事は、佛法の中には決してなき事にて候。其の仔細と申すは、むかし大聖世尊御在世の時、提婆達多阿闍世太子に惡逆を勸めて、終に御父頻婆沙羅王を殺害せしめ、母韋提希夫人を禁獄せしむ。是によつて阿闍世太子は、現在に五逆の惡報來りて身に惡瘡隙なく出で來れり。萬の靈藥を用ふるといへども、更に其の驗なし。其の時臣下耆婆大臣阿闍世王を諫めて曰く、太子の患ひ給ふ惡瘡は五逆罪の現報なれば、世間の醫藥を以て療する所にあらず。只三界の獨尊釋迦牟尼如來を御頼みあるべし。佛力にあらすして、かゝる業病は平癒する事なし。阿闍世王宣ふ、朕はもと達多がすゝめによつて、如來へは敵となりたれば、假令精舎に參りて歎き奉るも、争でか哀愍ましますべきや。耆婆の曰く、佛は一切衆生を憐み給ふ事、譬へば親の子を思ふが如く病兒の苦しむ類、又不仁なる子は別して不便を施すが如し。今大王かくの如きの業病を受けて、惣身惱まされ給ふ。惡人なれば、佛はとりわき憐みを垂れ給ふべし。疾々思召し立つて、是非に佛室へ參り給へと諫め申ければ、阿闍世王の曰く、今日は惡日なり明日參るべし。耆婆重ねて、如來の法の中には、吉日良辰を撰む事なし。今大王現報の業病重し、佛は良醫の如し。其の良醫に遇ひ給ふに、吉日良辰をえらむべからず。譬へば栴檀と云ふ藥木と、伊蘭といふ毒木と此の二木ともに相燒くに、火の相更に替る事なし。惡日吉日も亦復かくの如し。吉日惡日は人によりて日によらず。阿闍世王道理に

服して遂に佛の御許に詣でて、回心懺悔し如來を拜し給へば、佛曰く、佛法とは善智識によれり。善智識は佛道修行の因縁なり。闍王今日我が前に來る者にあらず、是耆婆がすゝめによりてなり。如來すなはち月愛三昧に至り給ひ、光明を以て王の身を照し給へば、其の惡瘡忽に平癒せり。然れば如來法中無有選擇吉日良辰といへるは、是れ涅槃經の明文なり。佛語に、虛妄なし何の疑ひかあらん。其の外に經文ありといへども、まづ此の文を出せり。然れば人の心は愚かなるゆゑ、いろくの物忌いたす事候へども、それを我が宗より惡きと申す時は、却つて誹謗となるゆゑ他山の前にては、忌あるひは公方の掟などあらば、かたく物忌仕るべく事にて候。それを何を知らず、吉崎の教には物忌する事なしと、他宗に對し公方に向つてもはかりなく、我が家の宗義を申し立つるによつて、諸寺諸山より妬み侍る。これを深く恐れて此の條を以て、門下に示す所にて候とて、こまかく仰せあれは、敏景聞き給ひて、有難き事どもを拜聽仕り候とて深く感心せられ、深更に及ぶまで御物語あつて、翌日歸城し給ひけり。加州に於ても國主富樫政親、去年一揆の後斜ならず上人を尊禮し給ふ故に、國中物しづかにして、蓮師も思召しの儘に御教化ありしかば、高田門徒あるひは三門徒の群類、又は諸宗の士民一統に歸伏し奉り、越前口細呂宜郷、加賀口大聖寺邊に至り、毎日道俗男女、農人、樵夫、漁師、水主の類まで、群集して御化導を聽聞し奉り、信心決定の輩多く佛祖の御恩をよろこび申す身となりたる事、是れ偏に蓮如上人の高徳の致す所なり。大祖御開山聖人再び御在世ありて、



御教化ありけるよと、信せぬ者こそなかりけり。

上人北海萬里を眺めて御詠喩の事并吉崎火災の事

蓮師ある時、吉崎の山嶺より北海を眺望し給へば、烟露限りなき風景にして、萬頃江天一葉の舟、桃花春水蓼花の秋など御口號給ひ、又漁舟を見給ひて、一生簑笠の畔、數日水雲の家とながめ給ひ、又宣ふは生ける者の命を滅して生涯を過ぐる事、漁夫の罪業深重なれども、此の度彌陀の本願にさへ歸入すれば、往生極樂疑ひなし。あら尊さよ有難さよとて、

ほとくとたたく船ばた吉崎の浪の上にも彌陀たのむかな

濱阪山のあなたに、浪のうつ音を聞き給ひて、

濱阪の山のあなたにうつ波は夢おどろかす法の聲かな

鹿島の森に、夕ぐれ毎に宿る鳥の群けるを御らんじて、

鹿島山やどれる鳥の聲聞けばけふもくれぬと告わたるかな

濱阪山は風波あらくして、草木一株も生ふる事なければ、

草木まではらひはてたる濱阪のあらしの音は南無阿彌陀佛

咸陽宮の雲をつらぬくも、楚人の一炬にけふりと成り、祇園精舎も竟に一時の炎と立ち昇る。凡て滿れば虧るならひ、抑吉崎は深山空谷にして虎狼の棲なりしを、蓮如上人荆棘を穫りて一寺を御開闢

ありしより、北陸道の門徒貴賤群集して日々に御繁昌ましくける。殊に國主朝倉父子歸依し給ひければ、諸寺諸山これを羨みける處に、文明六年三月十四日、酉の刻に南大門本覺寺の多屋より出火して、折節魔風頻りに吹立ち程なく北の門にうつり、竟に御堂も回祿に及びければ、下間安藝法眼は、大家彦左衛門に下知して、上人の御供仕らせ濱阪浦の照順が方へ退け奉る。其の身は佛具寶器を取出し吉崎浦へ下りける。山上の事なれば水も自由ならず、門内の超勝寺、本覺寺、興宗寺等凡べて九箇寺、暫時の間にことごとく灰燼とぞなりにける。されども門外の多屋一所も恙なかりければ、火鎮りて上人は、吉崎へ御還寺遊ばされて宣ふは、三界無安猶如火宅の金言眼前なりとて、御堂の焼亡を悲しみ給ひ、残りたる多屋へ入らせけり。然れば加越の門徒より四月上旬に、假御堂をぞ建られければ、上人姑く御居住ましまして、此の間に加越兩國の在所々々を御經回ましくて、士民、道俗、尼入道まで御教化ありければ、御繁昌いふばかりなし。

蓮師吉崎にて御染筆御書の事并上人吉崎退去の事

蓮如上人此の年月四海戰國の眞中なれば、往事後來を思ひつらね給ひ、世の中は何か常なる飛鳥川きのふ見しもけふはなくなるならひ、桑田變じて海となるなど、思ひ觀じ給ひて、述懐の御書を染め給ひける。其の文に曰く、  
それしづかに、人間の無常有爲の轉變を案ずるに、おくれさきたつならひ眼前にさへざれり。ひと



りとしてもたれかこの生をのがるべき。かゝる不定のさかひと覺悟しながら、今におどろく氣色はなし。まことにあさましと云ふも愚かなり。これによりていそぎてもたのむべきは彌陀如來、ねがひてもねがふべきは、安養世界に過ぎたることあるべからず。しかるに予が年齢をかんがみるに、まづ釋迦大師の出世は、人壽百歳より八十入滅をかぞふれば、人の定命は五十六にきはまれり。われすでに當年は六十一歳なり。しかれば六十までとしをのぶることを得たり。あはれなるかな、わが生所はいづくぞ。京都東山粟田口青蓮院南のほとり我が古郷ぞかし。なにとなく此の五ヶ年の間まで、北國においてとしをのぶること、まことにもつて存のほかの次第なり。すでに我が年はつもりて六十一になりぬれば、めぐる月日をかぞふるに、當年の臨終極樂往生は、まことに一定なりとおぼゆるなり。それ人間は老少不定のさかひなれば、さらにもつてたのみすくなし。さりながらいつまでと、有爲の娑婆にあらんよりは、はやく無爲の淨土にいたらんことこそ、まことによるこびのなかのよろこび、これに過ぐべからずと覺ゆるなり。これによりて今日このごろに於いて、頓死とのほかにしげきあひだ、何となく病氣するにつけても、さだめて其の人數一分には、よももるべからずとおもふによりて、夜はよもすがら晝はひめもすに、時をまち日をおくるばかりなり。此のゆゑに善導和尚の日没の偈にいはいはく、

人間恣々營諸務 不覺年命日夜去

如燈風中滅難期 亡々六道无定趣

と釋したまふも、今におもひあはせられたり。しかれば朝夕はいたづらにあかしくらして、かつて佛法には心をもかけざること、あさましと云ふもおろかなり。此れによりて安心未決定ならん人は、すみやかに信心獲得して、今度の眞實報土の往生を遂げしめんと思ふべきものなり。

文明七年五月二十日

大凡上人北國に於いて在々を御經回なされ、不信の輩を一人なりとも信心決定せしめて、報土往生を遂げしめんと思召されし御苦勞のほど、御門徒たらん人々は、よくよく思ひはかるべき事なり。はや三伏の夏もすぎ、夜寒の秋にもなりし頃、一つの鬪諍出來れり。朝倉敏景の舍弟經景と、下間安藝法眼と確執あつて、國中騒動に及びけり。元來朝倉經景は姦佞邪智の者也。又下間法眼は血氣の勇者にて、當時蓮師を兩遂に此の騒動に及べり。上人これを聞き給ひ、他人の悪きにはあらず。邪魔外道といふは、下間法眼なるべし。去々年此の地を退去すべかりつるを、多屋の面々止め申され、又敏景の計ひによりて、今年まで此所に居住せしめて、かゝる不慮の義ある事言語道斷なり。此の度は俄に吉崎を御退去あるべき御支度にて、赤尾彌七郎、大家彦左衛門、慶門坊只三人を召し具し、瀬越の亭といふ者の小船吉崎の後へ回し、七曲と云ふ所より其御船に召され、鹽屋の浦へ密にこえ、小鹽の浦より順風を得て、文明七年五月四日の曉に御出船なされ、海路渺々たるを漕ぎ行き、若狭の小濱へ御著ありける。上人吉崎を出帆し給ふと



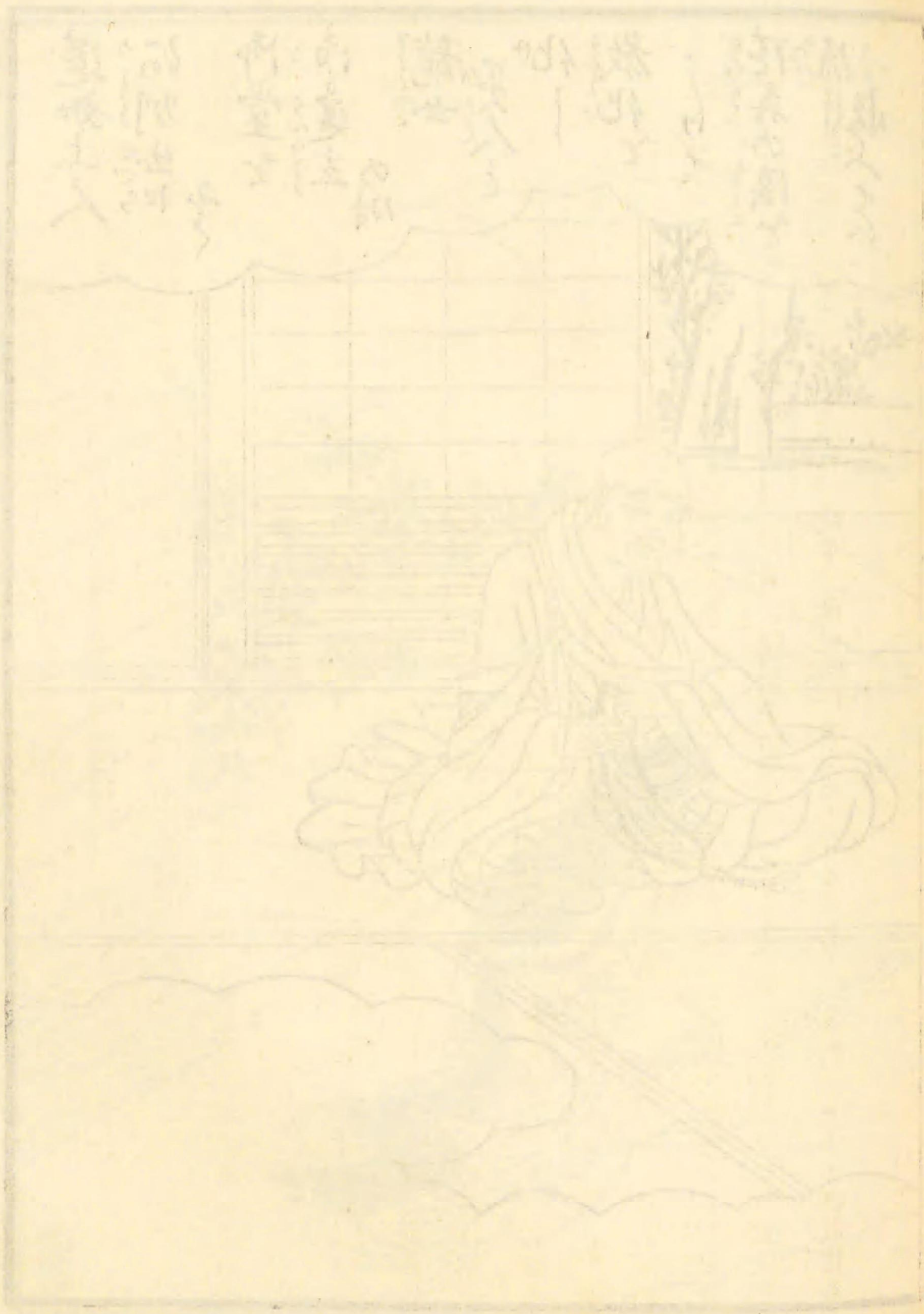
き、御餘波をしく思召れてかくなん。

夜もすがらたゞく船音吉崎の鹿島つゞきの山ぞこひしき

海人のかゝり火すでにこぐ船の行方もしらぬ我身なりけり

河州出口御堂建立の事并龍女出現して上人に謁する事

上人吉崎を御退去有て、若狭小濱に御著なされ、妙光寺に始く御滞留ましつれども、若州は封疆狭くして御在國ありといへども、加越の如くにはあるべからず。急ぎ上洛あるべきとて、小濱より兩津次郎四郎といふものを召具し、丹波越して攝津國萩田の山路を越え、富田に少時御逗留なされ、所御經回し給ひ、それより河内國茨田郡出口村へ御發駕なされ、其の境地を御覽するに、前は淀川の流れ悠々として舟の通路もよく、北は八幡山崎につゞき華洛のゆきも自由にして、西に箕面勝尾寺の翠巒、南に生駒の岨々たるありて、葛城金剛山に連りて絶勝の風景なれば、其の地に方二町の池ありしを埋み、こゝに一字の御堂を建んと思召す。夜の深更に容顏麗しき女一人來りて、上人に値奉り申上げるやうは、みづからは此の池水に、五百年以前より棲ける龍女にて候。上人此所に御住居を待つこと久し。願はくは彌陀の本誓を化益し給はば、此の上もなき悦びなりといひければ、上人安氣し給ひ一々これを聞いて、汝佛縁深くして今幸に御堂を造建す。永く此の地を去らずして、弘法の守護神と成り佛法繁昌の靈地となすべし。龍華三會の曉に至るまで守るべしと、法門こまなく御教化あ











れば、かの女兩眼よりはらくと涙を流し、今尊き善智識に値奉る事、官龜の浮木優曇華の歡び、何事かこれに如かざらんやとて、嬉しげに笑を含み悦の眉をひらきたり。此の後御寺永劫退轉なきやう擁護し奉るべしと、固く諾してかき消すやうに失にけり。是によつて御堂、書院、厨等まで、莊嚴美々しく御建立まししくけり。則ち今の光善寺これなり。

堺御堂御建立の事并唐人來朝して連師の教化を受る事

文明五年丁酉十二月二十九日、上人六十三歳にならせ給ひて、御口號あり。

六十餘り送りし年の積りにや彌陀の御法にあふぞ嬉しき

旦暮は信心ひとつなぐさみて佛のおんをふかくおもへば

やがて春來らん事を思ひつけ給ひて

いつまでとおくる月日の立行けば幾春やへし冬の夕ぐれ

攝津國島下郡溝咋に佛照寺といふあり。此の住僧平生連歌にのみ心をうつして、佛法相續の方うと  
うとしければ、上人思召すやう、此の坊主一人を法義に入れなば、多くの人の爲になるべしとて、言  
葉書に一流の事をこまごま著し三首の詠歌を添られ、溝咋針木原といふ所に捨て置き給ひぬ。佛照寺  
九間在家に參られし道にてこれを拾ひ、懸て出口へ持參しければ、上人其の歌の心を、露を悲しみ霞  
をあはれむ風流によせて、法義をこまかくと御化益あれば、終に佛照寺信心堅固の行者となれり。其



の御歌に曰はく、

ひとたびは佛をたのむ心こそまことの法にかなふみちなれ  
つみふかく如來をたのむ身になれば法の力に西へこそゆけ  
法をきくみちに心を定めば南無阿彌陀佛となへこそすれ

連師出口にまします時、泉州堺の津へ御下向ありて、今の世は天下靜謐ならざれば、所々に御堂を建  
縦令兵亂の禍に破却せらるゝとも、所をかへて廣く化益せんとて、堺の津に於て一字の御堂を御建立  
ありて、折々御下向ましくけるに、一日契丹國の人堺の浦に著船して、上人の教化を蒙る事あり。  
これは往昔かの人の愛子を失ひ、歎き悲しみのあまり、觀世音菩薩に、後生菩提を祈り侍りしに、新  
に示現を蒙る。其の御告に、汝日本に渡るべし。念佛の一門繁昌の宗體あり、其の勸化を受けて後生  
の一大事を定むべしとぞ。これによりて縁を求めて堺の御坊に參詣し、上人に謁し奉り件の旨を申す  
に、上人宣ふ、是偏に宿善開發の時至り薩埵の告命なりとて、他力難思の本誓凡愚直入のことわり、  
懇にすゝめ給ひしかば歡喜の涙袖に餘る。即ち六字の寶號を書き與へ給へば、頂戴してやがて契丹  
國にかへりぬ。上人の法水本朝に溢れ異域を潤すこと、不思議なりしことどもなり。

山科御堂御建立の事并近松に御越年御詠歌の事

山城國宇治郡山科郷小野庄野村の西、中小路の御敷地の來由を原るに、文明七年の九月に吉崎を立退

き給ひて後、攝州と出口とに兩三年のあひだ、幽棲を卜給ふ。爰に江州金森彌七入道善從といふ人、  
前住存如上人の御代より、大谷に參りて深き信者なりけるが、ある時出口の閑窓に參詣して申されけ  
るは、山州宇治郡山科の郷に、御本廟御建立あるに宜しき勝地あり。都鄙の道俗參詣の便もよろしと、  
再三申し上られしかば、其地を歴覽し給はんとて、文明十年正月二十五日、蓮如上人六十四歳の御  
時、河州出口より御上洛ありて、大津近松へ御通ひの砌り、山科安祥寺村に門下あれば、少時御滯留  
ありて御教化まし／＼ければ、參詣の諸人群集すること、稻麻竹葦の如し。こゝに同郷野村といふに、  
足利將軍の幕下遠州の刺史海老名遠江守が子孫に、海老名五郎左衛門といふ者あり。上人の御化導を  
慕ひ、信心堅固の御門徒となり申上けるは、幸某甲が領地に針木林といふ四五町餘の平地あり。願  
はくは此地に御堂御建立あらせられ候はゞ、寄附し奉らんとぞ申しける。これ則ち先達て彌七入道が  
申し上し勝地なり。上人宿縁の到來ぞと斜ならず御満悦まし／＼て、則輦輿にめされ、彼の地を  
見給ふに、究竟の靈地なれば、まづ時機をも試み給ふべしとて、堺にありける小房を取らせ、假に御  
坊を建て給ひ、こゝにて御教化ありけるに、貴賤群集なす事蟻のあつまる如くなれば、上人御歡び限  
りなし。海老名五郎左衛門は今の西宗寺の祖なり

斯くて文明十年も程なく暮れたれば、上人近松に御越年まし／＼て、御口號給ふ。

六十あまりおくり迎ふるよはひにて春にやはん老の夕ぐれ

蓮 如上人



明くれば文明十一年正月朔日に、雨つよく降り神いみじう鳴りければ、

あらたまる春になる神はじめかな

蓮如上人

かやうに御發句をなされけるに、同じき五日竺一檢校参りて、おほそれながら、脇を附け奉らんとて、

霑ふとしの四方の梅が枝

竺一檢校

同年の正月十六日より地形を引ならし、四園の行木を植ゑさせ給ひて、三月の初めの頃、又堺より古き坊舎のありしをこゝに引かせられ、寢殿にしつらひ給はんとて、四月二十八日より柱立はじまりて、八月に建て揃ひ、築山泉水等まで成就致しければ、上人御悦ありて、九月十二日夜寢殿におはしましけるに、月清らかにして空隈なく晴れわたり、二千里も外ならず。御殿の廂にさし入り、庭の面も麗はしく見えければ、

小野山や大宅つづく山科のひかりくまなき庭の月かげ

蓮如上人

御影堂御造營の事并吉野山の材木上る事

上人つくづくと思召されけるは、斯の如く寢殿厨まで成就しければ、急ぎ御影堂造營なされたく思召して、先づ近郷の門下中へ御觸れありければ、同じき十二月中旬、和州、河内の御門徒吉野山へ杣を入れて、柱五十餘間上し奉りける。斯くて其の年もくれて、明る文明十二年正月十六日より、

御影堂御試のためとて、三疊敷の小堂を造りて御覽あり。それより二月二日、御堂の手斧初めあり。雑木等は近隣近郷より、運送し寄附し奉つる。既に三月二十九日、御棟上の御祝儀嚴重にありて、内陣外陣の板敷の良材は、大津より運び、檐板は、藤の森の神木を買ひ求めて、八月四日より檜皮葺にとりかゝり、十月四日に出来せり。造作は四月五日より、八月中までなれば、日もながき頃なれば、番匠の手間もはかゆきて、いと壯麗に成就いたしければ、上人の御歡び御門徒の満足、此の上やあらんとて参集いやましける。



卷之下

御眞影御遷座の事并三井寺より御眞影を遮る事

山科御影堂壯麗に成就いたしければ、まづ八月二十八日には繪像の本尊を假御厨子に移し奉り、山科西宗寺に安御移徙の儀式調ひ、扱其夜は上人も御堂に宿し給ひて仰せけるは、扱々年來の本望今すでに成就しけり。京鄙と經回しけるあひだも心中に思ふやうは、あはれ存命の中に御影堂を建立して、心安く安養の往生を遂げばやと、念願せし事今宵成就せりと、嬉しく尊く思ひ奉るあひだ、曉方までは終に目も合す夢も結ばずして、通夜御悦び申すなりと仰せられき。さて御堂の莊嚴も殊の外結構に御成就なされしかば、將軍の御臺所も御參詣ましく御影堂を御覽あり。其上上人の御化導を聽聞し給へば、世間出世ともに目出度御事どもなり。日を逐うて白壁も塗揃ひ、境地の地形も平均に引ならして、兎角するうち、十一月十八日になれば、今宵大津近松に御座なされける聖人骨肉の御影像を、山科の御堂に御遷座あらんと、其由を三井寺へ仰遣されければ、寺門の衆徒異難を申しかけ、御眞影を山科へ渡すまじきとて遮りける。其由を尋ぬるに、文明三年二月より、御影像三井寺に入らせ給ひて、今年まで十ヶ年の間は、諸國よりの參詣日々に夥しくして、寺門の境内賑はしくて彌勒の出世し給ふにやと悦びあへる處に、今山科に遷しなば、三井寺の衰微なるべしと、一山會合して渡すまじり。

山科にて七晝夜の法會始めて行はる、事并三種の神器の御譬の事

蓮如上人曰く、今こそ本願寺淨土眞宗の本寺と申すは此山科なり。總じて日本に於て親鸞聖人の御流義まち／＼に別れたりといへども、御眞影のおはします所を本寺とは申すなり。其故は覺如上人乗專房にあたへ給ふ改邪抄の中に、祖師の御本所を蔑如し、みづから建立の私の在所を、本所と自稱する事冥加を存せず、利益を思はざる族、大橋慢の妄情をもつては、いかでか佛智無上の他力を受持せんやと宣ひたれば、何方にますますとも、此影像を安置し奉る所こそ本寺なれば、恐れ多き譬なれども、三種の神器を帶し給はざれば、王とは申さるが如し。然れば今此の御眞影を三井寺より山科へ移し奉る事の嬉しさよとのたまひて、則ち今年十一月二十一日の迨夜より七晝夜の御法事、山科において始めて御修行なされ、御満悦の趣を山科御建立の御文章に遊ばされ給ふ。其御眞筆は今に西宗寺什寶の隨一なり。良に文明三年四月上旬より、御眞影は大津にましく、寺務はこゝかしこへ經回し給へば、御本寺は何地をもつて本とすべきぞと、人々覺束なく思ふ所に、今年今月一處御居住し給ふ事のありがたやと、みな人よろこびの涙にむせびけり。



山科阿彌陀堂御建立の事并實祚延長を祈り奉らるゝ事

同年十二月中旬の頃より、上人思召立ち給ふは、御影堂既に成就し給ふ。然れば本願寺元來勅願所にして、他に異なる寺なれば、此上には阿彌陀堂を造立して、先帝の御菩提當今の實祚を祈り奉らんと思召され、又吉野山へ此旨仰遣されて、阿彌陀堂の柱二十餘本あつらへたまふ。既にことしもくれて、文明十三年にも成りければ、正月十日吉野の材木山科へ到來しける。因茲二月四日に手斧の始ありて、同年四月二十八日御棟上の祝義あり。六月八日に假佛殿をしつらひ、御移徙の規式執行はせ給ふ。幸なるかな今年六月十八日は、前住存如上人の二十五回忌にあたらせ給ひければ、十一日の追夜より、七晝夜の御法事執行あるによりて、遠近の御門徒われもくと群參して、御繁昌の體いにしへに百倍せり。又その翌年文明十四年正月十七日より、大門を御建立なされ、四方の並樹、堀溝、築地、鼓樓、鐘樓、茶所、轉輪藏、橋々等まで、今年ことごとく成就せり。又其明くるとし文明十五年五月中旬に、河内國古市郡譽田の野中の馬といふ瓦師を呼んで、瓦を焼いてことごとく瓦葺にぞなされける。抑文明十年より今年八月まで六年のあひだ、兩御堂、書院、臺所、集會所、その外部屋部屋まで残らず成就せり。誠に莊嚴いと美麗なること言葉に盡しがたく、今の世に異國は知らず、日本國にはたぐひなき大伽藍なりと、貴賤賞せぬものはなかりけり。

てに葉を以て易行道を教へ給ふ事并選子内親王和歌の事

蓮如上人諸堂成就の後、御歡びのため、時々門徒を聚めて仰せられけるは、念佛を懈怠することありとも、往生すまじきかと疑ひ歎くべからず。彌陀如來を一度頼まゐらせて、往生決定の後なれば、懈怠ありとも淺ましや。かゝる懈怠なるものなれども、御たすけは治定なり。あら有難やくと悦び、念佛を申す心を、他力大行の御催促なりと思ひ、念佛申すべきなりと仰せられける。ある時門徒の内一人、御尋ね申さるゝは、御たすけありける事のありがたさよと、念佛申すべくや。又御助けあらうする事のありがたさよと、念佛申すべく候やと尋ねければ、いづれもよし。但正定聚の方は御たすけありたると悦ぶ心なり。滅度の悟の方は御たすけあらうする事のあり難さよと申す心なり。何れも佛になる事を喜ぶこゝろよしと仰せ給ひき。又ある時山科の郷中に一農夫ありて、兄弟の女を持ちり。家ははめて貧し。されども彌陀の本願に歸入し、時々上人の御教化を聽聞して、佛恩報謝の稱名を悦びける。かくて無常の風のがれがたくして、二人の親はかなく夕の露と消えにける。兄弟のむすめ詮方なく、同郷なる里長日蓮宗の家に奉公し侍る。日頃親々の教にて、稱名を悦びけるが、此家の主人かたき法華宗なれば、決して念佛をば禁じける。兄弟のもの佛思わすれがたくやありけん、田植歌、白挽、粉挽の時も稱名の代に、忘れまいぞやかの事をと、起臥にいうて奉公を勤ける。其年もくれて、梅匂ふ春にもなれば、藪入として一日ふた日の暇をもらひ、山科の御堂にまゐり、上人の御勸化を聽聞し、涙の袖の海となるまで稱名を悦びける。御法座も終てければ、諸人みなく退出しけ



るに、此兄弟もの御堂にひれふし、聲を上げて泣き居たる。上人あやしみ給ひ、二人の女子は何ゆゑに  
 かく涕哭するぞと尋ねたまへば、かの者いふやう、両親のをしへにまかせ稱名念佛申しけるが、  
 親々も身まかりて後、日蓮宗の家に奉公し侍る。かたく念佛を禁じ申されけるゆゑ、詮方なく忘れま  
 いぞやかの事をと、稱名の代につねに唱へ侍る。今日は此法筵に詣し、思ひのまゝに念佛を悦びし  
 が、最早翌日より又本の如く、空言を唱ふる事の悲しさよとて、かく愁傷に及ぶなりといふ。上人  
 是を聞召し、御涙をはらりと流し給ひ、善哉々々、稱名の代に忘れまいぞやかの事をと唱ふるこ  
 と、佛も智見を以て知食すことなれば、疑ひなく極樂往生すべし。信心堅固の御同行なりと賞嘆まし  
 ますこと限りなし。しかしながら迎もなら、忘れられぬぞかの事をと唱ふべし。これにて易行の道に  
 かなふなり。するぶん信心相續怠る事なかれと教へ給ふ。これ纔のてにをはに、自他の道をわかちて  
 をしへ給ふ。凡慮の及ぶ所にあらずと、其頃世に美嘆せずといふ事なし。いにしへも此例ありて、内  
 親王、伊勢賀茂の齋宮齋院に立せ給ふ事、景行天皇より始りける。其稷の御時忌言あり。佛を中子と  
 いひ、經を染紙といひ、塔を阿良々伎といひ、寺を瓦葺といひ、僧を髮長といひ、尼を女髮長といふ。  
 これ延喜式に出でたり。詞花集雜の部に、選子内親王賀茂の齋宮にと聞えける時、稱名の代に西にむ  
 かひてよめる。

選子内親王

詞花集

思へどもいむとていはぬことなればそなたぞむきて音のみぞなく

大阪御堂御草創の事并聖德太子示現の事

攝州東成郡生玉の庄内、大阪の御坊は蓮如上人八十二歳、明應五年の頃御草創ありし靈場なり。第  
 八男實如上人へ御寺務を御譲なされ、山科南殿へ御隠居ましめて信證院とぞ申し奉る。上人ある時  
 河州出口へ御發駕なされ、それより富田、溝杭、島野、野宮などの邊へ御出歩、あるひは泉州堺、平  
 野、又は佐野嘉祥寺貝塚へ御經回ありて、人民を化益し給ひ、御上洛の折ふし、二月二十二日なりけれ  
 ば、天王寺に詣し給ひ、仰せられけるやうは、抑此四天王寺と申すは、聖德太子二十二歳の御時、守  
 屋の逆臣を誅戮の御願成就の後建立し給へり。王造りは始め樓の岸にありけるを、此地へ移されけ  
 る。忝なくも聖德王は救世觀音の垂跡なれば、此土に示現ましめて、佛法を弘通し給ふ。觀音は西  
 方淨土の脇士の菩薩にして、彌陀は果上、觀音は因位なれば、因として果を尊み給ふ。故に寶冠に彌  
 陀を戴き給ふ。其うへ此地はむかし釋尊轉法輪の勝處なり。其時太子は長者の身と成りて、如來を供  
 養し給へり。則今此寶塔金塔は極樂淨土の東門中心に當るといへり。然れば天王寺へ參詣の人々は本  
 地といひ垂跡といひ、太子の御本意なれば、彌陀を信する人は、太子の御心にもかなふべきなり。た  
 とひ百度千度參るといへども、太子の御本意に達せずんば、徒事なるべし。然るに當流の行者は彌陀  
 如來をたのみ、信心決定して往生極樂の覺悟を究めたるゆゑに、太子の御意に叶ふべし。信心相續怠



る事なかれと示し給へば、人々感涙に噎びける。上人天王寺より玉造のかたへ御越なされしに、何國ともなく十四五歳計りの兒一人來りて、上人へ申しけるは、爰によき寺地あり。御一覽なされて一字を御建立あるべし。いざ此方へと倡ひ奉る。上人此兒を伴ひ給ひて山に登り遠見あれば、淀水漫々として八功德池を表し、西海の潮は雲に連りて日想觀をあらはし、千船の往來も自在にして、陸は金剛山に續きて、法喜菩薩の淨刹に隣り、葛城高間の山聳え、西には摩那の高根、兜山、六甲山、あるは海濱には、三犬女浦、須磨、明石の浦、月落ちかゝる淡路島山まで、手にとる如く此地を饗應の風景なれば、誠に闔州壯觀の地ともいひつべければ、天晴此地に御堂を建立せばやと、御こゝろを究め給ふと忽ちかの兒見えざりける。それより此地に御堂御建立なさるゝ時、さまざまの奇瑞多くありければ、今の兒は正しく聖徳王の化現なるべしと、皆人申しあへり。上人御隱居の後は只假初の事に付ても、自信教人信の思召の外は他事なかりき。斯くて明應五年の秋九月より、彼山をひらき地ならしこれある時、法安寺の兩僧難じて、明日は大惡日なれば、初めて伽藍興行の日には、然るべからずと申しければ、上人答へて、如來法中無有選擇吉日良辰の佛説を疑ふべからず。明日早々に創むべしとして、土石を掘り、地面を捌ち給ふに、不思議なるかな俄かに泉湧出し、又礎石瓦等まで、土中よりことごとく出現す。兼て藏埋置きけるが如きなり。木材は吉野山より運送し、石は御影里より船路にて送り、工匠は都鄙より聚り來りて、不日に御堂、書院、門々、臺所等まで成就し給ひける。

聖徳太子未來記の事并本願緣起の文の事

天王寺に於て聖徳王の未來記を見給ふに、末世にいたつて此の寺の東に當りて、佛閣建立あるべし。即我が後身なりと記し置かせたまふ。然れば太子は本來觀世音の垂跡上人の御母公は、石山寺の觀世音にておはしますなれば、これらを思ふに蓮如上人は、聖徳皇太子の後身にてわたらせ給ふことと顯然たり。本願緣起に曰く、吾入滅之後生三比丘比丘尼長者卑賤身一弘興教法一救三瀆有情一是非二他身一我身耳矣。又玉造岸西方瓦焼置二萬枚一埋藏竈穴一至二修造時一鑿取用而已云々。これをおもひに礎瓦の土中にあること、これ太子の埋置き給ふとは、明らかにしられて、これによつて御文に往昔の宿縁淺からざる因縁なりと書せられ、又如何なる約束のありけるにやと宣ひけるも、眞に所由ありと思ひ合されたり。

蓮如上人御不例の事并下間法眼安藝勘氣御免の事

化野の露鳥邊野のけふり常なき風貴賤を擇ばず、生死必然の道理なるが故に、大聖世尊梅檀の烟をまぬかれ給はず。十惡の提婆も無常の風遁るゝ事なし。四大所成の形五蘊假和合の質、みなことごとく磨滅の期あれば、上一人より下萬民にいたるまで、遁れぬは只此一つなり。然るに信證院法印權大僧都兼壽蓮如上人は、人皇百二代稱光院御宇、應永二十二年乙未大谷にて御誕生ましく、百四代後土御門院御宇、明應七年戊午上人八十四歳の四月上旬より、聊か御違例ましくけり。上人宣ふは、



春すぎ秋去りて當年は明應七年孟夏中旬にもなりぬれば、予が年齢積りて、既に八十四歳ぞかし。然るに當年に限りて、殊の外病惱におかざるゝあひだ、眼耳手足心安からず。これしかしながら定命の至りなり。又は往生極樂の先相なりと、疾々覺悟せしむる處なり。諸事存生の中に尋ね申すべしと宣ひける。同月十九日に、板坂左近將監といふ醫師參りて、御脈をうかひ御藥を奉りける。御食事はたゞ漉湯ばかり聞しめされける。同五月二十八日に御參詣あそばされ、已後は御出仕をも留り給ふ。同六月六日に姉小路黃門基綱卿光臨ありて、上池院を召具し給ひて數刻御物語あり。醫師御藥を調進し奉れども、更に其驗あらず。上人度々仰られけるは、賊縛比丘脫二草於醫王遊一乞食沙門彰二鵝珠於死後一といふ戒文を仰せられける。これ滅後に不思議をあらはし給ふべき御事なりと、後にぞ思ひ知られける。同年八月下旬下間安藝法眼北國より上洛して上人の御勘氣を伺ひ奉り、哀御存生の内に、御勘氣御免候は、未來までの面目これに過ぎず候ふとて、漸久しく落涙し、御近習衆を頼み、いろいろと謔言申上げしかば、上人宣まふは、汝は未來永劫まで勘當なり。今度北國において合戦の義、言語道斷の次第なり。さりながら重ねて北國に下だるまじきぞならば、不便のことなり。謗法闡提回心皆往の彌陀如來の本願なれば、何程の惡逆ありとも、回心のうへは子細あるべからずとて御赦免あそばされけり。法眼御前へ召し出され、尊顏に調し奉つり、感涙を流し、御病體をうかがひ奉り退出しけるなり。上人御遷化の後、中陰の内法眼も山科に於て往生せられけり。上人當年の冬の頃より宣ふは、明年三月には必ず往生すべし。みなくその心得にて、信心相續怠ることなかれと、かへすくも御教訓あそばされける。

上人御病中ながら山科へ移り給ふ事并吉野櫻を獻じければ御和歌の事

あくれば明應八年二月十五日に宣ふは、われ大阪に於て往生せんと思へども、思ふ旨あれば、上洛して山科に於て往生すべし、空善急ぎて山科へ參るべしと仰せければ、空善御意を承り、即ち十六日に上洛ありて、その用意をせられける。上人は十八日に大阪を御立なされ、道中しづかに御のぼりあつて、二十日に山科へ入御ましゝける。明くる二十一日に御影前へ御參りあつて仰せらるゝには、今度は不思議に命ながら候ふ。大阪にて往生いたすべき事に候へども、今一度上人の御恩顔を拜し奉り度候ひて、大阪より三日著に上洛申候と、高聲に宣ひて感涙に噎びたまへば、座中の人々各袖をぞぬらしける。同二十二日より、御往生所をあたらしく造建し給ひ、二十五日には、四方の土居を手輿にめして、御めぐりあり。伊勢土居にて御湯を召されて、あら潔しと御歡の氣色ましまし、御門徒の面々、御餘波ををしみ給ふ。同二十七日に御堂へ御出座ましゝて、御歸堂には手輿を後さまに昇せて入らせ給ふ。三月朔日には北殿へ御出行なされ、實如上人並に御連枝方同席にましまし、數刻御物語なされ、我今汝等への遺言には、更に餘事はなし、唯信心を決定すべしと仰せられける。同二日には下間五郎左衛門に仰付られて、櫻の花を御覽ありたきと宣ふ。その翌日吉野より櫻



を奉りければ、上人曰、御堂の四壁にも若木の櫻ありといへども、今此吉野の花は名所の櫻なりとつくづく御覽じて

咲きつゝ花見るたびになほもまたいと欣はしき西の彼岸

老らくの何までかくや病みなまし迎へ給へや彌陀の淨土へ

今日までは八十五にあまる身の久しく生じと知れやみな人

と口號たまひけり。誠に連日の御長病に侵され給ひて、御衰老の御氣色ことに不食にましませば、此

三四年の間に、御身體むかしの如くにあらず。耳目朦昧にして色を見聲を聞きたまふこと分明ならず

と仰せらるゝ處に、大漸の期近づき給ひて、二根あきらかにならせたまふこと日來に超えさせ給ひけ

れば、見聞の諸人みな隨喜し奉らずといふ事なし。時に慶聞房申上げられしは、上人御遷化の後は大

阪御坊を以て御本寺とし給ふべきや、山科御坊を以て御本寺とし給ふべきやと申されしかば、上人仰

せられて宣ふ。大阪山科には限らず、邊土遠境と雖も、一天無二の御眞影御座す所を、本寺とすべし。

我吉崎、出口、大阪、堺に居住と雖も、是を本寺と言可からず。其時節は近松に御眞影入せ給へば、近

松を本寺といふべし。當時は此山科に御眞影入らせ給へば、山科こそ今の本寺也。我出口に居住せし

時、江州堅田の法住房參ける。其時に空念房法住に對て申れるは、是迄遙々參れ候事有難く存候

路次に候程に、大津近松に在す御眞影へ、御禮申給ひてや候らんと申ければ、法住申けるは、御影

は何國にましますも同事にて候へば、我れ上人に御對面を望み奉り候と申す時、空念申しけるは、御

影は何國にましますも同事ならば、堅田邊には何ほど御影安置の人々は候に、此水邊の草深き葦屋

の中まで參られ候事はあるべからずと申したりしに、法住房返答なかりき。我れ此事貴く思ひて、文

にも書き置き侍りしなり。然れば本寺といふ事は、聖人御眞影のまします所をこそ本寺とはいふべ

れ。我は其留主職なり。已後に於ても此御眞影のおはします所を、本寺とすべきよし懇懇に仰せられ

き。同七日の曉、御自脈をうかひ給ひて宣ひけるは、あら嬉しや違ふ所あり、往生は近付きぬ。法然

上人の御詞に、淨土を願ふ行人は、病患を得て偏にこれを樂しむと仰せられしも、今わが身の上と思

ひしられたり。病はくるしけれども、樂はこれなりと宣ひしかば、醫師藤左衛門御脈をうかひ奉

るに、まことに胃の氣の御脈違ふ所ありと申上げしかば、上人さぞと覺えたりと仰せられき。さてし

ばらくありて今一度御影前へ御禮あるべきとて、御老邁疲惱の御身ながら、御病床の衣服を脱せ給ひ、

あたらしき衣裳を御着用なされ、腰輿にめされてまづ本營へ入らせられ、漸しばらく御念誦ありて、そ

れより東の縁側へ昇出すべしと仰せられ、庭より御影前へ御參りありて、聖人の御尊像に向はせ給ひ、

今生にての拜顔これまでなり。必ずかの國にて眞身に拜し奉るべしと、懇にのたまひければ、聞く人

みな袖をぞ絞らぬはなかりけり。

御辭世御詠歌の事并病床にて御物語の事

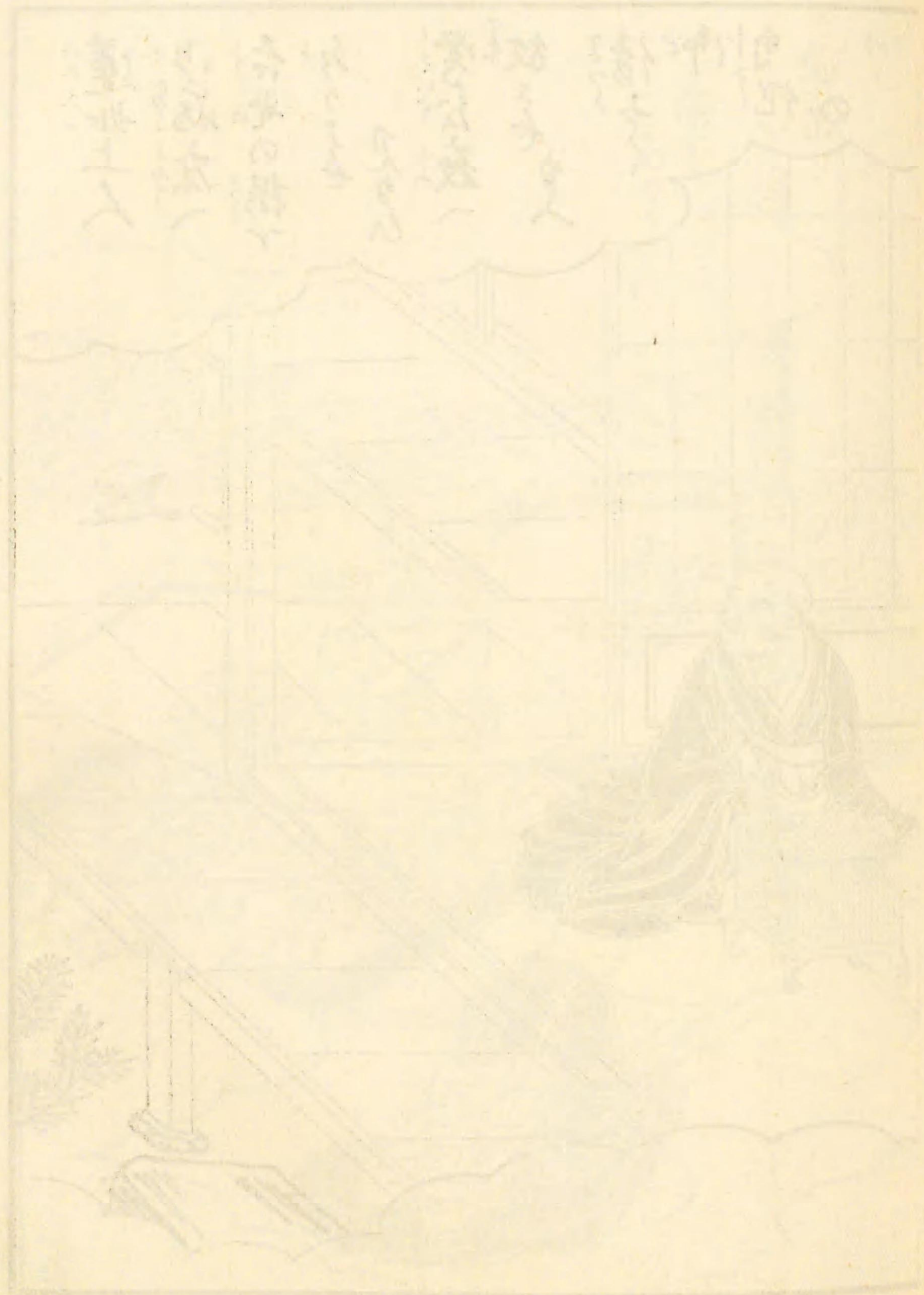


上人御歸堂なされんとて、堂前の花を見たまふに、色ふかく匂ひ、芳しき粧ひ、朝の露にぬれて麗しきを御覽まし／＼て、おもしろの風流かなと仰せられ、御堂の正面より丹後の法眼舎弟上野助その外御連枝中腰輿を昇奉り還御なしまるらせければ、今は本懷満足なりと御悦びなされ、御病床に臥したまひて、御辭世の御和歌、

我死なばいかなる人も皆共に雜行すて、彌陀を頼めよ

八十五つ定業きはまるわが身かな明應八年往生ぞすれ

同じき九日に、法敬房空善房加州小松の了珍等を召して、數刻法義の御物語ありて、上人宣ふは、空善この頃參らせたる鶯の囀る聲を聞けば法きけと鳴く。鳥類さへ法きけと鳴くに、人間として聖人の御門徒にてありながら、法を聞かざるは、鳥類に劣れり。此鳥の法きけと囀る聲にて、頃日は心をなぐさみける。然れども籠に入れたる事は不便なり。竹林へ放ちてやれとのたまへば、空善取つて藪へ放けるに、上人曰く、鶯此頃は籠の内、さぞ迷惑に思ふべけれども、法きけ／＼と鳴きけるありがたさに、けふまでは置きつるぞや。今藪の中へ放ちければ、嘸悦び申すべし。是につけても、人間の六道四生の籠の内を出でて、西方淨土の廣き竹林へ放され候は、如何ばかり悦ばしかるらんと宣へば空善申しけるは、よき鶯を奉りて、有難き御教化に預り候と悦び申しければ、座中の人々感涙をぞ催しける。





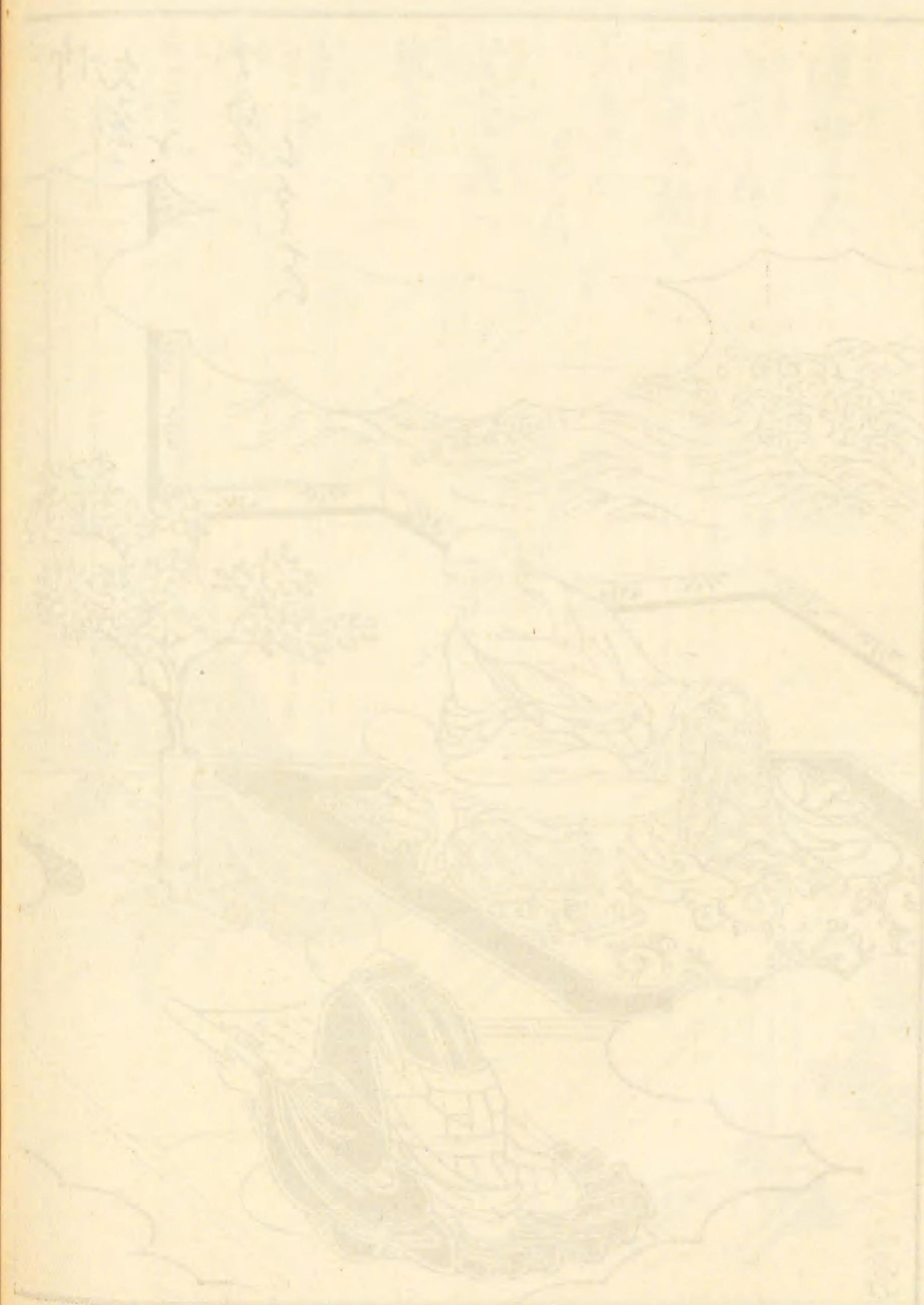




御文御聴聞の事并御秘藏の馬を御覽せらるゝ事

上人又慶聞房を近くめされ、何ぞ誦みて聞かせよと仰せられければ、御文をよみ奉らんと申上げしかば、上人然るべしと宣ふ。因之大阪御建立の御文を拜讀し奉る。二三返よみ申しければ、龍玄房代りて聖人一流の御文二三返讀み奉りしかば、上人宣ふやうは、あら不思議や我作りたる物なれども、殊勝に覺ゆるぞとて、御涙を落しまし／＼ける。道理なるかな、教行信證を六返、六要抄を五返、安心決定抄三返、表紙の破るゝほど御らんなされ、千の中より百を撰り、百の中より十を摘み、十の中より一をすぐり、凡夫往生の肝文をえらみとり、耳ぢかに心得やすきやうに書記し給ひければ、要が中の要文なり、自殊勝なりと仰せられしも、理とぞしられける。眞に聖教といふべきを、なほ卑謙したまひて、文と申すべきなりと宣へり。又一日御秘藏ありし栗毛の馬を御覽なされたまし仰せられければ、四間の内の疊二疊を上げて、御寢殿の際まで引よせられて御覽ありしに、此馬前足を延べて涙をながし、頭を垂れて尾をも振らず蹲踞りける。上人は漸少時御覽あるに、空善申上げけるは、誠に畜類なれども、上人を見奉りて涙を流しけるこそ不思議なれとぞ申しける。同十日そろ／＼と起上らせ給ひ、御病中の御容貌を圖畫に書かせられ、其御影像に書付けさせたまふ。銘文に曰、

獲一念佛今詣安養  
穢身永絶法性速證





とあそばされ、それより次第に御病氣重らせ給ふ。同中甸の頃には、御容體いよ／＼重りたまふ。上人宣ふは、我死せば大阪より持參せる曲条に乗せ、正信偈念佛して御影前へ移し申すべし。年來同行の印、又は佛法のよしみなれば見られたく思ふなり。名聞にはあらず、我遺骸を見る人々、法義にも入りやせんと仰せける。同十八日の仰には、我なき跡まで兄弟和睦せよ、信心にあらば、中のあしきことはなきものぞ。然らば法流もます／＼繁昌すべしと仰せられる。十九日より御食事御服薬も止めさせ給ひ、念佛ばかりをとなへさせたまふなり。二十二日より御相好少しづつかはらせ給ふ様に見えさせ給ふ。二十三日よりは御脈もあがらせ給へり。二十四日にはやがて御往生とて、法敬房空善房御傍近くまゐりて、御足をかゝへしかば、上人曰く、やがて極樂にて對面申すべし。繪像の本尊をかけ奉れと宣ふ。これによつて屏風にかけ奉りしかば、今生の御暇乞なり。やがて淨土に於て眞身を拜し奉らんと宣へば、法敬房も空善房も、目もくれ心も消入るばかりなり。

蓮如上人御遷化の事并御臨終に遇ひ奉る人々の事

三月二十五日の曉に、大地震鳴動し、朝日のめぐる事しきりになりしかば、見聞の諸人不思議の思ひをなせり。是則權化入滅の瑞相なり。時うつり夜も明けはなれぬれば、上人仰せられるは、師となり弟子となることは、多生の契恩なり。生ける内の對面は今にかざれり。やがて報土無生の再會を期すべしと宣ふほどに、日光東嶺に昇り、清虛雲はれて金色に變ず。前後に聚る一族親厚の人々、み

な五體を地に投げて涕泣咽涙せしむること限なし。然るところに山科郷の内、別して野村の御堂の前後左右の草木の若葉までも、悉く枯れて花も泪をそゞぎ、別を悲しみ、山野飛行の禽獸も足をとめ翼をたれて、偏に大聖世尊の御入滅の時に異ならず。終に明應八年己未三月二十五日午刻、正中に頭北面西右脇に臥したまひ、ねむるが如くにして、念佛の息たえまし／＼ぬ。于時春秋八十五歳、御身體柔軟にして、御相好常の如くに拜まれ給ふ。誠に日月西の雲にかくれ給ひ、法灯忽ち消えぬ。國郡の道俗悲傷し、遠近の門徒號泣すること、あたかも抱育の考妣をうしなふに過ぎたり。御終焉に値ひ奉る人々には、

- 大納言法印實如上人、權大僧都北林房、同蓮誓、三位法印蓮淳、權大僧都兼緣、權律師實賢、法印實悟、兼往、法印實考、同實從、中山中納言宣親卿、姉小路黃門基綱卿、下間安藝法眼、同五郎左衛門、慶聞坊、龍玄房、小松了珍、順誓房、法敬房、丹後法眼、同上野助、道德房、越前慶祐房、河内淨光房、淨賢房等なり。

六字名號奇瑞の事并祖師の尊像現し給ふ事

伏以ば、蓮如上人我朝に出世し給ひて、一流の法水を再興し、邊土遠境の群類を化益し、滅後に於て利益を遺代にあらはさんとて、明應第八彌生の空にかくれ給ひ、眼下靈異を見せ給ひけり。滅後に至りて、その遺徳多き中に、上人翰墨を投じ給ふ六字の尊號の中に、奇特不思議あり。今略してこ



れを書するに、或御門葉の中に、道場を焼失しける時、名號憤集して多く佛像となり給へるあり。あるは名號燒爛せしが、その字形ばかり明らかに残り。あるは名號破燃せしが、漸々に愈返るもあり。御入滅以後十箇年過ぎて、門葉の中にかの尊翰を安置し奉るに、常に燈明をもち、げざるに、名號のほとり輝き給ふ事あり。おどろいて是を拜するに、光耀あざやかにして、阿彌陀佛の四字の上に、忽ち方便法身の尊形出來たまへり。如是拜するあひだに、南無の二字の通りに、本師親鸞聖人の尊形鮮敷として現じ給ふ。その後又蓮如上人の容貌出來し給ふ。居緒を經星霜を重ねて、いよ／＼その形あきらかにして、佛像あまた出來給へり。上古にも季世にも、如是の奇瑞あるべからず。まことに是滅後の利益を末代に知らしめんとの御方便なり。凡上人在滅の妙事これ多しといへども筆するに遑あらず、略して僅をこゝに著し畢んぬ。

一休諸國物語圖會序

山居窮僧聽松風不須  
臨濟德山禪一箇住山  
三十年公案工夫了畢  
後長松風破罷參眠

虛堂七世龍寶門客

東海純一休老畫與詩一筆

それ一休和尚は、後小松院の二の宮にてましませり。世の人の耳に残れる御歌にも、後の小松の二葉と詠じ給ふも有りけるとかや。誠にいと賢くましく、尊き高位をふみちらし、大内ををどり出でて、十宗を只一目ににらみつけ、達磨宗となり給ひて、九年面壁を盜人のあとの棒ちぎり木と見立て、御身は麻からほど共思し召さず、浮世をへうたんよりもかるく持なし、よこしまなる事をきはせ給ひ、御心は誠や竹を二つにわりたる如く、路人の口碑に、あれは



舌の先の障とし侍ると仰られしは、いよ／＼有がたかりける。御幼年の頃より、才智萬人にすぐれさせ給ひて、諸國御雲水の間より諸人を導きたまひ、ます／＼御一代濟度の御意のみに渡らせ給ふ事の、咄しのふるき文どもの多きを、見るにつけ聞につけ拾ひ集めて、諸國物語圖會とはなしけるとかや。

止 水 敬 白

一休諸國物語圖會

卷一



といつば、爰をさる事遠からずと宣へば、この者申すやう、いや／＼左様に目の前に地獄ごくらくあ

和尙若年におはせしより、才智衆に勝れ、よく人を導せ給ふ。或人問ていはく、何に小僧をれ地獄極樂と申事ありげに候。しかしながら死後ならでは證據なきよし承はる、さもありぬべし。若人ありて惡事をなせば、死て三途の大河死出の山などいふ難所を越して、やう／＼地獄に入と申なり。さて又極樂淨土と申は、是より十萬億土と申せば、遙の道を経て參るとなれば、我等がやうなる不達者ものは極樂の事はさておき、地ごくへも行がたかるべし。此儀いかむ。一休こたへて夫地獄遠きにあらず。眼前の境界惡鬼外になし。淨土



りとのたまふとも、顯はれて見えねば合點ゆかず。小法師の分としては、委くしめし給ふ事成まじとあざ笑うて申ける。一休腹をたて、扱は其方は我を若年ものとあなどり給ふかとして、頓て一休繩をもちて後へまはり、かの者の首に引かけ、思ふさまにしめ付け、なんぢ是はいかにと申さるゝとき、此もの合點して、尤これ地獄なり。其ときまた繩をとき給ひて、汝かくあるときははいかんとの給へば、浄土なりとこたへ、其ま、合點して、さてもく小法師は、何のわきまへも有まじきやうにおもひあなどりしに、幼稚なれどもかくのごとく智慧ある事、わたくしならぬ事なりとぞかんじける。

一休十一歳のときの事なりしが、師の房他行したまひける留主の處へ、餘所より餅ひとつきたりければ、一休すこし割て、師匠のかへり給ふに取出して奉る。師もだうけ人にて、満月無片破闕は何地にかあるとのたまへば、一休そのころより智慧さかしくましますせば、直ちに返答に雲隱有是とてかの闕を出されける。此心は満月は丸くみちて、かけたる處なし。此餅も満月のごとく、まん丸にてあるべきに、かけたるはいかにと問ひたまへば、雲に隠れてこゝに有とこたへたる也。師うち笑給ひて、さても小賢き小僧かなとて、彼餅をみなたび給ひけるとなり。

一休御諱を宗純と申せしが、別號を一休と名付たまひける。ある人きたりて、一休と名付給ふ御心は、いかなる御心得にて侍るやと尋ねければ、よくこそたづねめされける。さりながら、一休にふかき心もあらざれば、かたりて聞すべきやうもなしとてかく、

有漏路より無漏路へかへる一休あめふらばふれ風ふかばふけ

と遊しければ、彼ものきゝて、扱もおもしろさうなる御歌や。有漏無漏とはいかなる事にておはしけるぞと尋ねければ、そばなる御拂子をとつて、彼者の顔をなで給へば、いや何事をかなさるゝとおどろきたるばかりにて、何とも心得ずと申す。一休が曰く、その何とも心得ぬところが無漏路なり。はつとおどろきし處が有漏路なりと仰られければ、彼俗肝を冷して、有がたや即時に大事をさづかりけるとよろこびて、扱御歌の一やすみとは心得申候。雨ふらばふれ風吹ばふけとは、何なる御心にて侍りけるぞ。さればよわづかの道のことなれば、雨も風もいとふ事侍らずと仰られければ、扱も有がたき御歌かな、おそれながら只今さづかり申せし心を、一首申てみると申しければ、夫はきとくなる心ざしやとのたまへり。かのものゝよめるは、

うろちむろち一休ぞときときは十萬億土すんさきとしる

と仕りければ、一休きこしめし、善哉々々として尻餅ついてよろこび給ひて、かゝる例しものこしにも侍りし事ぞ。四休居士といふ人ありけるに、山谷といふ人、その四休の心を問ければ、四休わらひて答ていはく、

- |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 三 | 平 | 一 | 満 | 過 | 即 | 休 |
| 三 | 平 | 一 | 満 | 過 | 即 | 休 |
| 三 | 平 | 一 | 満 | 過 | 即 | 休 |
| 三 | 平 | 一 | 満 | 過 | 即 | 休 |
| 三 | 平 | 一 | 満 | 過 | 即 | 休 |



と申されければ、山谷がいはいく、是安樂の法なり。それよく少ときは不伐の家なり。足る事をしるは極樂の國なりと感じて、したしく語りて四休の心を得、三首につくりうたひ樂しみしとかや。其一首に、

富貴何時潤骨體 守錢奴與抱官囚  
大醫診得人間病 安樂延年萬事休

と有りしによく似たり。一休の心をとひて、今其方の歌よむ事よと感じたまへば、彼人申すやう、一休の二字をたづねて、四休の四字をしる事、求めずして得を幸と註したり。これ幸なりとよろこびけるが、かの四休のうち、三平二滿とはいかなる事やらんと申しければ、其方の内方よとのたまへば、合點まるらず見にくきといふ心かといへば、いやさにあらず。おとごせのことなりとのたまへば、扱もめづらしきことかな。誠に三平は兩の頬と鼻二滿は額と願よ。さてもおもしろき事也。さりながら女どもに聞せなば、一休さまをつめり申べしとわらひて歸りける。

和尚幼稚きときより、常の人にはかはり給ひて、利根發明なりけるとかや。師の坊をば養叟和尚と申しける。こびたる旦那ありて、常にきたりて師の坊に參學などし侍りては、一休の發明なるを感じ、折々はたはむれを云ひて問答などしけり。或ときかの旦那皮袴を着て來りけるを、一休門外にてちらと見て、内へはしり入りへぎに書付立られけるは、

此寺の内へかはのたぐひかたくきんせいなり。若皮の物入るときは其身にかならずばちあたるべし

と書付て置たり。かの旦那これを見て、皮のたぐひにばちあたるならば、此寺の太鼓は何とし給ふぞと申ける。一休聞たまひさればとよ、夜晝三度つばちあたる間、其方へも太鼓のばちをあて申さむ。皮のはかまをきられけるほどにとおどけられける。そののちかの旦那養叟和尚を齋によぶとて、一休も御供にと申し、かの返報せばやとたくみけるが、入口の門のまへに橋ある家なりければ、橋のつめに高札をかなにて太く書てたてける、

此はしをわたることかたくきんせいなり

と書付ける。養叟和尚齋のじぶんよしとて、一休をめてかの人のかたへ御出あるに、橋の札を御覽じて、此はしわたらでは内へ入べき道なし。一休いかにと有ければ、いや此はしわたることとかなにて仕たれば、まん中を御渡あれとて、真中を通り内に入りたまへば、かの者出合て禁制の札を見ながら、いかで橋をわたり給ふぞとがめければ、いや我は端はわたらず、真中をわたりけるぞと仰られければ、亭主も口をとちけるが、何がな不審申さむとて、又はいはいく、凡沙門の形といつば忍辱二體の衣を着、罪障さんげの袈裟をかけてこそ僧とは申べけれ。いかに小僧なりとて、俗衣の出たち心得がたく候と申せば、一休幼けれども、歌一首をよみて答へらる。



着てきたぞ本來空のくろ衣そでながからで人こそしらね

とよみ給へば、旦那も養叟も手をうち、口をあいて塞ぎかねられけるとなり。扱御齋を出しけるが、今一度不審せばやおもひ、一体にはわざと魚類の膳をすゑける。めづらしくやおぼしけむ、ひたもの喰ひ給ふ。ときに旦那のいへるは、人しれぬ衣召たる御僧の、したゝか魚をまゐることよとたはむれければ、一体聞きたまひて、口は鎌倉海道なれば、貴きも行きいやしきもすぐとのたまへり。こらへかね、かゝる物もとほり候哉と、刀をすゑるとぬきけるを、一体すこしもさわがず、敵か味方かと問ふ。敵なりといふ。しからは通す事ならず。いやみかたなりといへば、其まゝけへんゝとのたまひて、くせものがとほるとて、只今俄に關がすわりたるはといひ給へば、旦那も和尚も此の小僧の口にはかたれまじとて言葉なく、舌の根をふるひてやみぬ。

一体十二歳のとき、門前なる小溝にて、中ぬき大根をあらひ居たまふ所へ、雲水の僧大徳寺に止宿を求めんがため來かゝりて、たはむれに小僧大根をあらをかといひしに、一体やにはに持たる中ぬきをふり上げて、なに出家をとらへて小僧といひ、小根を見て大根とはいかにといひさま打てかゝり給へば、彼雲水の僧は一句の答へもなさず、舌をまき足のふみ所をわすれ、鷹ヶみねさしてにげ行しとかや。十七歳の御とき引導し給ふ。或とき下賀茂邊を通りたまふ折ふし、途中に死人あり。一体たちより引導をさづけ給ふ。ときにある人見て思かなり小僧、死人にむかつて何事をいうたりとも、耳に入るべ

きや、いかんといふ。一体答へていはく、芭蕉無耳雷之音聞則自出す。此文のこゝろは夫ばせをとい

ふものは、耳もなく目もなければ、芽を出さんとおもふときは、雷の音を聞て則芽をいだすとなり。斯のごとくの非情草木のたぐひまでも、因縁加合のことわりあり。いはんや人間においてをや。彼是

もつて同事なりと返答したまへば、このもの實もおもひけん、一言の答へにも及ばず立さりけり。上京に糸や由右衛門といふ者あり。内々一休和尚の答話よきこと、古今無雙のよし承はり、いつぞは紫野へまゐり、何にてもめづらしき事をうけたまはらん。左なくば此方へ齋に申入るべきと、かねが

ね思ふ折ふし、和尚旦那かたより歸りたまふに、途中にて行合さて一段の處にて、御目にかゝり候ものかな。序ながら明日少し志す日にさしあたり候。御坊さまへ御齋を進じ度候。兼々御寺へ伺公いたし申すべきとぞんじ候處、幸是にて御めにかゝり候。必々と申せば、和尚心得申候

さりながら宿所はいかんととひたまふとき、此人宿は室町通ぞんじよ其所なりといひてわかれぬ。一休心得さて翌日早天よりこしらへ、彼もの、宿を尋ね行給ふに、此者もすこし心あるものにて、店にちひさき鉈をつりて置けり。小さなたを釣たるは、こなたといはん事なりと判じ、頓てうちに入たま

ふが、また座敷の口に犬のかはを敷たり。和尚ざしきへ通らるゝときに、亭主出合さて今日折ふし路次あしく、御大義の御事なり。御足よこれ候はん。洗足まゐらせんと申す。一休いやゝ只今かはを越えてまゐり候ゆる、すこしも苦しからずと仰らるゝに、亭主扱こそ早一ぱいくはされたりと



思ひ、さて御膳をこしらへ出す。和尚ふたを取て見たまへば、何れにも小糠を一ぱい入れたり。一休さあらぬ體にてゐたまふ處へ、亭主座敷へ出れば、一休さて、今日の御志は、三七日にて候かと仰らるゝに、亭主いよいよ感心し、やがて和尚座を立給はんとするとき、亭主はなほもこゝろを引んとて、錢百文をとり出し、これは今日の布施にまゐらするなり。是へよらずして居ながら御請あれと申すに、一休きもあへず心得申候、是まゝにてうけ申べし。さ候は、投ずにこゝへ賜はり候へと申さるれば、亭主いよく感じ、扱々御坊さまは、きゝおよびたるよりは答語僧にてまします。凡人はしばらく思案して申出すに、いまだ舌も引入ざるうちに、早くも斯く仰らるゝ。古今まれなる御坊さまやとかんじける。

和尚さる川邊を通り給ふに、女のはだかに成て居けるを見たまひ、陰門をめざして三度禮拜してすぎたまふ。折ふしありあふ人々是を見て、さてもあの僧は狂氣か。出家の身とし、女のはだかになりたるを見て、三度ふし拜みてゆかるゝは、いかなる事やらん。いかさまにも狂氣なるか、さもなくばかかる事はし給ふまじ、めづらしき事なり。いざ近づきて子細をたづねん。げにもつともなりとて、我もわれもとあとを慕ひ、やがて追付そでを引き、御坊た、今女のはだへを見て、禮拜し給ふはいかなる因縁やらん聞まほしく候。但し佛道修行にかゝる事やましますか、いかにとと、せめかけて問ひければ、一休うむの事にもおよび給はず、斯いひすて、過ぎ給ふ。

女をば法の御くらといふぞ實にしやかも達磨もひよいくと生む

といひすて、こそ通りたまふ。いかなる坊主やらんとふしぎなすに、しる人ありて、あれこそ一休なりといひし人あり。さてこそ彼僧ならでは、かやうのこといふべき人ありとも思はず。殊勝やな、世の中の坊主ならば、女の肌を見たらんに、心ちよげにねぢかへり、目もはなたで行くやらん。かく禮拜なして通り給ふこそ有がたけれ。實にも女の胎内より、貴人高位も出給ひ、諸宗の高僧たちも出らるゝぞかしと、人みな尤とかんじける。

下立賣堀川邊に道意と申すものあり。ある時一休を齋に申し入れ、よろづはなし終りて道意申されけるは、和尚さま某は娘一人もちて候が、さんぬる春の頃隣町へ縁に付申候が、やゝもすれば姑とからかひて歸り候。親の身に候へばなんぼうめいわくにぞんじ、色々意見申ては歸し候こと度々におよび候。和尚さまは智者にてましますせば、おもしろき因縁ばなし候は、そと御物語きかせたまへかし。よく覺おき、娘の諫言のため申聞せなば、すこしは聞入ことも侍らん。和尚き、給ひ、それがし一とせ修行のみぎり、關東にての事なりしに、是は姑女にあしくあたる女なるが、たちまち其むくい歴然なりし事あらゝかたり申さん。下野にての事なりしが、しうとめ久しく病みてなやみけるを、其子深くなげきて、醫師をよび療治しけれども、さらに験なく日を送りけるが、あるときいしや申すやう、此病にはぶたのきもを煮てあたへなば、忽ち本腹あるべしといふ。さらばとてぶたのきもを求め、是



をよく煮て母にすゝめよとて、妻にわたしてその身は他行しける。この妻つねく、姑をにくみ、老病の事なればせんなき薬ぐひなりと思ひける。折節その孫嫁、子をうみければ、其えなを密にとりてよく煮て姑に勧め、ぶたの肝はかくしておのが薬ぐひにぞなしたりける。程なく赤いろなる蛇、かのよめの口へ飛入りける。尾四五寸ほど口より外へ残りけり。その嫁なきさけびもだえぬる事いふばかりなし。まことに奇代ふしぎの事なれば、聞き傳へ見物の人おほくあつまりけるが、老たる人の見るときは、尾をうごかさず。若きもの、見けるときは、此蛇尾を右左り、上下へうごかし、女の顔をたゞきけるこそおそろしけれ。ある人釘ぬきを以て蛇をはさみ引ぬかんとしけれども、尾のかたき事黒がねの如くにて、奥へは入といへども、すこしも口へは出ざりけり。かくのごとく惱む事三日にして、つひにはむなく成にけり。これといふも、つねく、姑にあしくあたりしむくいなり。姑の口へ入れまじき胎衣をすゝめ、我口へくふまじきぶたのきもを、ぬすみくひける惡逆によつて、かくのごとく口へはいるまじき蛇の飛入ける事天罰なり。かたちに影のしたかふごとく、おそろしき事なりけりとかたりたまへば、夫婦ともに手をうつて、あら恐ろしやとかんじける。道意また申しけるは、和尚さまそれがし此ごろあたらしき枕屏風をこしらへ申候。これはむすめが方へおくり申す心得にて候。何にても一筆あそばし下されと申すに、一休やすき事なりとて筆とりよせ、

萬一人事一口むやく總而壁に耳岩に口姑夫唯主おやとあふぐのみ

我男げにたいせつにおもひなばなどしうとめの見にくかるべき

むねの火のもえたつときの有るならば心の水をせきとめてけせ

とかやうに書てたびけり。此屏風今に傳り侍るとぞ。

一休人を殺すものに證據をひき、得道させたまふ事あり。こゝに早川治郎太夫と申すもの、和尚のもとへ行申さるゝは、それ人をころすに其理もつともならば、千萬人を殺ともくるしかるまじ。又殺すまじき其理なくば一人なりとて、惡逆無道なるべしと申しけるとき、和尚仰られけるは、それ殺生はもろくの罪の根本なり。たとひ生ずる物においては、のみ虱にてもころす事あるべからず。同はただ殺さるにはしかじ。男こたへ申すやう、少もくるしかるまじ或は主命と申し、又はほうばいどもにたのまれぬれば、是非なく殺す事あり。かくあるときは、其たのみたるものこそとがならん。我はまつたくとがはきまじと、利口氣に自慢して申す。和尚舌も引入させずして、汝あの柳に雪つもりたり、枝おもげに見え候。はらひてたびてんやと仰られける。心得申し候とて柳蔭に立より、ふりおとしければ、かしら袖のうへに雪ちりかゝりしをうちはらふとき、和尚の曰く、汝いかなれば雪をはらひ給ふぞ。某がたのみ申せば、某にこそちりかゝるべき事なるにやと仰らるれば、此人はたと行當り、それよりしてかさねて殺生をやめけるとかや。是に依ておもへば、いかに人をころす罪科なりといふとも、朝敵をほろぼし惡逆のものをたいぢせん事は、いく千萬人なりとも苦しかるまじ。一人半童な



りとも、殺すべき道理なくば其責おもかるべし。されば人を殺すにおいては、もつとも害すべき道理なれども、さむらひの餘にすぎこのみて、きるべき事いかゝあらん。然ればころすべき道理の内に、またきるまじき道理あるべし。よくよくこゝろうべし。

爰に木屋平次郎と申すもの、きはめて長ちひさきいろくろき男なり。世間の人々これをあざけり笑ふ事よの常ならず。まして他所へ用事をとゝのへに行ことあれば、指をさし子どもあまた付したうて、道をも安からしめねば、おのづから歩をなすことならず。あるとき少し心ざす事ありて、一休和尚を請じ、我身の不具をつぶさにはなし、今更これをくいかなしむ。一休仰らるゝは、生質たる身をちひさきとて何とすべき。左やうの事をかなしむものにあらず。其子細は金はちひさきものなれども、天下のたからとなる。針はちひさけれども衣服をぬふ寶となる。墨はくろけれども、佛經祖錄聖經賢傳の書をしるして、天道の助となる。漆はくろけれども、諸道具を助けたり。山は高しといへども貴からず、樹あるを以て尊しとす。霜雪は白けれども萬民これをいためり。たとひ肥ふとりたる人が、いかほど瘦細りたくねがひたりとも、かなふまじ。しかるを強てやせ細らんとくひものをとめ、かたちをちいめたらばとて、必ず氣血をへらし、病を生じ身命あやふかるべし。又瘦ほそりたる人、何程こえ太りたしとねがふともかなふまじ。肥太りたらんと飲食物たくさんにして、寐伸居のびをせば、必氣血をみだらし食傷して、うらしげく牛の糞のかさねゝなるを寐所にも包おき、後には俊寛僧都

の鬼界がしまに住し、ありさまになりなば、命もすでにあやふかるべし。されば薬師如來の出世、耆婆へんじやくが再來して、薬をあたへ療治する共、いかでその驗を得ん。しからは天の黑白脊の長短も又かくの如し。爰におもしろき咄あり。さる所に才覺利はつの人あり。此男いかに脊がらんちくりんにて、我身ながらもうらめしく、悔かなしむ事せつなり。餘りむねんさにつくゝと思案しけるに、我身こそかくありとも、是非子どもにおいては、脊の高き子を持べし。さあらばまづ女房をむかへんに好あり。みめかたちには少しも望なし。只脊の高き女を尋るに、其脊六尺餘にて無雙の悪女あり。いそぎこれをむかへとり、夜晝かせぎけるほどに、程なく此女懷妊して九月をも過て、程なく産月ひもとく。よろこび取あげて見れば娘なり。あつばれ男子にてあれかしと願ふ處に女なり。捨べきにもあらず育てけり。かくて此度は是非に男をまうけんゝとかせぐ程に、うむ程にゝつゞけさまに女子ばかり五人までうめり。彼男あら腹立や無念やと、怒りをめきけれども甲斐もなく、つぶさうの捨うのとどやけども、流石さうもならず、養育するほどに、成身するにしたがひ、何れも母親に似て色黒く脊高く、鼻筋ひしげ頬にえ、俯きにころぶには、一ツの徳には鼻の用心いらす。眼細くくびさき驚などの如にて、六尺ゆたかの女なり。むことり嫁入ならざれば、何とももてあつかひたる有さまなり。何事もかやうの事を聞くからに、諸事悔かなしむ事あらじと、言葉に花を咲せて語りてこそ歸りける。



さる人<sup>ひと</sup>一<sup>いつ</sup>休<sup>きゅう</sup>の草庵<sup>そうあん</sup>へ尋<sup>たづ</sup>ね行<sup>ゆ</sup>き、和尙<sup>わしやう</sup>にあひ奉<sup>たてまつ</sup>りて申<sup>まう</sup>すやう、我等<sup>われら</sup>文盲<sup>もんまう</sup>ふつ、かもの候<sup>さふら</sup>へば、耳<sup>みみ</sup>がたき事は聞<sup>き</sup>てもきかざるがごとし。何<sup>なに</sup>にてもおもしろき事<sup>こと</sup>候<sup>さうら</sup>は、御<sup>おん</sup>はなしたまはれと申<sup>まう</sup>すときに、和尙<sup>わしやう</sup>されば唐土<sup>たうど</sup>に虎<sup>とら</sup>きつねを追<sup>おひ</sup>つめ、すでに喰<sup>くら</sup>はんとするに、此<sup>この</sup>狐<sup>きつね</sup>の申<sup>まう</sup>すやうは、いかに虎<sup>とら</sup>よくきけ、必<sup>かなら</sup>ずわれをくらふ事<sup>こと</sup>なかれ。今日<sup>けふ</sup>よりして某<sup>それ</sup>がしをもろくの獸<sup>けもの</sup>の大將<sup>たいしやう</sup>に、天道<sup>てんたう</sup>より仰<sup>おほせつ</sup>付<sup>つ</sup>けられたり。さる程<sup>ほど</sup>に汝<sup>なんぢ</sup>我<sup>われ</sup>をぶくするならば、天命<sup>てんめい</sup>に叛<sup>そむ</sup>き忽<sup>たちま</sup>ち汝<sup>なんぢ</sup>が命<sup>いのち</sup>めつすべし。若<sup>もし</sup>此事<sup>このこと</sup>いつはりと思<sup>おも</sup>ふならば、我<sup>わが</sup>あとにつきて供<sup>とも</sup>をして參<sup>まか</sup>るべし。もろくの獸<sup>けもの</sup>の我<sup>われ</sup>を見て、かならず恐<sup>おそ</sup>れをの、きにげかくるべしといふ。虎<sup>とら</sup>ふしぎにおもひ、さらばとて此<sup>この</sup>狐<sup>きつね</sup>のあとに立<sup>た</sup>てゆく。もろくのけだものども案<sup>あん</sup>のごとく、みなちりぐににげかくれ、おそれをの、きひれふす。其<sup>その</sup>仔細<sup>さいし</sup>は此<sup>この</sup>きつねを恐<sup>おそ</sup>れにぐるにあらず。あとなる虎<sup>とら</sup>を見てもろくのけだものは、にげかくれおそれをの、くなれ。されども虎<sup>とら</sup>はまことにかの狐<sup>きつね</sup>に恐<sup>おそ</sup>れをなすと思<sup>おも</sup>ひ、天命<sup>てんめい</sup>をおもんじ、かへつて守護<sup>しゆご</sup>をなしけるとかや。そも大<sup>おほ</sup>きな化<sup>け</sup>やうかな。されば世間<sup>せけん</sup>の家々<sup>いへ</sup>にもかの狐<sup>きつね</sup>こそ多<sup>おほ</sup>ければ、化<sup>け</sup>され給<sup>たま</sup>ふな御用心<sup>ごようじん</sup>。爰<sup>こゝ</sup>に能勢<sup>のせ</sup>小作<sup>こさく</sup>といへる大<sup>おほ</sup>すりきりの惡<sup>わる</sup>る賢<sup>がしこ</sup>きものあり。時<sup>とき</sup>しも極<sup>ごく</sup>月<sup>げつ</sup>二十七<sup>にち</sup>八<sup>じゅう</sup>日<sup>にち</sup>比<sup>ひ</sup>の時<sup>とき</sup>の事<sup>こと</sup>なりしが、借錢<sup>しやくせん</sup>にこひつめられ詮<sup>せん</sup>方<sup>かた</sup>なく、方々<sup>はうはう</sup>をかけまはりさいかくしけるに、我<sup>われ</sup>も人もめんぐに用<sup>よう</sup>ある折<sup>せり</sup>かなれば、我<sup>われ</sup>用に立<sup>た</sup>つべしといふものなし。しかるに粟田<sup>あはた</sup>口<sup>ぐち</sup>邊<sup>へん</sup>に、彦八<sup>ひこ</sup>と申<sup>まう</sup>して富<sup>とみ</sup>さかえの町人<sup>ちやうじん</sup>あり。かれが處<sup>ところ</sup>へ尋<sup>たづ</sup>ね行<sup>ゆ</sup>き、からばやとおもひ、粟田<sup>あはた</sup>口<sup>ぐち</sup>へといそぎける。此<sup>この</sup>彦八<sup>ひこ</sup>と申<sup>まう</sup>すもの、いかなる前業<sup>ぜんごふ</sup>の

つたなきにや、朝夕<sup>あさゆふ</sup>の飲<sup>いん</sup>食<sup>しょく</sup>とは黒米飯<sup>くろこめい</sup>にみづしるにてくふほどの者<sup>もの</sup>なり。かれにかくといひけるが、くだんの如<sup>ごと</sup>くつましきものなれば、我<sup>わが</sup>身にさへをしみ、朝夕<sup>あさゆふ</sup>の食<sup>しょく</sup>をだにも、ときに取<sup>とり</sup>ては一度<sup>いちど</sup>もかんにんする程<sup>ほど</sup>のものなるゆゑ、まして親類<sup>しんるい</sup>すら猶<sup>なほ</sup>もつて、他<sup>た</sup>の用<sup>よう</sup>に立<sup>た</sup>つべき事<sup>こと</sup>おもひもよらず。かつて取<sup>とり</sup>合<sup>あ</sup>申<sup>まう</sup>さねば、是非<sup>ぜいひ</sup>なくして歸<sup>かへ</sup>るとて、

たからともならぬたからは彦八<sup>ひこ</sup>が持<sup>もち</sup>たるかねは我<sup>わが</sup>身<sup>み</sup>きん玉<sup>たま</sup>

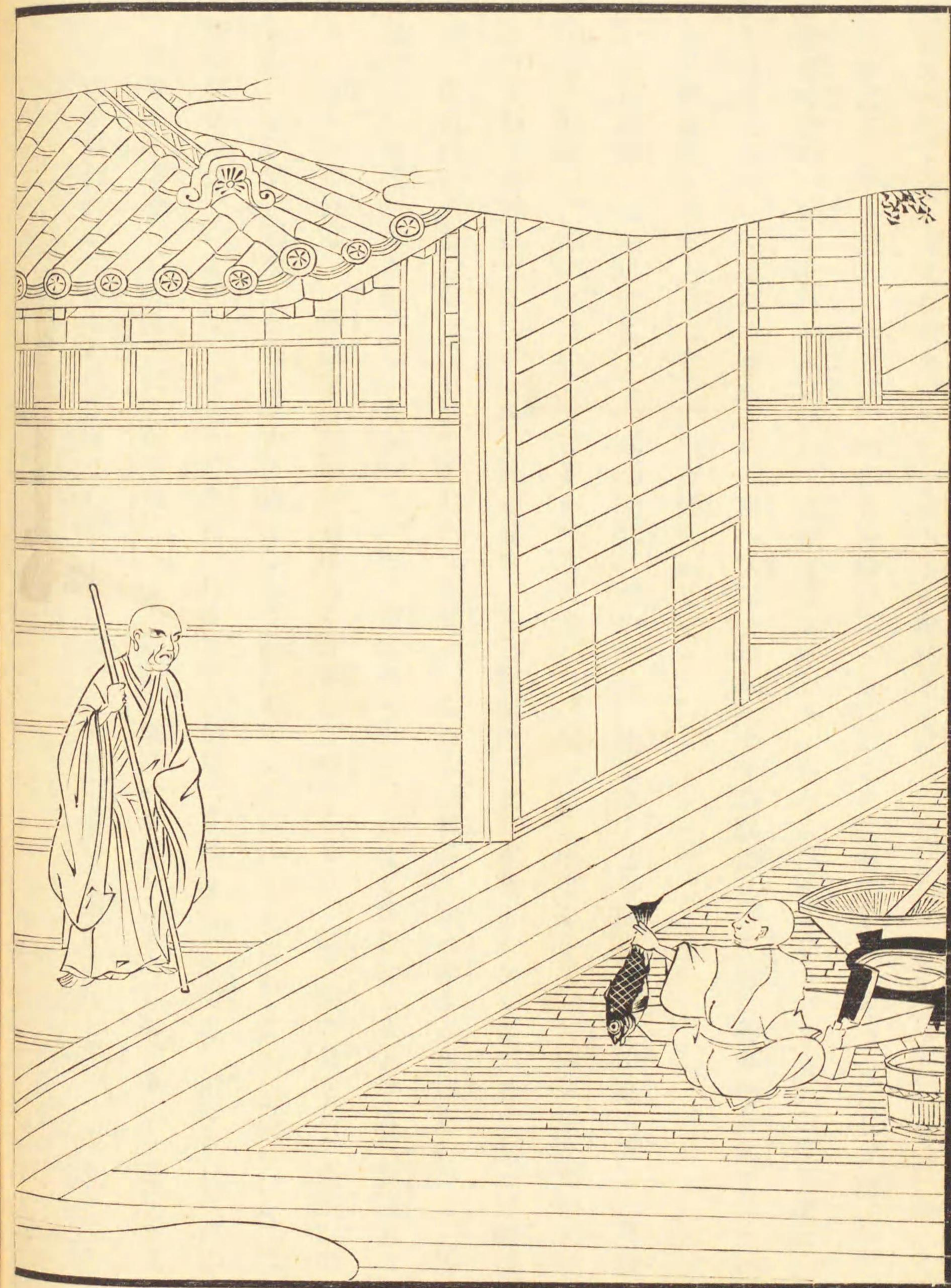
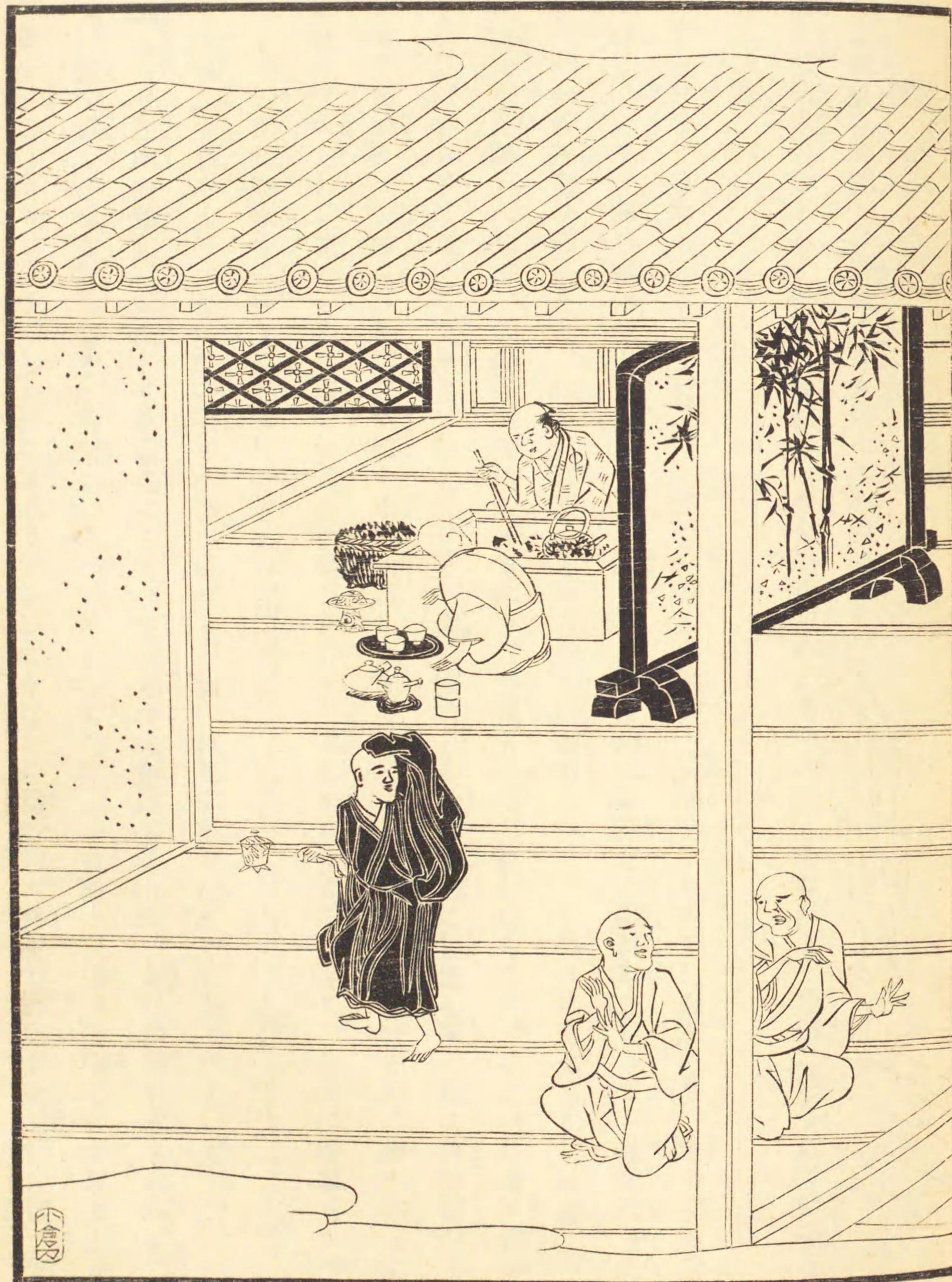
とよみすて、こそかへりけれ。さる人の申<sup>まう</sup>しけるは、一休<sup>いつきゅう</sup>和尙<sup>わしやう</sup>へ參<sup>まか</sup>りなげき給<sup>たま</sup>は、さだめて和尙<sup>わしやう</sup>はじひふかくまします程<sup>ほど</sup>に、すこしは給<sup>たま</sup>はらん事<sup>こと</sup>はよもあらじ。はや、參<sup>まか</sup>られよ。殊<sup>こと</sup>に其<sup>その</sup>方<sup>かた</sup>のよろしきときは、相應<sup>さうおう</sup>の用<sup>よう</sup>事<sup>じ</sup>を度々<sup>たびたび</sup>かなへられし事<sup>こと</sup>なれば、其<sup>その</sup>方<sup>かた</sup>の事<sup>こと</sup>は和尙<sup>わしやう</sup>、かげにても念頃<sup>ねんころ</sup>に仰<sup>おほせ</sup>られ候<sup>さふら</sup>まま、御<sup>おん</sup>うけあひ給<sup>たま</sup>はぬ事<sup>こと</sup>あるまじ。とくくと申<sup>まう</sup>せば、此<sup>この</sup>者<sup>もの</sup>げにもと同意<sup>どうい</sup>して、やがて和尙<sup>わしやう</sup>へ參<sup>まか</sup>る折<sup>せり</sup>ふし、和尙<sup>わしやう</sup>に出<sup>いで</sup>あひ給<sup>たま</sup>ふ。先<sup>まづ</sup>四方<sup>よも</sup>のはなしニツ三ツ仕<sup>つかまつ</sup>り、序<sup>ついで</sup>よきときを見<sup>み</sup>合せ申<sup>まう</sup>しけるは、いかに和尙<sup>わしやう</sup>さま、それ人間<sup>にんげん</sup>は四百四病<sup>びやう</sup>の其中<sup>そのなか</sup>に、貧苦<sup>ひんく</sup>ほどつらき病<sup>やまひ</sup>はなしと、古<sup>こ</sup>人<sup>じん</sup>も是<sup>これ</sup>をかなしめり。されば御<sup>ご</sup>僧<sup>そう</sup>も内々<sup>ないく</sup>それがしが年月持病<sup>としつきぢびやう</sup>御<sup>ご</sup>存<sup>ぞん</sup>じなり。ことに此頃<sup>このころ</sup>しきりにさしおこり候<sup>さふら</sup>。さる醫<sup>い</sup>者<sup>しや</sup>に尋<sup>たづ</sup>ね候<sup>さふら</sup>はば、此<sup>この</sup>煩<sup>わづら</sup>ひは我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>が療<sup>れう</sup>治<sup>ぢ</sup>にはかなひがたし。かやうの病<sup>やまひ</sup>はつひに醫<sup>い</sup>書<sup>しよ</sup>にも見<sup>み</sup>え申<sup>まう</sup>さず。然<sup>しか</sup>れども曾<sup>かつ</sup>て病<sup>やまひ</sup>の名<sup>な</sup>を申<sup>まう</sup>さねば、醫<sup>い</sup>者<sup>しや</sup>の見<sup>み</sup>立<sup>た</sup>をしらざるに似<sup>に</sup>たり。多<sup>た</sup>分<sup>ぶん</sup>此<sup>この</sup>わづらひは、積<sup>しやく</sup>金<sup>きん</sup>といふわづらひなり。いか成<sup>な</sup>る者<sup>もの</sup>婆<sup>は</sup>へんじやくにかゝりたりとも治<sup>ち</sup>しがたかるべし。妙<sup>めう</sup>藥<sup>やく</sup>金銀丸<sup>きんぎんぐわん</sup>をもらひてのみ給<sup>たま</sup>は、即<sup>すく</sup>



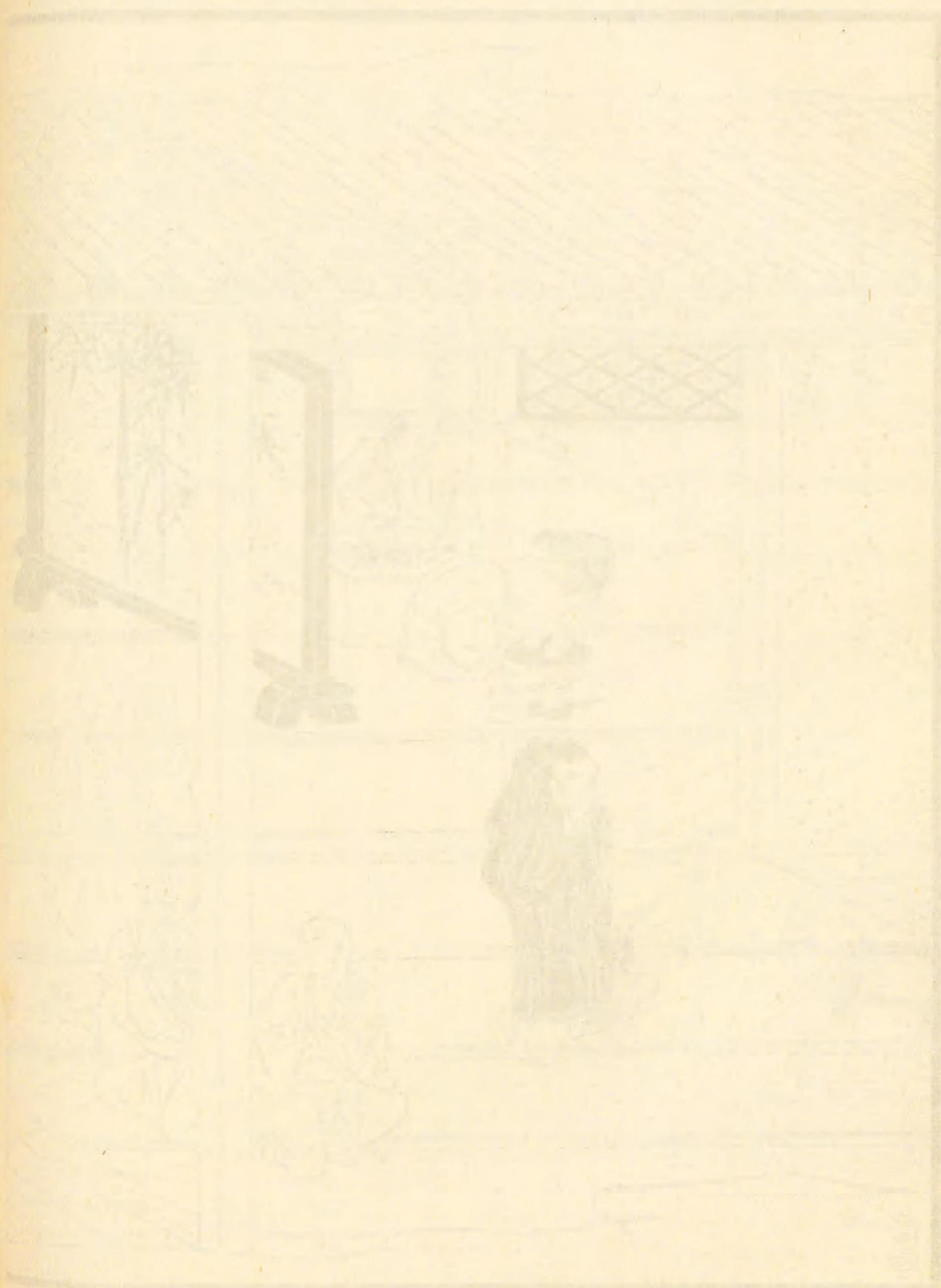
時に治すべしとをしへられけり。もし和尚さまに御持あらば、一包御はうしやにあづかり度候と、なみだをばらくと流して申せば、和尚さま給ひて、さればこそ其病は年に二度づつおこる病なり。まづ當月今ごろ、秋は七月中旬、何れも遠國までもはやり、わづらひ申すなり。さもあらば愚僧すこし持あはせたり。一包まゐらせんとて、奥へ入たまひ銀一つ、み取出し、上書に養命補身丸とかきつけ、もし再發のときはしらぬなり。早々歸られよ。

和尚いまだ小僧にておはせしとき、師の御坊につかへて、物よみ手ならひなどして居給ふ折ふし、夜さむのころなれば、師の坊はからぎけをあつものとして、たいひとりまゐりて、一休へは豆腐やうの物ばかりまゐらせられけるに、一休これを見て、凡そ出家はなまぐさきものをくはざるよしうけ給はりしが、師匠はからぎけをまゐるはくるしからず候か、さあらば我等もたべ申さんと申されける。師の坊をかしくおぼしめされ、なんぢがやうなる小僧の身として、なまぐさき物くふときは、一休罰あたるなりと仰られければ、一休眉をひそめ、しばらく思案して申さるゝは、同人間の身として小僧にのみばちあたらむや。老僧こそなまぐさき物まゐらば罰はあたるべけれど、あざわらひておはしければ、師の坊のたまふは、いとけなき身として心たけたる言やうかな。さればよ、老僧とて御ゆるしなけれども、我等は引導をして喰ほどにといひたまへば、その引導はいかなることやらん。少しうけたまはりたしと申されければ、扱々わごせはこしやくなる人や、いで引導して聞かさんとて、一盃もりたる









からざけをさゝげて、箸おつとりのべてのたまはく、

汝元來枯木のごとし、助んとすれども生て二度水中にあそぶことあたはず。愚僧に服されて佛果を得よ。喝。

とのたまひて、ひたものまゐりける。一休つくぐと聞て、又眉をひそめてしあんして、夜の明るを待かねて、いそぎ魚の棚へはしり行き、さも大きくしたゝかなる鯉を一獻買取きたりて、味噌汁をこしらへ、かの鯉をひんにぎり、ながたなおつとりのべて、細首ちうにうち落さんとせられける處へ、師の坊たち出御らんじて、これはきたのかぎりなり。昨夜もしめし教しごとくに、いとけなき小僧の身として、からざけたにも無用といひしに、その生てはたらく物を害して食はん事、以の外の事なりといましめ給ふ。一休もさわがず我等も引導おはしますとて、去らぬ體におはしけるが、師の坊もあきれはて、大にわらひて、それはいかなる引導ぞや、もし尤しからばゆるすべし。しからずはのがすまじとて、かの御家の一棒をこわきにかい込み、引導いかにとせめられける。一休すこしもさわがず、いで引導仕らんとて、左に鯉の細くびひんにぎり、右にはながたなをしやにかまへていはく、汝元來生木の如し。助んとすれば逃んとす。生て水中に遊ばんよりは、如じ愚僧が糞となれ。喝。とて、鯉の細くび水もたまらずうち落し、ぐつくと煮てしたゝか喰ひて、空うそ吹いておはせしかば、師の坊これをみて、さてもよき引導ぶりて手がはりなる心得かな。昨夜われらが引導にては、か



らざけは佛果を得ずして糞と成りぬべし。汝が鯉はくそとはならで佛果を得たり。さてく活機なる人や、禪僧なるぞや小僧どのおとて、彼の一棒をからりとすて、舌をふるひての給ひけるは、三年になる鼠を今年生れの猫が取とはかゝる事をや。とかくに汝はたゞものにはあらじと感じたまひけるが、案のごとく程なく天下老和尚と、みづからのたまふ程の活祖師にて、一休とて名を千歳に傳へ給ひて、田をかへす爺、のりをする尼までも、物語の種と人にいひもてはやされ給ふ事、誠に凡人にてはましまさざりける。

一休和尚は蛸が御好物にて、或日つれづれに蛸を買につかはされけるに、をりふし店にきれてなかりける。彼つかひの者こゝかしこと尋ねたる故、おそかりしかば待わび給ふまゝ、

此たびはいそぐといふにながそでのたこの入道みちのおそさよ

とぞしける處へ、蛸四五はい買もて來りければ、一休よろこびて、此のたこむぎくと食んもむざんの事なり。引導の願なくてはとて、

千手觀音蛸手多 斬懸二柚酢二拜二如何一

佐州一味天然別 他禁戒任二老釋迦一

やれ引導はすみけるぞ、火葬にすべきか土葬にせんか、いやいや水葬にせよとて、手とり足とり手に沐浴させて、柚酢をかけてひた喰にくひたまひ、去る檀方へ行て酒などまゐりけるが、あまりに

多く蛸をまゐりける故、吐却なされけるがみな蛸なり。檀那衆これを見て大に驚き申しけるは、一休和尚は佛のやうにおもひしに、蛸をまゐりけるかな。さてくなまぐさ坊や、これはくとあざけり笑ひければ、一休すこしもさわがず、いやとよ我は蛸をたべねども口より出ればせんかたなし。さりながら我蛸をくひしにはあらずとあらがひ給へば、口より吐出したるもの食ぬとあらがひ給ふかや、いよくきこえぬ御坊やとをどりあがりて笑ひければ、いでくわごせ達、たとへ口より蛸出たりとも、喰はぬ證據を見せんとて、皆々引つれて百萬遍に行て、善導法然の畫像を見せて、あれ見たまへ人々に善導あみだをくひしことはなけれど、口より三尊を出し給へり。善導大師さへくはざる物の口より出ることを制しがたし。まして愚僧くはざる蛸の出ること、更にせんかたなしと仰られければ、皆人よこ手をうつて、さても頓作なる御返答やと口を閉て歸りける。

扱一休和尚は生佛にて、魚を食して水中へ吐出し給へば、その魚たちまち元のごとく生かへると、洛中に此事を専ら申傳ふと或人來りてかたりければ、一休をかしく思して、洛中の辻々に高札をこそあげられたり。其詞に、

來る何日の日、さがり松のほとり紫野において、魚を喰て其まゝもとの魚にはき出し、水中にをどらさしむる事なり。御望のかたぐ御見物に御出待たてまつる。

太夫は天下老和尚一休大禪師



とぞ書かれける。洛中の諸人是を見て、うそか誠か、かばかり人々いひけれど實しからず思ひしに、扱はうたがふ處なし。正しく御自筆にて高札を立らるゝ上は、しるしなくてはかなふまじ。いざや人見物して末代のかたり句にせよやとて、しるも知らぬも見しも見ざるも、其日の來るを待ちかねて、門前に市をなし、我見もらさじところぶまでのび上りて、洛中貴賤くんじゆせり。其刻にもなりしかば、大盥にて水を入れ、なるほど魚をよく料理して、かのたらひのほとりに御膳をすゑける。一休出たまひて、彼魚をひた食に食たまひて、扱はんぎりにむかひて、喝々とのたまひて、暫く目をふさぎなどし給へば、見物のくんじゆは御顔をまもりて、生たる魚をはき出し給ふは、今や〜と待居たるに、しばらくありてのたまひけるは、おの〜はる〜の御出なるほどに、いつよりも一きは手ぎはに吐出して見せ申さんとて、種々思案するに中々はかれさうにもなし、せひにおよばず糞になりとひりて捨申さん。はや各も御歸りあれとて内へ入給ふ。上下萬人きもをつぶし、さてもおどけたる御坊と興をさまして歸りけるが、其中に心あるものいひけるは、只今参りたる魚は皆生て淵にをどるなり。有がたき一言かな、誠に正法にきどくなしとこそうけ給はりしに、人の餘りにいはんとてふしぎなる事をいひて、ほめんが爲に返てをしるなれば、其理をしめし給ふ。有がたし〜と感じければ、皆人は氣がつきて合點し、も、合點せぬもうなづきあへりて歸りしとなり。

或人和尙へ参る。折ふし和尙たいめんあり。諸事のはなしをはりて後、此男申すやう、和尙さまわた

くしは此ごろ病中にて本腹いたし、今日ういだち仕り、まづ和尙さまへ御見舞申したり。さて和尙さまには御答話がよきと申す事、凡そ日本中に流布仕りて候。あはれ何にても御はなし聞され候へ、さりながら今程世間に高直なるものをもてあつかひ候。先何々に候や、一休きこしめし、されば高き物をいはんとならば、

ふじの山に、あさまのだけ、伯耆の大せん、高間のみね、あたごさん、ひえいざん、東寺の塔、天狗のはな、品こそかはれ、きだふの墨跡、大燈や扱、貫之が歌書、定家の色紙たんざく、扱あらかねの土のものには、まつほふんりんのかたつき、丸壺なすびかぶらや、はなのかぶらなし、鶴の一聲、せいしだう、さてわきざしや、太刀かたなよしみつ、正宗、國とし、波のひら行安、しらぬのうつぼに、日での年の米の直と、ゐんすはなほも高きかねなり。かれうびんがのこゑたて、童のうたひごゑ、ばんしきらむけいかみむてう。

これまでなりといひをさめたまふところへ、旦那かたよりとて御衣を一衣、これは和尙さまへ進上し参らするとして持來る。一休さのみうれしくもおぼしめさる氣色もなく、一言の禮といふべき言もなく、たい狂歌をそへ給ふ。

から衣またからころも唐衣かへす〜もからころもかな  
かくいひて、是を返事にしておくり給ふとなり。



又さる人<sup>ひと</sup>一休<sup>いつきゅう</sup>和尚<sup>わしやう</sup>へたづね行き、さんとくの望<sup>のぞみ</sup>を申しければ和尚<sup>わしやう</sup>き、給<sup>たま</sup>ひ、安<sup>やす</sup>き事<sup>こと</sup>や其<sup>その</sup>望<sup>のぞみ</sup>ならば、先<sup>ま</sup>金剛<sup>こんがう</sup>の正體<sup>しやうたい</sup>といふ物を、あんじ出<sup>いだ</sup>し給<sup>たま</sup>へとおほせらる。この者<sup>もの</sup>聞<sup>き</sup>て取<sup>とり</sup>あへず、其<sup>その</sup>こんがうの正體<sup>しやうたい</sup>ならば、案<sup>あん</sup>ずるに及<sup>およ</sup>ばず、それはわらにて御座<sup>ござ</sup>あるべし。子細<sup>しさい</sup>はまづわらといふ物にて、こんがうは作る物なれば、かくあるべきなりと申<sup>まう</sup>す。和尚<sup>わしやう</sup>をかしさかぎりなくして、いやいやさやうの物にてはなし。金剛<sup>こんがう</sup>の正體<sup>しやうたい</sup>と申<sup>まう</sup>すは、音<sup>おと</sup>あつて目<sup>め</sup>にも見<sup>み</sup>えず、手<sup>て</sup>にもとられず火<sup>ひ</sup>にもやけず、切<sup>きつ</sup>てもきれず水<sup>みづ</sup>にもぬれず、色<sup>いろ</sup>にもそまらず、かくては無<sup>な</sup>きものかとおもへば、元來<sup>げんらい</sup>其<sup>その</sup>ときにしたがつて、又<sup>また</sup>あるものなりと教<sup>をし</sup>へ給<sup>たま</sup>ふ。此<sup>この</sup>ものきゝて、こは六<sup>むつ</sup>かしたづねものかな、こんがうならば、とかく藁<sup>わら</sup>ならでは別に餘<sup>ほか</sup>なるものにてつくる物あるまじ。さ候<sup>さふら</sup>はゞぞんせぬ事<sup>こと</sup>なりとて出<sup>いで</sup>けるが、門<sup>もん</sup>のほとりより又<sup>また</sup>つてかへし、御坊<sup>ごぼう</sup>さま、たゞ今<sup>いま</sup>をしへ給<sup>たま</sup>ふこんがうの正體<sup>しやうたい</sup>わかりました。門<sup>もん</sup>前<sup>ぜん</sup>にてとくと合<sup>が</sup>點<sup>てん</sup>いたし候<sup>さふら</sup>ぞや。それは屁<sup>へ</sup>にて御座<sup>ござ</sup>あるべし。子細<sup>しさい</sup>はまづ屁<sup>へ</sup>と申<sup>まう</sup>すものは、音<sup>おと</sup>はありて手<sup>て</sup>にも取<sup>と</sup>られず、目<sup>め</sup>にも見<sup>み</sup>えず色<sup>いろ</sup>にもそまず、火<sup>ひ</sup>にもやけず、切<sup>きつ</sup>てもきれず、煮<sup>に</sup>てもかくても元來<sup>げんらい</sup>なきものかとおもへば、腹<sup>はら</sup>中<sup>ちゆう</sup>のときによりていくつもある物にて候<sup>さふら</sup>と、じまんがほにいへるはをかしかりし。或<sup>ある</sup>寺<sup>てら</sup>の門<sup>もん</sup>の破<sup>やぶ</sup>風<sup>ふう</sup>に、猿<sup>さる</sup>を三<sup>さん</sup>つ作り付<sup>つ</sup>けたり。一つは兩<sup>りゆう</sup>手<sup>て</sup>を以<sup>もつ</sup>て目<sup>め</sup>をふさぎ、一<sup>いつ</sup>つのさるは兩<sup>りゆう</sup>手<sup>て</sup>にて耳<sup>みみ</sup>をふさぐ、今<sup>いま</sup>一<sup>いつ</sup>つは口<sup>くち</sup>をふさぐ。あるとき三人<sup>さんにん</sup>づねにて、此<sup>この</sup>門<sup>もん</sup>前<sup>ぜん</sup>にたちとまり是<sup>これ</sup>を見<sup>けん</sup>物<sup>ぶつ</sup>す。折<sup>せり</sup>ふし一<sup>いつ</sup>休<sup>きゅう</sup>そこを通<sup>とほ</sup>り給<sup>たま</sup>ひて、立<sup>たち</sup>より是<sup>これ</sup>を見<sup>けん</sup>たまひ、うちうなづき笑<sup>わら</sup>ひて過<sup>す</sup>行<sup>ぎやう</sup>たまふ。三人<sup>さんにん</sup>のうち一人<sup>ひとり</sup>が申<sup>まう</sup>す

やう、何<sup>いづれ</sup>も三<sup>さん</sup>つの猿<sup>さる</sup>のいはれを、さまざまなんじけれども終<sup>つひ</sup>に合<sup>が</sup>點<sup>てん</sup>ゆかず、只<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>これにしばらくありて行<sup>ゆ</sup>たまふ出家<sup>しゆつげ</sup>の、うちうなづきて通<sup>とほ</sup>られしは、定<sup>さだ</sup>めて合<sup>が</sup>點<sup>てん</sup>し給<sup>たま</sup>ふならめ。いざ子細<sup>しさい</sup>をたづねみると、追<sup>おつ</sup>付<sup>け</sup>て一<sup>いつ</sup>休<sup>きゅう</sup>の袖<sup>そで</sup>をひかへ、御坊<sup>ごぼう</sup>に物<sup>もの</sup>たづね申<sup>まう</sup>さん。只<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>門<sup>もん</sup>前<sup>ぜん</sup>にありつる猿<sup>さる</sup>を御<sup>ご</sup>らんありて、うちうなづき笑<sup>わら</sup>たまふやうは、定<sup>さだ</sup>めて御<sup>ご</sup>僧<sup>そう</sup>はよく御<sup>ご</sup>ぞんじありつるものとぞんずる。かやうに申<sup>まう</sup>す我<sup>われ</sup>々<sup>れ</sup>は愚<sup>ぐ</sup>痴<sup>ち</sup>文<sup>もん</sup>盲<sup>まう</sup>にして、何<sup>なん</sup>の辨<sup>わきま</sup>もぞんせざる者<sup>もの</sup>どもなり。子細<sup>しさい</sup>をかたり聞<sup>き</sup>せたまへや。宿<sup>やど</sup>へかへりはなしにも仕<sup>つか</sup>まらん。いかに〜と問<sup>と</sup>ひければ、一<sup>いつ</sup>休<sup>きゅう</sup>さればこそ、其<sup>その</sup>猿<sup>さる</sup>のいはれは、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>もくはしくはぞんせず。去<sup>さり</sup>ながら何<sup>いづ</sup>れもれき〜の若<sup>わか</sup>き衆<sup>しゆ</sup>の尋<sup>たづ</sup>ねたまふに、しらぬといふもいかゞ、斯<sup>か</sup>くいひし事<sup>こと</sup>もあるげに候<sup>さふら</sup>。

何<sup>なん</sup>事<sup>こと</sup>も見<sup>み</sup>ざるいはざるさかざるはたゞ佛<sup>ほとけ</sup>にもまさるなりけり

とよみ聞<sup>き</sup>せたまへば、三人<sup>さんにん</sup>の者<sup>もの</sup>ども、さて〜尤<sup>もつと</sup>なる御<sup>お</sup>歌<sup>うた</sup>のこゝろかな、是<sup>これ</sup>はめん〜の心<sup>こころ</sup>得<sup>え</sup>になくてかなはざる歌<sup>うた</sup>なり。さて今<sup>いま</sup>の御<sup>ご</sup>坊<sup>ぼう</sup>は佛<sup>ぶつ</sup>神<sup>しん</sup>の化<sup>け</sup>現<sup>げん</sup>なるべしと、皆<sup>みな</sup>一<sup>いち</sup>同<sup>どう</sup>に感<sup>かん</sup>じたち歸<sup>かへ</sup>りしが、一人<sup>いちにん</sup>の申<sup>まう</sup>すやう、いかにめん〜此<sup>この</sup>歌<sup>うた</sup>の心<sup>こころ</sup>をもつて、三人<sup>さんにん</sup>ともに今<sup>いま</sup>よりして見<sup>み</sup>ざる聞<sup>き</sup>ざるいはざるの願<sup>がん</sup>をたつべし。皆<sup>みな</sup>もつとも同<sup>どう</sup>じて、扱<sup>さて</sup>かたはらに立<sup>たち</sup>よりければ、折<sup>せり</sup>ふし遠<sup>えん</sup>寺<sup>じ</sup>の晚<sup>か</sup>鐘<sup>ね</sup>かすかに聞<sup>き</sup>こえけるを、聞<sup>き</sup>ざるの願<sup>がん</sup>たてたる人<sup>ひと</sup>、何<sup>なん</sup>となくおもひ出<sup>いで</sup>て、

今<sup>いま</sup>日<sup>ひ</sup>の日<sup>ひ</sup>もいのちの内<sup>うち</sup>に暮<sup>くれ</sup>にけりあすもやきかん入<sup>い</sup>相<sup>あひ</sup>のかね



とふるき歌をうそ吹ける處に、いはざるの願たてたる人のいひけるは、いかに其方聞ざるの願むなし  
くなりぬる事のあさましさと、手を打ゆびをさして笑あざけるところへ、見ざるの願立たる人のい  
へるは、さてくかたぐは何を聞き何をいうて、ともに大願をやぶり給ふや、おろかにあさましき  
事かなとがめらるゝ。三人の心をかし。

又さる初心なる男あり。さいく一休和尚へ参り、萬うけたまはる。和尚此ものを見るたびに、其方  
はたんき人なり。物ごとに随分かんにんせられよと仰られ候。此もの答へて申すやう、もつともか  
んにん仕候事、體身にこたへ過て覺え候。去ながら我何のかまひもなく、無異無事にまかりあり  
候とき、いたづらもの來りて、某しが面にかすはきはきかけ候を、おし拭てかんにん仕候と申  
す。和尚聞給ひて言語道斷、それはわるきかんにんの心得やうかな、かへすくも其かすはきをの  
ふべからず。もし其かすはきをのこひ候は、はきかけたる田夫もの、我等がかすはきを、むさしきた  
なきとおもへばこそのごひたれ。にくき仕かたなりと猶なかり、かさねてはいかなるめにかあはせ  
んすらん。さるほどに其かすはきをきたなくとも、其まゝおきて干つけ置べし。それ何のともなき  
人の面へ、かすはきはきかける馬鹿ものは、生有ものにあらず。ひとへに狂亂するきやう、ばかた  
くらだ非人ともいふべし。それ蠅といふむしは、いかなる貴人高位の人のつむりへも、おそれずあが  
り、夫婦のかたらひ事をもなし、あるひは糞をひりかくる。されば其蠅はもとより虫なりと思へば、

腹も立す、眞そのごとくはい同前のものに對するときは、人倫のなすさはふにあらず、堪忍のこゝろ  
え是ほどにもなくてはいかゝあらん。

北野邊にて十二三ばかりの童女の、菜つみて居けるが、俄にひれふし死に入ける處へ、一休通りか  
かり立より見たまへば、四五尺ばかりなる蛇はひかゝりけるを、和尚杖にてはらひのけ、童女を引お  
こし、子細をとひ給へば、只今こゝに若きもの來りて、そこにふせくと仰られて、其後むたいに引  
ふせられ候が、何とやらん頭のまはりをおそれおどろきたるふせいに、左ながらよりも付ずして、  
其まゝにげ去たまふなりとかたる。一休ふしぎにおぼしめされしが、髪の元結をとかせて見給へば、  
尊勝陀羅尼の書たるを引さき元ゆひにしたりける。是におそれて近づかざるぞふしぎなれと、和尚あ  
るとき旦那方にて此事をはなしたまふ。去程に此尊勝だらにの功德により、あまの命をたすかりたり。

扱こそまもりといふものはもつべき事なり。  
扱爰に一休一大事因縁の御工夫なされしとき、諸旦那あるひは御友達衆、毎日とむらひ來ましてさ  
またげとなりければ、かしましく思召て御心地あしとて、一忍ん人に出會たまはず。皆人こゝろも  
となく、折々に御見舞申侍れば、御長髪ばうくとし給ひて、何とも色みえず御惱とのみ仰られける。  
旦那を先として御智音衆もよりあひ、是は氣遣はしき事なりと、ときの名醫を入かへく掛まるらせ、  
御いたはりはいかにと聞けば、醫師申されけるは、御脈はいかにもよし、不審なる御煩とどれくも



申しける。あるとき旦那智音衆寄集り、此御なやみの様子は、いかさまにもしつ熱の病とは見えす。若き御僧の事なれば、もしや戀などをなされて、かく思ひわづらひ給ふ事もやあらんと、口々に申されけるが、いや／＼人多く知りたりと思召ば、あかし給はぬ事もや侍らん。ひそうによき中の知音のみ二人見廻て、そとうかがひ侍らば、誰と名ざしあるべし。しからは誰人にもあれ、此者どもがかゝりなば、などか御本意をとげられぬ事はあるべからずと、頼母しく言合せて、ひそかに三人参りたり。一休出あひ四方山の物がたりすみて、一人申し出けるは、此間さま／＼の御療治にても、御脈は常にかはらずと醫師おの／＼申すなり。平生にはちがひて、何とて心深くわたらせ給ふぞや。定て戀をなさるゝと見つけ侍るはひが目か、有のまゝに仰られよ。かなへて参らせんとうちつけて申しける。一休いかにもうれしげなる御面ばせて、此上は何をかかくすべき、此日頃戀わびて、さてかくの如くやつれはて候なり。能こそ仰出されたり。何とやらん我等には似合ぬ事にて侍れども、各は日頃のよしみなれば、ひとへに沙汰なくなへてたべ。去ながら糸ならなくに心みだれてはづかしや。それと名をば面上にはのべがたし。一筆かきて参らすべし。門外へ出給ひておの／＼ひらき御覽じて、いそぎかなへてたまはらば我等が命はながらへて、おの／＼方へは其かはり、能き道教へ申さんとして、おのの間へずんと入り、一筆さらりと書て引むすび、彼三人に渡し給ふ。三人よろこび、御心安く思しめせとて、門外へはしり出で、扱こそ申さぬ事はとて、いそぎ其名をしらまほしくて、彼文開きて

見れば歌に、

本来の面目坊がたちすがたひと目見しより戀とこそなれ

我のみか釋迦も達摩もあらかんも此君故に身を棄しけり

とかゝれたり。三人のものども案に相違して、横手を打て日頃の御心もしらぬ身が、あらぬわざを思ひけるこそをかしけれ。今にはじめぬおどけにたばかられるこそおろかなれ。誠に有がたき御坊かな、晝にうつし木にぎざめるは多けれど、わたもちの釋迦如來なりと、をがまぬ人はなかりけり。嵯峨に了意坊といふ道心者ありける。いつの頃よりか首に蛇まとひつきてはなれず。さま／＼の事となして漸とはなせば、又夜の間元のごとくにまとひ付き、ことにひじり切たる坊主なれば、日々にさがより京へ出て鉢こひけるに、彼蛇をかくさんがため、ゆたんを首にかけて見えざるやうにして出ける。此事ひとへに難義に思ひ、其頃二尊院に一休おはしけるに、かの坊主たづね行き、わが身のやうすをくはしくかたりければ、一休き、給ひ、いかさまそれは女のしふじやく成べし。汝是より高野山へ上り候へ。さもなくば退く事あらじと教へ給ふ。よろこびて高野山へ登りしに、不動坂より彼蛇うせてなし。了意よく有がたき事に思ひ、高野山に二三年も住みしが、今は早蛇の事も打わすれ、過しふる里のこひしさに、又さがへかへりしが、二三日は何の子細もなかりしに、又夜の間に彼の蛇まとひ付きけり。其まゝ高野山に住ならば、彌めでたかるべきに、何ぞや古里へかへり、二度難



儀にあふ事定業の程こそかなしけれ。今に坊主のすみしあと、蛇寺とぞみな申しあへり。

卷 二

一休且那衆二三人同心して、東山邊へ遊參に出でたまふ。ときしも春の中ばにて、梢の花さい中にして、こゝかしこにゆさん多し。さる片はらに五六人うちより、手を打たゝきをどりあがりて大笑ひしてあそぶ。何事かおもしろかりけるとときく所に、屁をひりておもしろがる。且那の内一人の申すやう、あまり酒にてうじ、何がそれほど屁がおもしろかるべし。一休申さるゝは、いやおもしろきこそことわりなり。よくく昔よりおもしろき事なればこそ、諷にもおもしろのはるべや、あらおもしろの春べやとうたふほどに、扱ははるのへはおもしろき道理と申されき。

一休和尚、いまだ十二三歳のころ、師匠館つぼを一ツ持ちて、たゞ一人ある小僧に、いさゝかもくはせずして、汝是れをかりにもくふべからず。もし是を子どもがくへば、忽ち死ぬる毒なりというて、ひたもの我ばかり食ひては取置るゝ。一休おもはるゝは哀れ毒にもせよ、死ぬるとも師の出られなばくふべしと思ひて待ちける處に、折ふし師匠用ありて出らるゝ。一休やがて探し出し、棚より取おろしさまに打こぼし、あたまへもきる物にも付ける。日頃くひたしとおもひけるまゝに、先二三ばいくひて、あまつさへ、師匠のひざうせらるゝ壺をうちおとしみぢんになす。かくする處へ師かへらるゝに、一休しみくとなかるゝ。師何事ぞと問るゝ。されば大事のあめつぼを打ちわりたるなり。定め



て御たづねのときは何と申べしとおもひ、命いきてもよしなし。子どもが喰へば死ると仰られ候ほどに、一盃たべ候得ども死なす。二三盃たべつれども死なれず。あたまにもきものにも、付て死んとぞんじ候へども、すべてしなれ候はずとの給へば、師の坊も言の葉なくて、うちわらひてぞ入たまふ。あるとき白河邊に住みける桑門に、名譽なるかる口の人侍りけるが、一休のかる口なる事をき、および、いづぞは行て難句をしかけ心見んと、常々心がけられけるが、不斗思ひ當たる趣向ありければ、さらば参りて御知人にもなり、扱一句して見んと、はる／＼と白河邊より紫野へとぞいそがれける。をりふし一休も庵にましく／＼て御知人となり、とかくするほどに、ない／＼たくみし一句の句作も出来れば、彼僧申されけるは、うけ給り及し御かる口を、何にても一句遊せかし。何とぞ付て見侍らんと申されければ、一休仰らるゝは、客發句に亭主脇とこそ申せ。先其方あそばせとありしかば、内々たくみ置し事なれば、さらば申して見んとて、なん句をこそは出されけるが、此處は何と申す所ぞ。一休むらさき野と仰られければ、

紫野丹波近

とせられければ、いまだ息を引入ぬにはや付られけるは、こなたはいづくの人ぞ。白川のものなりと答へければ、

白川黒谷隣

とあそばしければ、かの僧肝をつぶし、さしも六かしき章句なり。一句のうちに二つの色字、二つの所の名、いかなるへうたんの川ながれなるかる口も、少しはしぼうこぶうとし給ふべしと思ひしに、貝とる海士ならで息もつきあへず付たまふ。かゝる名對ある上は、はぢやくはしとて空うそぶいて、尻をからげてにげられけるとなり。

又畫書の土佐守に、内々掛物の畫を一ふたのみたる人ありしが、終にかきてつかはさず。彼人心せきて直に土佐守が宿へ行て申しければ、折ふし太鼓うち殿にはあらねど、ひる寢してこそ居けれ。彼仁つねん、したしくかたる中なり。内々たのみおきし事なれば、引ずり起しか、されける。土佐守ねぶりにたへず、たとひ一夜ねずとなりとも、晩にかきて参らせんとておきず。しかれ共又晩といはば、明日か川の淵瀬と心がはりもやせん世中なり、ひらにといふに是非なく筆を取、ぐる／＼とまはし、はけおつとりさつと書きて、これ／＼とてふせりける。望み足りぬとその畫をとつてかへり、ひねくりまはしてよく／＼みれ共、さらに何ともしれず。水をかきて其中に一筆ぐる／＼としたるものあり、さらに見分られず。餘り合點ゆかざれば、土佐守方へ持行き、何なるぞと問へ共、我等もしらすといふ。かゝる畫をもつて何かせん。引やぶらんとおもへども、三國一出來たり。とやせん角やせんと思ひけるが、いや／＼一休和尚に贊をこひて、掛物とせんするぞと、いそぎ大徳寺へはしり行き、和尚に申しけるは、此の畫は土佐守に書し候に、さらに此水中の物しれず。いかゞ御覽あると申しけ



れば、されば何とも見えねども、贊がのぞみならばしてまゐらせんと、仰られければ、忝なしてて贊をこふ。一休筆とりて、

水中に物あり、その一物をとへば、書し畫工もしらず、持ぬしもしらず、贊する我は猶しらずと遊しければ、これを見る人きく人毎に、さても真すぐなる御心ばせや、無二なし。三國一の掛物なるべしといひしが、今において其かけもの、たい人の手にあらずとかや。

或寺に五百羅漢を作りて堂供養しければ、貴賤群集の見物ありけり。法事やみてのち、其寺の僧らかんのまへに香花など取りぬけるに、こびたる世俗二三人、羅かんを見物し居たるが、餘の人は退けども、此仁一人つくくとながめぬて、傍の僧に問ひけるは、此五百羅漢に一々名こそおはすらん。

御僧はさだめて御ぞんじあらん承りたしと申ければ、此僧はたゞ三尊の外は一佛も名をしらざりければ、何ともものいはすして、方丈のかたへにげ入りける。折ふし一休行合せ居給ひて、何事なるぞと問ひ給へば、しかくのよし申されける。一休のたまひけるは、いらざる凡俗のとがめだてや。かくて藝にもならざる事、たれかは覺侍んや。されど望ならば云ひて聞すべしとて、羅漢堂へいざなひ、

然ば一々問給へ。真中なるは。釋迦牟尼。左なるは。迦葉。右なるは。阿難。さて次はととへば、南無さんなど、其次はととへば、すきやとや。其次はととへば、おらこちだと、一々れんげ呪の文にて答へ給へば、五百らかんはさて置き、百千羅漢をとへ共、何かは答へ給はざらん。だんくんと問ば、

さらくと答へたまひ、凡百ばかりもとひしが、此俗人さて和尚にはよき御覺候かなと申しければ、和尚打わらひさもなく候。いとけなきより一卷ばかりは、中にて覺えて候へと仰られければ、此俗人心附耻入てかへりけるとなり。されば時にとつて頓作なる御心入と、きく人感じけるとかや。物ごと問ひて用にたえず、覺えても用にたぬ事をばいはざるにまさるめでたし。よしなき事を問ひてあやつ

られけるぞ、すべて羅かんのみにもあるべからず。去るなまこびたる男、一休のもとへ雀を一羽もちて、いかに御坊、このすやめは生か死かいかん。和尚むと答へたまふ。此ものいとまもこはずさりけり。此心は生なりといは殺すべし。又死なりとい

は、放ちやらむとの事かしらず。一休其後かれが方へ行給ひて、はいり口のしきるをふみまたげて、亭主々々とよばれけるとき、亭主出ければ、一休此敷居を出るか入るかひとたまへば、亭主なにの

返答もいせず、ただ手を打て笑ひしとなり。又或とき一休かつら川をわたり給ふに、何とかし給ひけん、川中にて倒れ流れたまふに、折ふし川は

たには人多くあつまり居て、これはくといひながら、たれひとりあげんといふものもなかりしかば、一町ばかり流れて幸ひ川杭にかゝり、やうくにてあがり給ひしかば、人々よりつとひ、さてく御

坊は運つよき人かな。何としてあがられけるやといひしかば、一休打わらひて、されば、我川へはまりたればこそあがりたれ。上りたればこそ生たれ。さまで珍らしき事にはあらざりけりと申さるれ



ば、人々聞て、さてさて口がしこき坊主かなと、どつと笑ひて打過ぎぬ。  
 爰に山里に或ものつま、さる男とひそかにかたらひ、互ひに情ふかく、ちぎりあさからざりけり。  
 或夜のむつ言に、いつがいつまで斯はしのびなんや、いかにもしてをつとを殺して思ふまゝに契りな  
 んやと、互にうちとけて談合し、たくみ出して、或夜男に酒をしひてゑひ臥さしめ、夜ふけ人しづま  
 りて後まをとこと二人して、をこの頭に針をうちてころし、さて家に火をかけ焼死たる體にし、  
 うたがふ人もなきやうにもてなし、死たるかばねにとりつき、聲をはかりになきさけびけり。折ふし  
 一休通り合せ、此女のなき聲を聞き、不思議のおもひをなしたまひて、あたりちかき人にたづね給へ  
 ば、しかくとかたる。和尚き、給ひて、此女のなき聲は、おそれたるてうしにて、更になしみの  
 聲にはあらず。ふしぎなりといひて通り給ふ。あとにて今の修行じやは、人間にてはあるまじ。むか  
 しよりいまにいたるまで、けんどん放逸の在處へは、弘法大師のきたり給ふと言ひつたへり。定めて  
 大師さまなりとおぼえたり。聲ばかりきゝて、それぞとあかし給ふは、奇代ふしぎの御僧かなとて、  
 皆皆かんじけるとなり。

世に一休和尚は天下の活僧なりしとて、諸宗ともにおしなべて尊びけるなれば、いづれの上人長老  
 もあがめ給はずといふ事なし。ある時黒谷へ御参りありしに、寺中の人々一休を見奉り申しけるは、  
 今の世に活佛と人ごとに言るはこの禪師なり。よき折からなれば、いざや當寺に侍る善尊法然の畫

像に贊をたのみ申す。かの念佛無間とてあざける日蓮宗に見せて、禪宗の佛心宗だにかく此方の祖師  
 を尊み給ふと、高言にせばや。かるき僧なれば定て贊し給ふべしと申しければ、おのゝ此儀然かる  
 べしと相談して、やがて一休を方丈へ請じ申し、件の畫像を取出し、贊をたのみけるに、案の如く易  
 き事なりとのたまふゆゑ、則硯と畫像を御前に出しければ、さらりとひらき一覽ありて筆をとりた  
 まひ、先善導大師に贊していはく、

末法出現名三善導 則是彌陀化身也

濁世末代導三惡人 一切衆生易往生一

法然上人には

傳聞法然活如來 安座蓮華上品臺

尼入道同愚痴輩 一枚起請最奇哉

と即時にあそばしければ、さて社とおのゝ大きによるこび侍りて、此兩佛に淨土宗としてかく贊  
 をいたさば、家の事なれば手褒なりとて、又日蓮宗があざけるべきに、かゝるうれしき事こそなけれ  
 と、かの贊を日蓮宗に見せて、大きに威言をぞ申ける。其頃は殊に日蓮宗と淨土宗とは中あしくて、  
 犬のいがむが如く、牛のつき合ふが如く、眼をいからしければ、日蓮宗かの贊を見て大きにはらを立  
 て、一休をそねみにくみける。其中に一人申しけるは、いやゝ一休の御心はものにかざりのなき直



なる御事なり。いざや日蓮大聖人の像をか、せ、贊をこひて見ん。あれほどの褒美はあるべしと申しければ、尤しかるべしとて、いそぎふためきて畫をか、せ、やがて和尚の庵にもち参りて、贊をたのむよし申しければ、元よりかるき御僧なれば、やすき事とのたまひ、彼の畫をひらき御覽じけるに、此像はさても少くかきて、うそ黄なる衣をきせけるよと笑ひ給へば、人々申しけるは、さん候いかにもけつこうに大きにか、せたく存候へども、實は先日淨土宗法然が贊をじまん仕候ゆるゑ、口をしく候ひて、とるものも取敢ず先ちくりけにか、せて参り候。いそぎ贊してたべと申せば、心得たりとて先の法然の贊を所々を直して、

傳聞日蓮活如來 香座則是妙法臺

尼入道同愚痴輩 一遍題目殊勝哉

となされ、其奥に、

ばうすく小坊主まめの粉にぬりばうす

とぞあそばされけるとかや。其頃また永觀堂の住持黒谷の贊のよしをき、て、よき寺のかうかつなりと浦山しく覺しめし、かほどかるき御僧なるに、何かな此方にも贊たのみ申さんとて、まづ一山の人を呼よせ談合せられければ、其中に一人申しけるは、何と申すまでもあるまじ。先宗の祖師なれば當寺に傳はる半金色の善導大師の畫像に、贊をたのまれよと申せば、各申すやう、げに、是は代

代當寺の重物なれば、これに増したる物あるまじ。さらば其方使僧に成り給へとて、彼の半金色の善導大師の畫像を持せ、一休へまゐり一休に對面して申しけるは、黒谷の贊のよし承り、あまりにうら山しく候ひて、是まで参りて候。あはれ此方の善導にも、贊をあそばしたべと申しければ、それこそ安き御用とて、かの畫をひらき御覽あり、たちながら一筆さら、と、かき給ひ、元の如くした、め、使僧にわたされければ、かたじけなしとて謹んでいた、き、いそぎ永觀堂へ歸へり、しかじかのよしを申しければ、扱もかるき御僧かな、本望とげたり。まづ一山をよびよせ贊拜見せばやとて、やがて人を廻しければ、各よろこびはしり集る。さてかの畫像を方丈にかけ、拜見しければ、いかにも大文字小歌一首あり。其うたに、

くろからんころものすその黄なるは善導大師はこをたるらん

とあそばしければ、みな人どつとわらひ、興をさます人もあり、感にたへたる人もありしが、今のよまで傳へて、天下に一幅の名物となりけるとかや。

正月元日より三日は元三といひて、歳のはじめ月のはじめ日はじめなれば、一天四海の人々のかしこきも恐なるも、愁あるも愁なきも、貴も賤しきも、祝ひよろこばざるはなく、屠蘇白散にはどぶろくなりとも鬚につけ、御鏡すわるとして、尻もちなりともつきて、それ、く、にいひませるありさまは、誠に昨日にかはりたるにはあらねども、空のけしきものどやかに霞わたり、大路のさま松立わたし、



家には長き代のためしとて、しめ縄ひきめぐらし、昨日の夜半過るまでは、人の門打たきて何事にか  
 あらんことくしく、足を空にまどひたるも、たゞ一夜あけぬれば引かへ心もゆるくと、又晦日の來  
 るべき心もなく、野邊の小松に千代萬世をいはひそめ、いつ死ぬべきものとはなしに、萬の事をいみ  
 おそれ、朝の露に名利をむさぼり、夕の陽に子孫を愛し、蟻が茶うすをめぐるが如く、同じ事をぐる  
 りぐるりと、五百七十年七まがりといはひて、世を秋風の心は露ちりほどもなき人心を、一休をかしく  
 思しめし、誠におろかなるかな、朝がほの日蔭待まもさかり久しき花とながめ、かげろふの青天に羽  
 をふるひてたのしむ間もなき世中に、糞に宿ぬる正月ことは、たゞ時の間の煙となりなんと打見るよ  
 り、いで物見せん人々よと、墓原へ行て鬮體をひろひ來り、竹の先へつらぬきて、正月元日の早  
 天に、洛中の家々の門の口へ、この如くくと彼されかうべをさし出し、御用心々と歩行たまふ。  
 皆人いまはしとて、門さしこめて居けるより、今に正月元日は門戸をさしけるなりといへり。し  
 かるに一休を見參らせて或人のいへるは、御用心とは尤しごくなり。たとひいはひかざりても終には  
 みな人かくの如く、されども世の習にてかく祝ひよろこぶ折に、其むくつけなきしやれかうべをば、  
 家々へ出さるゝ事は御ちがひならずやと申しければ、さればよ我もいはひて此されかうべを各に見  
 するなり。目出たしといふこといかゞ心得けるぞや。むかし天照大神岩戸をひらきたまひしより、事  
 おこるといへども、此されかうべより外に目出たき物はなしとてよめる。







にくげなき此されかうべあなかしこ目出たくかしくこれよりはなし

是れ見給へ人々目出たき穴のみのこりしは、めでたしとこそいふなるぞ。皆人かくとはしるらめど、きのふも過し心ならひに、けふをくらしてあすか川の、淵瀬つねならぬ世なりとは、目に見えぬはしに、風の音にもおどろかぬ人々に、用心せよと思つて、たゞ人は是にならねば目出たき事は、何もなしとのたまへば、諸人これを見て、さても賢き聖とてをがまぬ人はなかりけり。

一休のもとに犬あり。あるとき子五つうめり。其五つの子のうちひとつを親いぬにくみて、乳をも自由のまさずして、いがみくひふせけり。下人ども此親犬をにくみうちけるが、ある夜和尚の夢につげていふ。我身は前生にて、かしはといひし遊女にて侍りしが、五人の夫を持つて候ひしが、四人は殊になさけある心ざしにて淺からず思ひしが、一人はいつはる心多くして、却て我をわづらはしくせし事たび／＼侍りしかば、心にく、思ひながらうち過ぬ。今此五つの子はかの五人の夫なり。四つはむかしのなさけ深きが故に、乳をのましめていとほしく思ふ也。一つは我をなやめし夫なれば、乳をさへのまさん事心にく、候ひて、かく當り候なりと、こまやかに前生の事をあり／＼とかたりしと、一休旦那のうちへはなし給ふとなり。

七條邊に有徳なる町人あり。あるとき佛事供養のため、諸出家は申すにおよばず、乞食までもかくのごとく慈悲をしけり。あるとき一休を申し入れ、しゆく／＼不審ども尋ね、次手に問ていはく、何れを



さして善とし、いづれをさして悪とするや。和尚こたへていはく、善悪かぎりなし。只善悪をしらんとならば、其よし悪をなすみなもとにあるべし。かれに行て尋ねよと答へたまへば、亭主最と感じける。扱和尚たち給ふ折ふし雨降りければ、亭主暫く待て雨を止給へと申せば、一休申されけるは、ふらばふれ降すばふらずふらずともぬれて行べき袖ならばこそと云捨て出給ふ。

加茂河ちかき邊に、五郎右衛門と申すものあり。かれがうちへいつの頃よりか犬一疋來りしが、打ともさらず。ある日人を頼み二三里外へやりけるが、又歸りぬける。此度は捕へうち殺すつるに、また同じやうなる犬來る。ときならず夢見あしければ、いかゞ心もとなくおもひ、一休へ參りくだんの事を一々はなしけるに、和尚のいはく、ゆめく其犬にあらく當り給ふな。それは其方が前生にてその犬のものを負り、つひにかへさずして今人となり、犬となりてこゝに來れり。全くわたくし事ならねば、棄るとも殺したりとも、業力の犬なれば、其家をはなるゝといふ事あるまじ。實々うしなひたくば、かれに米一二斗ほどあてがひおきたまへ。喰盡たらん時はかへるべし。左なくば何となすとも歸るまじとぞ教へ給ふ。さらばとて歸りて米をあたへ置きけるに、ある夜の夢に汝われをなやます事たびくなり。打とも殺すともうせまじ。されどもうれしくも、今はあの佛和尚に教へられ、我をばごくも事まんぞくせり。しかれば汝がものを喰盡す事、やうく一斗ばかりあり。其間は我につらく

あたる事なかれといふと思へば夢さめぬ。此者いよくおどろき、さては和尚のをしへに少もちがはざりけりと、猶々じひをほどこしけるに、彼がいひし如く、一斗の米なくなりてのち、くだんの犬かきけすやうにうせにけり。ふしぎ成りし事なり。或人一休に問うて曰く、人は死て體なくなりはつれども、魂はといまると申すが、さやうにてもあるまじきは、たましひが死なずにあらば、體はなくともやはり其まゝ居て、物がたりなどもしさうな事にてあるまじきか。何れふしぎなる事にて候。我等が存るには、佛に成たるものは、たのしみにはこりて、爰の事をば打わすれ、來べき心は露もあるまじ。又地ごくへ行けば鬼どもにかしやくせられ、隙少しもあるまじ。又かやうにてもなきものやらん、世中に安靈とて死したるものゝ來て、さまざまの事をいひなすとすると承る。何れ是はいかなる事にて候や。和尚のいはく、さればわれも其儀はしらず候へども、若きとき談義などをちと聞たるが、誠かうそかしらぬ、たましひと云ふものが有つて、佛とも鬼とも成るげに候。そのくせものがえんま王とやらんの前にて、公事奉行の手にわたり、しやばにて作る罪をくろ鐵か赤がねかはしらねども、帳とやらんに付ておき、鬼に見せて先づ是程の罪人なり。急ぎ呵責せよといふに、色々の鬼どもが受とりて、さまざまのせめにあはするよし、しやばにて作るつみほどせむるといふ。さりながら毒藥へんじて藥となるといふ事あれば、さのみつみの多きもあながちになげくべき事にはあらじと見えたり。かくいひしときは、



作りおく罪がしゆみほどあるならばえんまの帳につけどころなし

とあるときは、鬼といふものも鈍なものなり。釋迦が一代の藏經は、みな人間をいためんがためなり。あらつらくの釋迦どのや、いろ／＼のうそをつきおきたまへり。それはと問へば、一字もいはぬといひ給へり。又さうかと思へばしゆつさんの語には、一佛淨土くわんけんほうかい、草木國土悉皆成佛、さう木も佛になるといひ、あちこちとひた物に身ぬけばかりいひちらし、人間は永代まよひの身に、ちかうしてありとおもへば、又うたふも舞も法の聲、柳はみどり花はくれなる、あなおもしろのはるのけしき。

しやかといふいたづらものが世に出て多くの人をまよはするかな

去ざしきの天井に蛇をかきておける、其の座敷にて酒を飲みけるに、盃の中へ、繪のうつりしをのみて、それより煩ひけり。ある人きたりてわづらひのやうをしか／＼の事にて、それよりかやうにわづらひ給ふよしをきけりと問ふに、いかにも其通りなりと答へければ、或人の申さるゝは、左やうの事あらば、何とも氣分あしくて、おきふしも是のみ心にかゝりてわづらひとも成るべし。さりながらさやうの事は、一休和尚へ行て仔細を御たづねあらばしかるべしと申す。さらばとて參り、しか／＼の事にてかくなやみ申すなり。いかなる事にて候や。和尚の御しめしに預りたくぞんじ、是まで參りて候と申しければ、一休聞給ひて、やがてしめしたまふ其語にいはいはく、

まぼろしを知る即敵はほうべんをなさず。一切のしよほふは皆是まぼろしなり。何なれば水中影像をじつなりとおもふや愚なり。早くなんぢが自心をあきらめよ。

とて扇をもつてちやう／＼はたと打給ふ。まづ右のこゝろはまぼろしとしりなば、方便は有るまじ。一切もろ／＼のなすわざは、何事によらずみなくうなり。水のうちにうつろふかげをみて、實のじやなりと心得やまひとする、それおろかなる心なり。早みづからの心を納て見るときは、實か無かあらはるべし。其こゝろ納るとき、即ち病本服すべしとしめし給へば、此ものやがて得通して、誠によくしあんするに、天井に繪のあるといふ事思ひ當り、それよりして心すきとなり、やがて本ぶくしけり。何事も善惡の源をたづぬるときは、心の一つより生ずると見えたり。扱こそ三界唯一心といへり。伏見深草の里に、森本善兵衛といふものあり。その内につかふる下女、もとより邪見の女にて、朝夕の飯の残りをむさしとて、非人にも呉ずして皆堀へ捨しに、其こと／＼に皆蛇となりてはひ歩行き、家内へ這入りしかば、家内のもの人々おそれ、いか成る事やらんとひしめきける。其折ふし一休近所へ來り居給ふよしをきゝて、やがて使をもつて請じ奉り、ことよしをかたるに、和尚きこしめし、扱々それは笑止なる事かな。是は此身上のくづるゝ瑞相なり。それは全く蛇にてはあるまじ。皆飯の残りしを捨し勢ひなるべし。其蛇をのこらす釜へ入てたきて見るべし。必らずめしとなるべしとのたまふ。さらばとて教にまかせ皆あつめて鍋に入れ、一休經咒をじゆし給ひたかせたまひしに、成程さ



れいなるめしとなる。此飯をあの女に残らずくひ盡させよ。少も残るならば身代あやうなるべしと仰らるゝ。さらばとてかの女にくはせけるに、皆喰つくす事ならずして、又かくしてすつる。此下女あるときおのれが在所へかへるに、道にて蛇にさゝれ死けり。日をへすして、いくほどなくして天罰あたりうせしはおそろしき事なり。さるほどに一つぶにても喰残したるあらば、決しておろそかにすべからずとて、和尚旦那方にて折々御物がたりあるを今こゝにしるす。

爰にはなしあり。某しとかやいへる人の奥方相果られるに、今端のときの遺言に、われら此年まで佛とも法ともしらすしてかく成りはつるなり。ことに女はつみふかきよし、後の世いと心もとなし。承ればむらさき野の一体さまは、今の世の達磨とやらんいふなる間、我等が引導をば和尚さまへ頼み奉りて得させよと、念頭にいひおきしかば、夫子なくく一体の草庵へ参りて、其由をかくと申上げければ、其年まで佛とも法とも知らずば、大かたの事にてはうかみがたし。去ながら我等が一句をさづけすくふべきなり。水葬にせん間、鴨川へつれ行けて其まゝ座を立ち、打つれ川のほとりになりしかば、其死人を出せよとて、和尚かの死人の首に繩を付け、ひつかたげて川岸に立ちてのたまはく、

河ふねをとめてあふ瀬のなみまくら、うき世の夢を見ならはしの、おどろかぬ身のはかなさよ

とて、川へざんぶとなげすて、はやかへり給ひける。夫や子どもおどろきて、御氣ももしやそゝるなるか、この一句は江口をうたひ給ふなり。かゝる事にてはうかびがたしとてかの死骸を引あげ、念頭にをさめてある寺の上人にいん導たのみければ、其宵よりかの夫も子もさんぐにわなき夢見けるは、一体の御引導にてうかみしものを、よしなき上人の引導にて引もどされて中有の旅にまよふよ。又一体様をたのみて、我を救はせ給はずば、夫子をも取殺し、手を引て三途の川を渡らんと、まざりくと夢まぼろしに見えければ、是はとおどろき一体和尚へ参り、其由をかくくと申上げければ、我よく引導せしに、又異人をたのみしゆるなりとて、ふたゝびかへり見給はねば、親子のものさまぐになげきしかば、扱も不便の事やとて、うづみし死がい掘出させ、また加茂川へかたげ行き、川岸に立て一首、

大水のさきにながるゝとちがらも身をすて、こそうかぶせもあれ

とて、がはとしがいを川へなげすてかへられければ、其夜親子の夢に、ありがたや御引導にて今こそうかみけるぞとて、白雲にうちのりて西の空に行ければ、みな人ありがたくぞ覺えけるとなり。一体和尚山婆のうたひを作り給ひしとき、ひえい山になかよき人おはしければ、談合にのぼりたまふは、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もありといたしける。此次をいかはせんとのたまへば、彼人もさすがの人にて、定て柳はみどりとなされつらんと有ければ、一体さてもよく推し給ふものかな。柳はみどり花はくれなゐの色々、扱人間に遊ぶ事と仕らんとのたまへば、さこそと云ひて興せられ、



誠に同氣相もとむる心ざし、いとほづかしく思はれける。さてよき次手なり、えい山の堂社を拜みめぐり給ひしに、山法師ども是を聞て、一休はかくれなき能書なり。何にても書てもらはんとて、手に手に硯紙を持きたりてたのみしかば、一休思しけるは、聖道のあて字とかや、定めて文旨なる法師どもならんと、何かな書て取らせんと、いかにもよみがたき一句、さら／＼と一筆に書散して遣されければ、一山の僧よりあつまり、かゝる能書の名僧此山へ來る事は、後世までも寶物ともなるべき語をかかせ置べしとて、其中の老僧のいへるは、先より各かきてもらひけるは、一字もよめず又語も餘りにみじかくて此山の寶とも成りがたし。いかにも大文字にて長く書てたべ、よみがたきは有りても詮なし。いかにもよみ安き事をたのみ奉ると、一山ともに望みければ、一休のたまひけるは、紙筆は候か。中々古へ大師のあそばしける七八尺の大筆あり。紙は何ほどなりともつぎ申すべしと申されければ、さらば紙つがせ給へ、御望の通り長々と大文字を書き、よくよめるを仕るべし。いそぎ紙をつがせ給へとありしかば、何ほどなりとも紙は御のぞみ次第とて、ひたもの長くつぐほどに、えい山の金堂の前より、坂本の人家までなが／＼しくも紙をつぎければ、さらば筆をそめんとて、墨たつぷりとふくませ、べたと紙へかき付て、一さんかけて不動坂まで一筋にひかれて、讀るか法師たちとのたまへば、いや何ともよめずといふ。又墨つぎて不動坂より坂本まで、一筋にはしり引にひき／＼、よめるか／＼とわめき給へば、一山の法師たち膽をつぶし、いや何ともよめずといへば、是はいろはのあさきのく

だりにあるしの字なり。なが／＼とかきてよめやすきは是なりとのたまへば、皆人興をさまし、扱も聞及しよりおどけびと哉と、一度にとつと笑ひて興じけるとなり。今の世までも其しの字ひえい山の寶物となりて有りけるとなり。山法師たちも望みし事なれば、いやともいはれぬ御作意とみな感じけるとなり。

さて御目のさむる御はなしまうさう。さる田舎人はじめて京都一見のために登りけるに、或人のいひけるは、その方京都へ登らるゝならば、文を一通ことづけ申すべし。所も名もしかとぞんせず、定めて都は通り／＼明らかにしれ、小路々々は猶しれやすきよし承る。何方にて尋ね候とも、心やすくしるゝと申し候間、此文をまゐらす。口上にて申しきかす、たしかに覺えられとつけ給へ。即名はさにし秋北春南五百の浪の立かへるとたづね給はれ。もし口上わするゝ事もあらば、此文を見せて尋ね給へとて渡しける。此男文旨なれば、いふより早く忘れ、さて都へ登り文をとり出し、人に見せけるに、讀もの有ともことわりのとほりしものなかりける。此男申すやう、さて／＼きのどくなる文をたのまれしものかな。是をとつけずして歸りたら頼まれしかひもなし。ふがひなしといはれんもはづかし。たづねんとすれば埒明す。とやせんかくと案じわづらひしが、ある人申すやう、此文を千日千夜たづねらるゝとも、合點するものありがたかるべし。所詮この文をもち、是より北西にむらさき野といふ處に、一休和尚とて、名智者のまします。此僧に尋ね見給はゞ、發明にましますほどに、



定て教へ給はむ。早々參られよ。先都ひろしといへども、是を合點し沙汰申ものは、かつて覺えずとかたるとき、此男さらば其紫野とやらんをしへ給れといふに、くはしくをしへける。やがてたづね行き、此よし申しければ、和尚文の上がきを御覽じて、是は都の烏丸通り、どこそにて、雨や千阿彌とたづね給へとくはしくをしへ給ふ。此人さて、かたじけなしたづねまゐるべし。しかし此義理をとてもの事にとききかし給へと申しければ、さればよまづさにしあき北はる南といふときはみなあめなり。五百の浪の立かへりといふ時は、五百をふたつ合るに千なり。さてなみとかくときは、雨やの千なみとならでは、讀くだらずとをしへ給ふ。

又和尚御在世のとき、下京松原通中ほどに制札あり。其札のこしらへやうは、板を丸竹にはさみ、其竹のやうに錢を二ばい入れ札の書やうは、

一餅食たがるもの、事

一酒すひたがるもの、事

一茶のみたがるもの、事

右之通くひたくば買て食べし、只世中は皆錢也、已上

年號月日

かやうに書付けたてありしが、一休折ふし通り見給ひ、さてくめづらしき制札かな、いかさま是は子

細あるべしと、立よりうかひ見給ふに、世の常のせいさつとはかはり、柱を竹にてこしらへたりしは、心ありげに見えたりとて、供のものに汝はこの札を取てかへるべし。我少し思ふしさいあり。はやとくくと仰らるゝ。男申すやうは、是は和尚様とも覺えざる仰られ事かな、かりそめにも是は定めて公儀よりの制札ならん。しかるをむげに奪ひとつて歸らば、後のわざはひいかゝあらん。我等に於ては御めんあれと申しける。和尚き、給ひ、尤も汝がいふは斷なれども、去ながら仔細をしらねば道理なり。先此札をはさみたる竹の内に錢あるべし。此札をうばひ取るべしとの書付なり。早くとりてかへるべし。若たゝりあらばなんちが身にはとがはかくるまじ。此一休が心にまかせおくべし。かつは我あたまをまん丸めし身なれば、半錢も身には付けじ、みな汝が穴一せに、とらせん。早とれとれとすゝめ給へば、きやつもほしくや思ひけん、さもあらば取るべきとてはしりよつて押たふし、まづかなめを引てみて、あつばれ和尚は神通にてましますと、よろこびいさみ打かたげ、それ世の中にぬれ手であはをつかむとは、かやうのことをいふらんとて、ちどり足にてむらさき野へぞかへりける。其後公儀に此札を一休うばひとり給ふよし、ほのかに聞めし、和尚へ使を立られけるに、和尚かしこまつて、やがて目代へ上り給ふ。奉行のいはく、いかに御坊何とて往還に立し札をうばひとりけるぞ。一休されば制札のおもてを見候に、餅酒ほしくば買てくふべし。よの中には錢があるほどにかゝれ候。扱も御公儀は御じひにましますかなと、ありがたく存じ、殊に貧僧の身なれば、取てか



へりて候と申さるゝ。奉行聞しめし、根本これは君より御じひのために國々にたてられ、此書付の面をよく合點いたしたるものは、此札をうばふべしとのしたくなり、よし／＼かへり給へ。かしこまりて一休はむらさき野へぞかへり給ふ。奉行の曰く、さても／＼あの坊主ならでは、かやうのふだを引ぬくべきものは覺えず、たとへ心を知りてうばひたく思ふとも、とやかくと思案し、あるひは世間をはいかり、即時にうばふべきものはまれなるべきに、何のはかりもなく、うばひしはきたいの坊主かな、末の世に至るともかやうの坊主は、二人ともあらじと感給ひけり。

ある人、牧溪和尚の御筆なりし靈照女の繪を持ちけるが、一休和尚の活機なる事をしたひ、讚をたのみ申すべしとて、やがて一休の草庵へまゐり、しか／＼のよしたのみ申しければ、それ社安き事なれ、望の讀して參らせむと、筆おつとりたまひ、さら／＼と書きかものものに渡されければ、ありがたいたいき、さてもかるき御僧かなとよろこび内へかへり、友だちをもよびよせ、日ごろの繪に一休の御讚なされ下されしとかたりければ、おの／＼拜見申さんと、やがて床にかけて拜見しければ、かなまじりに、

汝が親の笮作り 馬祖にだまされて 寶を海にすつる 阿龐居士の娘

と遊しければ、皆人よこ手をうち、さてもたはけたる御事かな、龐居士も靈照女も唐土にての賢人なりと、みな人いひ傳へしほどこそ、定て左様の心をもあそばさるべきかとおもひけるに、格別なる御

事かな、まことに天下の活祖師にてましますと、みな人感にたへたりけるとなり。

また一休和尚は金を山に捨て、玉を淵になぐべくもあらん御けしきなれば、もとより一鉢のまうけより豫てたくはへなかりけるに、大晦日の暮方になりければ、一僕申すやう、明日は元三なり。なにをか參らせん。八木は壹合もなく、青き銅は一錢もなしとなげきければ、一休き、給ひて、それは歎く事にあらず、いざ出よとの給ひて、一棒をふりかたげ、山家街道へ出給へば、折ふしかはらけ賣通りければ、のがすまじと追かけたり。彼者おどろき一荷のかはらけを捨てにげければ、扱こそとめしつれし僕にもたせて、是をしろなし初春をむかへ給ふが、はからず大名はて給ひけるとて、和尚を引導に請じければ、いや參るまじとのたまふ。何とて御出なきぞと申しければ、錢をくれなば行んどのたまふ。安き御事哉何ほどが御用など申せば、一貫八文ほしくといへり。安き事と申奉りければ、其錢をもらひて、彼おひはぎしたまひしところへ行て、かはらけ籠に錢をくゝりつけて、札をたたらけるは、先月の大晦日の夜の土器の代、一貫八文但壹枚に付、一せんづつ帳けし給へと書つけて傍に一句、

貧のぬすみは偷盜戒にはあらず。いかんとなれば、戀の歌も邪姪戒にあらざる證據あり。慈鎮和尚とて貴き聖のよめるなり。

わが戀はまつをしぐれにそめかねてまくすがはらにかせさわぐなり



と侍りけむとかや。しかればとて邪淫戒をやぶりたる人々とはいひがたし。我も貧のぬすみなれば、偷盜戒をやぶりたるとはいへいふまじきなり。

と書れるとかや。さて引導に出給ひて曰く、

人は六道の錢とて六文出す。汝は引導とて一貫八文出す。さつしんがいちじう、さては汝は人に一貫二文勝されり。十方に道あり行たい方へつと行け、成佛まさにうたがひなし。是いかんとならば、有麼地獄のさだも錢がする。

とのたまへば、みな人さてもおどけ人やとて感せぬ人はなかりける。

或僧一休の活機なることを聞きつたへ、いか程なる道徳かあるとて、大徳寺へ行てたづねければ、折ふし一休は門前の酒屋が方へゆき、酒にたべゑひ、前後もしらず臥し給ふところへ、小僧きたり、只今唐僧とかや見えし大和尚の、一休はと尋給ふ。はや御歸りあれと引おこしければ、一休御めいまだ覺めず、うか／＼としておはせしに、酒屋の亭主出て、御醉眠御心よく侍りたるかと申しければ、さてもよき氣味やとて、一首よみて亭主に取らせけるは、

ごく樂をいづくのほどとおもひしに杉ばたてたる又六の門

とあそばしければ、亭主大によろこびけるとなり。かゝるところへ小僧またきたりて、はや御歸りあれ、先に申せし和尚の御待かねと申せば、答もなく又打かへしていびきかいて、そりかへりて寐給ひ

しかば、小僧かへりて何程おこしてもおきあがり給はずと申せば、よし／＼その寐入て何とも思ひよらぬとき、引おこし一問かけたらば、志いよくしれ侍るべしと、彼唐僧一休の臥たるるところへさし足して行き、枕元へどうと座し、何ともいはず引すりおこし、目もいまだあき給はぬに、一越聲を上て曰く、

西來意の祖師の語に俗語ありや

と問へば、その息もつぎあへぬに、一休も大音にて、

汝が俗よ

とこたへてつきこかし給へば、彼大禪師も舌根をふるひて立れるが、さても活祖師や、きしには十倍せり。汝が俗よとは即時に出まじき答語なりと、感氣肝にめいじて歸り給ひけるとなり。

或とき新右衛門、誰の話を參じけるに一休しめしていはく、釋迦みろくは是他の奴しばらくいへ、他はこれ阿誰と、ひ給へば、新右衛門歌をよみて答へけるは、

たそといふことばの下にあらはれてたそこそ誰よたそはたれなり

とよみければ一休これをかんにて、此一そくにて千七百則をゆるし給ふとなり。

一休和尚老年に及び給ふ頃、親をもてる若きもの、心得べきこと、諸經の中にこれありとて示し給ふには、人の子として親に一日も孝行の心わするべきやうなしといへども、就中孝行の心おこすべきは



正月元日 五百日の孝行に向ふ 同十五日 百日にむかふ  
 二月五日 三百日に向ふ 同晦日 百日に向ふ 三月三日 百日に向ふ  
 三月十日 千日に向ふ 四月十五日 五十日に向ふ 五月五日 百日に向ふ  
 五月晦日 九十日に向ふ 六月七日 二百日に向ふ 六月十八日 七十五日に向ふ  
 七月十三日 五千日に向ふ 八月十六日 五十日に向ふ 九月九日 二千日に向ふ  
 十月廿九日 千日に向ふ 十一月七日 五十日に向ふ 十二月晦日 四萬六千日に向ふ  
 毎月朔日千日に向ふ

右の日、親に孝行の心を猶更用ふるものは、それ〴〵の日數に向ふと、釋尊の經說にもあればうたがふべからず、勤よかし〴〵。孝行といふは左のみ六かき事にもあらず。たゞ親たちにかうもなしかくもいたしたならば、安心したまふか、何とぞ安心させ申したきものなりと、することなすことに、朝暮心がけるのみ、これ則ち孝行なり。さて勤めをはりたると前に申した種となりて、其子もまた孝の心父に倍增するものなり。主人に忠義といふも名目こそかはれ、心持はこれに同じと常にしめし給ふは、有がたかりける事なりけり。

卷三

爰に天台坊主に秀清とて、なまこびに惡こびたる坊主あり。多の人によこしまなる道をすゝめ、凡そ佛法はわが心にあり。身の外に佛なしなどいうて、あるひは宮社等の木を伐らせ、佛像を破却させ、先祖をもとむらはす、邪見放逸の坊主なり。内々かれが申すを承はれば、紫野一休和尚と申す小法師は、何程佛法だてをして、悟道はつめの僧など世間にさたするとも、是もつてをかしきぞ。たとへば井の内の蛙が、大海をしらぬに似たるべし。あはれこの坊主にあひなば、おそらく只一句を以てばいこみ都の住居させまじ。あつばれ途中にても逢たきもの哉と、より〴〵是を伺ひける。ある日夕ぐれに一休かへり給ふに、其頃は和尚眼病氣にて一眼はあしき折から、彼坊主に大宮通一條の辻にてはたと行あひたまふ。秀清さればこそねがふところの幸ひなりと思ひて、する〴〵と走りより、いかに御坊々々といひかゝる。一休この方の事かと仰らる。其とき秀清のいはく、汝一眼をてらし歩行する事、もしあやまちある時は黒闇なり。あやふき事全く頼みがたし。一休やがて汝が兩眼より我一がん星まん〴〵たり、一月にかへがたし。見物するときは明らかなる鏡の如し。かやうに答へ給へば、この坊主かさねて一言に及ばず、尻からげて足はやに行方しれず飛うせぬ。或とき一休に問ていはく、何と和尚さま、つく〴〵世のなり行くあり様をみるに、人間のきやう界を



あんずるに、皆我々が知音といへども幾人といふ數もしらず、大かた先だち行けるが、つひに誰あつて言傳ありといふことも聞かず。いかやうの處に何とやうにして居るといふ事もなし、これのみ心元なき事どもなり。やう／＼あちこちとする間には、ひつじのあゆみ近づき、車の庭にめぐるが如く、我が番に當り侍らむ、なげかはしき事どもなり。かやうにあるときは、死しては先なに、成り侍るぞ。一休の曰、

死のちいかなるものとなりぬらんめし酒だんご茶とぞなりけり

と仰られければ、此人また和尚のわる口れいを出し給ふとどつとわらひけるが、又そばなる人の言けるは、さりとして御坊、このうたの心面白く候が、また行もあり行ざるも候よし、これはまたいか成る事やらむ、次手ながらさかせ給へ。一休、

といまるとおもはれそにといまれよ行とおもはれとく／＼とゆけ

といひすて、歸り給ふ。

洛陽に天文はかせ某といふものあり。あるとき一休の庵へ行きけり。和尚出合ひたまひ、その方は久見えざるが、何方へ參られたるぞ。されば私は此ごろさる人にたのまれ、南都にまかりありて候。二三日以前に登り申候。和尚の曰く、何ぞめづらしき事もなく候や。博士こたへて曰く、されば奈良にてめづらしき事を承り候。それはいかなる事にやありけるぞ。博士はんにや坂の邊りに齒をぬく

ものあり。一つを貳文づつにて取ると聞きて、去もの、虫くひ齒をもちて、時ならずいたむるときには、身體さへたへがたきともだえける者かれが事を聞きおよび、齒をぬきに行く。一つを貳文づつなりと申す。此ものいひけるは、それがしは聞き及び、遠方より參りたり。壹文にまけてぬかれよといへば、いや／＼少しもそら直はなく候。御用ならば何時なりとも御越あれといひてまけず。色々ことわりを云ひつくし、せんかたなくかへるべきと思ひしかども、切角此事に參りて、むなしく歸るべきにもあらずとやおもひけん。是非々々まけなくば、二つを三文にてぬかれよといふ。先方のいふやう、さて／＼其方はこまかく直切たまふ人かな。まけておませうとて、二つを三文にてぬきとりけり。此男かしこくも直ざりてぬきたりとおもひ、大きに自慢がほして歸りしを、あたりの者の申すやう、扱扱今この男はせんなき事をしけるものかな。其ぬくべき齒ばかりをばぬかずして、ぬくまじき齒までぬくは、壹文の錢ををしみて、ぬかでもくるしからざる齒をぬく。さりとは世にめづらしき笑もの、これは小利大損ともいふべきかと笑ひける。かやうの珍敷ことをきゝて歸りましたとはなしける。和尚をかしくおぼしめし、ころ／＼とわらひ、誠にそれはおもしろきはなしなり。されば世間の人、利やうに心ふかきは、事にふれて利ぶんをおもふほどに、因果の道理もしらず、當來の苦患をもわきまへざるが如くなると、四方山のはなしをばりて、和尚西の方の遣戸をあけて出らるゝ、博士みて、やがてかくぞいひける。



いかばかり西に朝日のいづるかな  
一休やがて心得たりとて、

天文はかせいか見らん

といひ給へば、博士手をうちて大に笑ひ、いとまもこはでかへりける。

こゝに一休和尚の庵ちかきほとりに、四十からといふ小鳥を養ひける人のありしが、物のあたりにや生ある者なれば死する期あつて、籠の内にむなしくなれり。朝夕愛し手なれし可愛さに、殊外不便に覚え、いとかなしくて、子にわかれたる思ひをなせり。凡非情無心のものだにも各佛性を具せり。

ましていはんや生あるものをや。死出の山三途の河めいどの闇いか有らん。しかるべき智者を頼みて引導わたさばやと思ひ、一きう和尚の庵へ参りて、しかくの事頼み申したきよしなげきければ、折ふし和尚の弟子出あひいとやすき事なり。いでく成佛得させんとて佛前に向はせ、

むかし釋尊八十三ばつだい河においてねはんに入る。今なんぢ四十から紫野に成佛をとぐ

とたからかにこそさづけける。彼者たのしくおもひ、やがて葬りてかへりぬ。是を一休ものこしに聞しめし、たゞ今のいんだうはよくでかしたる小僧かな。風骨によると思しめし、大きによろこびたまひ、機嫌よき事なめならずとかや。

蜷川新右衛門親當、その身いみじき才智發明の道士なるが、和尚のもとへ立入り、禪法に参じられけ

る。誠に佛心の妙具をつたへ、正法眼藏をきはむ、英雄の士といひつべし。和尚も心通相かなひて、ゆゑしくおぼしめさるゝもことわりなり。されば定業期きたりて寂滅の室にいらんとす。胎下のむかしより是を待こと年久く、思ひまうけたる道なりとて、快氣の望さらになく、既に一門はせあつまり、おのゝ今はのかぎりに名残ををしみ、したひ歎くことよその見る目もあはれにて、しらぬ袖さへぬらしけるは、ことわりとぞ見えにける。かゝる愁歎の折ふし、青々たる西の空より、紫雲たなびき空中におほひ、音楽きこえ靈香薫じはなふり、妙なるかな三尊二十五ぼさつ、赫々たる聖衆を引つれ、間ちかく來迎し給ふは、ふしぎなりとも、中々有がたかりける瑞相なり。實うたがひもなく、新右衛門は西方十萬億土極樂世界に往生せしめて、九品上刹の臺にいたらむことは、たなごころを見るがごとしと、おのゝ感にたへざるはなかりけり。されば落日にちかき老士まだ物なれぬ若輩のやから、天にあふぎ地に伏し、ともに死なんとぞくるひける。道理の至極とぞ聞えし。其中に嫡子は新右衛門がひざの元によりそひ、泪を袖に包みながら、いかにあれ御覽候へ。頼母しく思しめされて、往生安全にとげ給へと、指をさしてをしへける。其とき親當ねふれる眼を活と見ひらき、我子をはたとにらみて、それ弓馬の家に生れけるもの、たとへば安養淨刹にいたりて、九品蓮臺に座すとて弓箭をわするべきにあらず。書院の床に立たる重簾のぬりごめに、矢をへてもちきたるべしといふ。聞人驚かざるはなかりけり。こはいかにと見る所に、親當が弓勢、何人ばりとはしらねども、さしもつよかるら



むと思しきが、やがて引くはへ引しぼり、暫しかためて兵とはなつ。其矢あやまたず、三體の中尊ひかりを放ちて立たまふ、阿彌陀のむな板をあなたこなたへ射とほしてければ、空にあまねき紫雲のよそほひも、諸の聖衆とおぼしきものも、たちまち消え陰もなし。いかなる事ぞと了簡すれば、所に久しく経る、むじなの化けこふを経たるにぞ有りけり。誠に稀有の次第なり。終に一首の辭世を作り殘されける、

生ぬるそのあかつきに死ぬればけふのゆふべはあき風ぞふく

とかやうにつらね臨終をとげ給ふ。奇なるかな空寂の玄妙を會得し、邪魔の障碍をはらひ、其身は死門に入ながら、活人のねふりをさまされけるは、世の人の珍事とする所なり。その後一休を導師とたのみ奉り、御引導をこひければ、一休もこの新右衛門には、一かはりかはりて引導すべしと、たくみすましておはしけるに、はや新右衛門が亡骸を輿にのせて來りければ、一休たち出で給ひて、かの新右衛門が乗たる龕をたゝきたまへば、死たる者高らかなる聲を出して、一首の歌をば一休によみかけけるこそふしぎなれ。新右衛門も只人にはあらじと、今の世までも人のいひつたへ侍るなり。その歌に、

ひとり來てひとり歸るも我なるを道教へんといふぞをかしき

とたからかになへければ、その詞のをはらざるに、返歌をし給ふこそ有がたけれ。

ひとりきてひとり歸るも迷ひなり來たらささらぬ道を教へん

とのたまへば、新右衛門も實もとやおもひけん、そののちは音もせず成りにけり。世人これをつたへ聞きて一休は誠に人間ならず、佛菩薩のかりにあらはれ、ひとり來てひとり歸るも道といへば、來たらささらぬと即答なし給ふは、所謂老子に死てもほろびざるものは命ながしといへるも、かゝるためしなるべし。

また新右衛門が最愛の妻、いとけなきときより、萬に心みじかく武々しかりければ、かなしき者にも慈悲のめぐみなく、召つかふ童にも哀憐のなさけ薄かりけり。されば人は似を友とするならひなるに、悟道の居士になれそひて、尊きをしへをしらざりける事、いかさま報のばちなるべしと、皆人ごとにさみしける。新右衛門あけくれ不便におもひて、もとより道者の事なればたましひをくだき、柔和のをしへをすゝめける。しかれども露ばかりもしたかふ氣しき見えざりけり。あるとき餘りいたく制しければ、女房顔をあからめていひけるやう、

あさ絲の長く短かくむづかしやうむのふたつをいつかはなれん

とたいかやうによみておともせず。親當おどろき、日頃のふるまひに相違して、歌の心あまり殊勝なりければ、はづかしくおもひ、わが教へるに及ばずとて、きもに銘じて感じける。ふしぎなるかな今までは、放逸邪見に身をまかせ、誠にくらき人なりと思ひしが、さては我より先にさとりける物をと



思ひ舌をまきける。其後は夫婦のなさけあさからず、ひよくの契りふかへりけり。上しも水魚のこゝろ同じくむつびけるに、つらき者のいひなしにてやありけむ、密に異夫をかさねて二ごころあるよし、まことしやかに新右衛門に告げる。新右衛門もとより、いつはりを信するものにはあらざりけれども、實に思ひあたる事ありとて、物に忍びぬをのこなりければ、暫の延引もなく離別してこそ里へおくりける。女房はをりふし懷妊の心ありて惱みければ、恨みの心淺からず、つるぎをのみほのほをかしまらんともだえかなしみけれども力なく出にける、無實の程こそあはれなる。然れども跡方もなきいはりなれば、誠つひにあらはれて、讒言のしわざとしりにけるより、新右衛門後悔して、又よび迎んとて、我あやまりなるよしいひつかはしければ、女房返事に、

秋かせの人のこゝろに立ならばみのらぬさきにいねといはざる

とかやうによみおこせて、二度かへらざりける。夫より女房のなさけ、たぐひなくいさぎよきふるまひは、返てまさりけりと、褒ぬものはなかりしとなん、或人かたり侍り。いみじくおもしろく覺えければ、かご耳の底にとゞまり、忘れもやらず有りけるを、假初にあらはし侍る。さればかの歌にいづれもかげうたありしとなり。

爰に雲州大原と申す所に、ゆるりや藤太夫と申すものあり。ひさしく京都に住みけるが、元來出雲は生國なれば、又本國に歸りて住けるが、京より國へ下りさまに、妻をかたらひて下りける。此女京に

てねんごろしける男のかたより、度々たよりをうかひ、互に文のかよひありけり。このよしざるものひそかに知らせば、男あるときあまたの文どもの有けるをとりかくしけれど、我はひとつも讀めぬ無筆なれば、力なくたれにか是を見せばやとおもふに、頼むべき人もなく打過しが、折ふし一休、この藤太夫が近所にましますに、やがて和尚を請じて、よき次手なりとおもひて、件の文ども取出し、御坊さま内々ながら御ぞんじの通り、某は目を持たながらの明めくらにひとしければ、此ふみ少し仔細あることにて候ゆる、一々よみて給はれと申しける。一休安きことなりとて、此の文どもをよみかへて、只尋常のふみによみなし給ふ。時に此男、さては苦しうなき文どもなり。餘人の讀たらんには、疑ひもあるべきが、殊に和尚のよみたまふ上は、さらにいつはり給ふとも思はず。さては人の云ひしは皆いつはりなりけりと、不審をはらしけり。此女和尚の恵みあまりのうれしさに、ひそかに禮ぶみをつかはす次手に、

しなのなるきそぢにかけし丸木ばしふみ見しときはあやふかりけり  
とうれしさのまゝかきてつかはしける。一休返事に、

見しときはいかなる事ととう太夫よみをはりてはこゝろゆるりや  
これよりかの女、ふつ／＼身を慎みけるとなり。

都に口痺の妙薬を覺えて、秘藏しけるものありけり。一休効能をきこし召し、いかにもして知らばや



と思召され、やがてたづね逢ひ給ひて、しかんゝの御薬を知らせ給ふよしを承り及びさふらふ。天晴この愚僧に御相傳被下たく、はるく是まで尋ねまわり候と申されける。彼人うけたまはり、中々の事に候。この妙薬と申すは、我等代々つたへ來り、一子相傳の祕方なれば、他にもらす事思ひもよらず。去ながら貴僧ゆゝしき御僧と見奉れば、否がたくこそ候へ。ふかき御執心にてわたらせ給はゞ、他に口傳あるまじき、御起請をかゝせたまへ。然らばゆるして教へ侍らんとぞいひける。和尚聞しめされ、わが身の大事一代一紙の誓文なれども、愚僧にをしへてたび候はゞ、心得侍るとて、墨ぐろにこそ書かれける。やがてならひ得て庵にかへり、あざわらひて宣ふやう、人の病に薬となるべき物を秘藏して、獨覺えたらむは、慈悲のうとき心なり。是等の事を秘藏とせば、おそらくは秘してもひしがたき一大事の因縁をばいかせむ。去ながら佛神の冥罰そらおそろし。さらば札を立て世に知らせんとて、

口痺のくすりの事、もし口痺をやむものあらば、かならず蜜柑の實を黒くやきてのむべし。治る事すみやかにして、ふたゝび發ることなし。これ奇代の大妙薬なり。

と書付たてられける。さて教へける男これを知り、以外に腹を立て、せほねをいからして、いそぎ紫野にはしりゆき、一休をたづね出し、いかに御僧破戒無慙の賣主坊主かな。何とて大事の秘薬を習ひ得て、他に口傳せまじとて起請を書きながら、あまつさへ高札を立て萬人の目にさらす事、いかなる曲

事ぞやと、打はたしても忍びがたしと、眞黒になつて怒りければ、さしもの一休なれども、をめき殺すかとぞ見えにける。されども驚くけしきもなく、そらさぬ顔にもてなし、あらことくしの有さまや、何事を斯くはのたまふらん。起請をかきしも誠なり。しかるに札を立しもいつはりにあらず。去ながら口傳せまじと書きぬれば、口傳は一人もせざるなり。札をたてじと書かざれば、立たるがあまりか、起請に少もそむかざれば、佛神のばちもおそろしからずとて、そらうそむいてましくける。彼者あくまで罵り怒氣にかされ、方寸にせまりけるが、一言のぬけ句に返答をうばはれ歸りける。一休和尚とひとしき沙門ありけり。我が繪像をみづから書てうつし、心づから一しほよく出來たるよとうれしくて、さもあれ、一休に見せばやとおもひ、急ぎ紫野にもて行きける。和尚この繪を一目見給ひ、あな見ぐるしやとて、目を閉ぢ大きに嘲り給へば、いかなれば所存をもちかへり見ず、かくわらひ給ふぞと、打腹だちのしりける。其時繪像を取て庭上へ投付け、土ざうりをはきながら、散々にふみにじり、一筆かうぞかゝれける。

世をすてゝかたちをすてず、びんはつをきりて煩惱をきらす、かりに繪像をかきておのが惡業をかづけ置く、繪像大きなるめいわくなり。

と黒々と贊をかきてわたされける。沙門つくくんと感じ、やがて懷中して歸りける。五月雨のふりついき、はれ間も見えず打しめり、四方のけしきうるほひ、梢も見えわかたぬ徒然わ



びしく思しけん、柴の戸をさし込み、たん然として在します處へ、六十あまりの男と見えて破笠をかむり、いかにもおもひ餘り、うれひに沈みたる有さまにて、しづかに物申さむとうかひける。一休たそやこなたへと宣ひて、柴のあみ戸をひらき給ふ。彼男いふやう、我は近きわたりに侍る者なるが、明日はさる心ざしの日に相あたり候へども、知識をたのみ奉つるかたなく候へば、恐れながら和尚を請じたてまつり、おろそか成る齋をまゐらせ上たく候て、是まで頼み來り候なりと、おもひ入りて申しける。一休聞しめし、もとより出家のいとなみにいと易きことなり。何處のほどぞと問ひ給へば、男こたへて、さん候わが家居と申すは、にぎり川通をこぬけびしやく町と申して、かくれなき所にて侍るなり。尋てわたらせたまは、門にしるしを置き候べし。必らずまち奉り候とて、いとま申して歸りける。一休あとにてつくぐと案じ給ひ、渠はふしぎなる教へやうをいひつる物かな。さらば了簡して見ばやとて、聽て義理をぞひらかれける。抑ににぎり川とは今出川なるべし。底ぬけ柄杓といひしは、えがわ町といふなるべし。いでくたづね行きて見んとて、思ふ當どをとひ給へば、案にたがはず、えがわ町といふ處に行あたらせ給ひける。印といひしは何なるらんと見給へば、表に杓子をぞつりたりけり。これぞしるしなりとて、やがて内に入りて見給へば、きのふの男にあひ給ふ。自出たがりける事な、めならず。我等のおろかなるたはふれを申し參らせ候へど、一々にときわかち、道をもまよはせ給はず、御入候こそいつはりもなき天眼通にておはしますとて、ひとへに釋迦のごとくに

思ひける。男もくせものにて、むづかしく難問をかけんと思ひけるが、法事も過ぎぬれば、膳を出しすゑたりける。其とき和尚膳にむかひ、殊には亡者法味のため、ゑかうをなして三界に手向けん蓋をあげ見給へば、飯にはあらで小ぬかなり。ふしぎに思めされ汁のふたを取見給へば、是も同じく小ぬかなり。残りの物もみな、ぬかなりければ、よこ手を打て、あらいたはしや、さては亡者の三七日にあたり候よとて、かぶりもふらずのたまひける。男はいよくきもをけし、恐れをなして敬ひける。そのとき男いふやうは、仰の如く、それがしは父をうしなひ候て三七日になり侍る、佛果にやいたりけん、もし地獄にやおちぬらむ。後生の事おぼつかなくて、かなしく候と問ひければ、一休仰られけるは、何事かあるべき、たゞ存生のふるまひをば、他人はよしとほむるや、悪きとそしるや、いかいふぞとひそかに宣ひければ、されば平生は常によこしまなること候はず、ひとへに正直にて、まつたき性なれば、他人は佛にてありつると、ほむる者多く候と申しければ、一休聞し召し、しかれば氣づかひなる事なく、是あみだにもあらず、觀音にもあらず、則正直佛なり。佛果を得ること疑ひなしと、事もなげに仰られける。男つくぐと承り、さては心安く候又それがしが兄にて候もの、三年已前にむなしくなりたりしが、常に佛道をもしらす。徒にあかし暮し、はづかしながら天性愚鈍にして、人の口にぬかりものと名を得候事、くちをしき次第なり。たゞし罪もつからず候へば、佛果を得候はんやと問ひける。一休聞し召し中々つみとがなしといへども、佛にはなりがたし。左様のも



のは愚僧がゆるしても人がゆるさなければ、其落るところの地獄を則あはう地獄といふなり。但し今生のごとくに後生の事も侍れば、佛果と地獄と少しも疑ふことなしと仰られける。

さるところに何ともならざる邪氣なる男あり。あまつさへ身をよろしくして、萬不足なくことに下人多くもてり。あまりわがまをいはんとて、表の入口に法度書をしてけり。其札に、

- 一 へつらひあつて奉公はしがちの事
- 一 つかひたふしの事
- 一 おんはとりがちもらひがちの事

とかやうに書いて立おきけり。あるとき一休を申し入れ、萬の咄をはりて一休申さるゝは、何とこれの表にはめづらしき札をかきて立て給ふ。あれは下々への法度がきにて侍るか。亭主なかゝとこたふ。一休をかしく思ひ給ひ、やがてかへりさまにかきそへらるゝ。

へつらひてたのしきよりもへつらはでまづしき身こそこゝろやすけれ

かく云てひそかにおしはかりて歸られけり。  
或人一休にとつていはく、世の中の人の申す事にて候。人の人たるといふ事はいかなる事を申し候や。一休答へていはく、されば此坊主はしらす、足らん身にて候ゆる、いはんや人の人たる事をしるべきや。さりながら若き人の心ざしあつて、やさしくも尋ね給ふをしらぬといふもいなものにて候

むかし物しりたる人の咄しを、ちと聞はつり置候ほどに申て見候はん。まづ人に人たる人と、又人たらぬ人と候がゆるに、人たる人を、人と申すげに候。たとへば鷹などの鳥をよく取るは、鷹の鷹たるに候。鳥を得取らずして、鼠などをとるは、鷹の鷹たるにて、鷹とはいひがたし。猫の鼠をよく取るは、ねこのねこたるにて候へ。もし又鼠をば得とらずして、着などを盗みくらひ候は、猫の鼠たるにてこそ候へ。ねこの猫たるとはいひがたし。人の人たるとは、人の道をしりたる者を申すげに候。又問うていはく、學文にうけ賣と申す事の候。いかなる事にて候や。一休答へていはく、されば是もしかとは知らざる事ながら、申して見候はん。まづうけ賣と申すは、あるひは四條五條の辻に、こまもの店とて棚ひとつに、いろ／＼さまざまのものを取あつめおき、人の用次第に賣るもの、候此者にいろいろにもあつらへて見給へ。何れにても我が職にあらずして、皆上手の仕置たるを請賣いたし候。御用ならば其人にあつらへて參らせんといふが如く、學問にもうけ賣の人こそ多く候へ。あつらへて行はん人はまれにこそ候はめ。ことに老子、莊子、諸子百家のさたまでも、取交へて評論し物知りとのしるは、皆こまもの店に似てこそ候。買手の爲には用にこそ立こともやあらん。賣手はさせる商人にても候はじ。一言一句にても我ものにして守り行ふ人は、はるかにすぐれてありがたかるべしと申さるゝとき、この人つく／＼と聞き居て、さても理りかなとてあつと感じける。  
頃は七月十五日の夜、若きもの、飛上りの、あと先しらすの男、一兩人申すやうは、いざやかた／＼



一休のかたへ行き夜すがらなくさまんと申す。一人が申すやう、されば我等もさやうに存ずる處よく  
 社申し出されたり。かの坊主もうきにうきし坊主の事にしあれば、こよひはことさら十五日、いざい  
 ざ往てうからかさん。尤とてうちつれ行くほどに、折よく和尚寺にましくて、何れもよくこそ參ら  
 れたり。祝義なりとて、はや酒盃を出されて、舞つうたひつするまゝ、一休たちをどられける。竹  
 の切よのたまり水、すまずにごらす、出ず入らず、人とちぎらばうすくちぎりて未までとげよ、紅葉  
 をばみよ、うすいがちるか、こきぞ先ちる物で候。をどれや〜人々よ。若いふたゝびある身かや。  
 只何事もかごとも、わかき時にはたれもかも、いたづらぐるひはあるものよ。それもくるしいもので  
 もおじやらぬ。どく薬變じてくすりとなり候。なにをなげくぞ川ばた柳、みづの出ばなをなげき候。  
 それをなげかばなげかうまでよ。うらゝが身にかゝる事にてあらばこそ。牛はうしづれ馬はうまづれ、  
 あだなうき世はどんなものぢやと、破れ扇のひやうしを取りて、うたはうたへまは舞へ、釋迦の  
 おかゝはやしゆだら女〜、よい人々と踊りをさめ給ふ。皆人は是を見て、扱々御坊のをどりを久し  
 ぶりで見ました。歌のしやうが一だんおもしろしとて、一度にとつと笑ひけり。いざ〜此おもしろ  
 さに、町へ出てをどらん。御坊も同道申すべし。一休心得たりと太郎次郎と申す下人をつれ給ひ、已  
 上四人の人々、おもひ〜にいでたちしが、先和尚のしやうぞくには、かつたいかきの布、なげづき  
 ん、紙子のそでなし羽おり、こしには九寸五分にへうたんを、ぶらりしやらりとさげられけり。わさ

ざしは門前の彦六が一子、お竹がしやうぶがたなを、かねひらざしにひらめきわたして出たまふ。さ  
 てをどりは五條の橋より四五丁西にありとて、こゝぞくつきやうのをどり場なりとて、うちまじはり  
 て爰をせんととをどらるゝ。彼二人のつれも見うしなひ、たゞ主従にこそ成り給ふ。何としたまふら  
 ん、足ももしどろになり、若き女のかたへ、へらへらところびかゝり給へば、女もともに土つかむ。  
 彼をつとが是を見て、そつじなる曲者かな、のがすまじといふまゝに、大ごゑ上げてはりかゝる。一  
 休も心得たりといふまゝに、大はだぬぎにはだぬいで、大手をひろげてかゝられけり。五人三人取つ  
 きて、あなたへはむら〜、此方へはむら〜と、おしかへしおし戻し、しばし捻あふ其ひまに、頭  
 巾早やぶれとびければ、紙子はうしろのすそよりも、ぼんのくぼまで引やぶり、前後ふかくにひしめ  
 きけり。かゝる所へ、太郎次郎は見るよりも、まかせたりといふまゝに、大はだぬぎで、相人のすね  
 かと見ちがへて、おぼんのすねをむすとり、曳やつというて引くほどに、おぼんのつけに打たふれ、  
 腰に付たるへうたんも微ちんに成て失せにけり。大勢打よりらうせきはさせまじと、我も〜とはし  
 りよる。やがて御坊はおきあがり、東をさしてにげらるゝ。下帯はづれてけつまづき、命から〜し  
 のびて寺へ歸らるゝ、をかしかりける事どもなり。  
 都にて大富家なるもの、大事のとむらひをしけることありけるに、折節導師には、いかなる人をか請  
 じ奉るべきと、思案まぢ〜に暮しける。其頃名だかき知識あまたおはしけれ。中にもむらさき野の



一休和尚に、しくはあらじと、明日は法事になりければとて、いそぎ人をぞ遣しける。折よく和尚草庵のちりをはらひ、庭のさうぢしておはしましけるが、少もなづまぬ御僧なれば、心安く領掌し給ひけるが、思しよる事のあるにや、やがてこつがい人に身をやつし、手足にすゝをにじり付け、くさり衣をまとひ、もくづの中より出たるやうに身をやつし、彼門にたち給ひ、乞食ののしる如く、御供養の御施行をたべ、御慈悲を下されよと、とりぐにのたまひける。あるじ邪見に腹を立て、見ぐるしき奴原おひ出せよと下知しければ、其とき下男二三人はしり出、供養は明日の事なるに、今日來てをめぐ曲者やとて、元よりそれとはいざしらず、いたはしや一休を、たゞき出し奉り、さんぐにでうちやくし、ふみたふしてぞ入りにけり。一休はからき命をやうぐに助かり、無ざんのしわざと思しめし紫野へと歸りたまふ。明日にもなりければ、昨日のさまに引かへて、あらたに湯あみし給ひて、衣を改め召されつゝ、七丈の御袈裟をすそながに引かけ、金襴まじりに取つくらひ、もとよりしゆしように見え給ふ。一休御こし給ふぞといひ込ば、旦那大によるこび、佛前へこそせうじける。されども和尚すゝみ給はず、いやそれまではまるまじ。愚僧はこれに候とて、いしうすになり、にじりたまはず。旦那はもだえて是は何ごとにておはします、あらいまはしや、こゝへは下郎の筵なり。こなたへとほらせ給へとて、手を引たて奉れば、一休御らんじて、しからば此衣に料供を給はるべし。愚僧がたまはるべき仔細なしとて、一首の狂歌をかく、

わうばくの三十棒をあてられて身にはれきたる蟬のぬけがら

とよみ給ひて、こつじきも愚僧も同じ火と水なれ共、きのふは棒をくらひ、今日は御齋をたまはる事、偏に此衣の色が光るゆゑなりとて、ぬぎ捨てこそ歸り給ふ。  
 扱も一休和尚は活佛にてましましけると、世上に風聞しけるが、あまりにいほんとして去人申しけるは、この間一休へ参りければ、よく來るとのたまひ、虚空に座し給ひて、御庭のまつ枝に御腰をかけられ、御すゝみなされしなり。不思議なる事にあらずやと、しかぐゝとかたりければ、皆人それは偽にこそ。人間と生をうけ、かゝる自在のなるべしやと、取沙汰しける事をほのかに聞めし、一條の辻に札を立られし書に、

佛法の修行すでに道なり。天眼通を得たり。虚空に座せんとすれば即ち座し、座せまじとおもへば則座せず、通力自在を得たり。若うたがふ人あらば見物すべし。

とかゝれたり。皆人は是を見て、此間人の評判しけるが、かく書せらるゝ上は、更にうたがふ所なし。去ながら魚をくひて、生して吐くと仰せられしも誠ならず。尤なる事にてやあらむといふ人もありしが、いやゝそれとは品かはりたるとて、すこびたる人二三人つれだち、一休の庵室へ行く。御札の表うたがひはあるまじけれど、直々をかみ申し度候て、これまで参りたりと申す。一休出あひ給ひ、中々の事天眼通を得申し候と仰られければ、其中にすこびたるものすゝみ出申しけるは、是はいつ



はりにてあるべし。虚空の事思ひもよらず。先この扇の上にあがりて御覽あれと申しければ、いとやすきことなり。去りながら、其あふぎの上へものらんと思ふ心出れば乗る。今日は早天よりのらうとおもふ心なし。虚空へものぼらんと思はねばのぼらず。重ねて御出あれ。のぼらんとおもふとき、上りて見せんと仰られければ、皆人あきれて歸りける。其中の人申しけるは、いかにしても一休なり。人のあまりにいほんとして、天眼通を得給ふといふををかしくおぼしめし、いましめ給ふなりと感じて歸るとなり。

或旦那きたりて申しけるは、この御寺へ出入いたし候人々申けるは、話則の一そくもぬけたるかななどとして、われらの愚痴なるをなぞり、何とも迷惑いたし候間、何にても一そく御じひに示し給へと申しければ、安事なり。さらば參じられよと有りければ、參ずるとはいかなる事にて侍ると申す。いや何なりとも、佛の道にて合點の行かぬことを尋られよ。かしこまつて候とて、佛殿さしてはしりいづる。和尚をかしく思し召し、見ぬかほしておはしける。せつな間に走り歸るを、いづくへ行かれしとのたまへば、佛の道に不審あらば申せと仰せられしにより、佛の道とは佛殿へ行く道なりとぞんじ、一走見て參りましたが、いかにもがてんのまらぬ事こそ候。あの山門の邊りの松に巢を掛けて候が、何の巢とも更に合點まゐらず。大方鷲の巢とも見えて候得共、しかとわきまへず候と申しければ、いや／＼からすこそ、今時分に巢をかくれとのたまへば、いやとてもの御事に、御慈悲を

たれて示し給はれと申しければ、其儀ならばはしごを持つてのぼり見給へと仰られければ、かのものいそぎのぼりて、彼巢をおろし見れば、なかに鳥の子もなく、何とも見えぬなり。一休何なるぞとのたまへば、何も中には御ざなく侍ると申せば、

鷲の巢をおろしてみればからすにて

これにつけて見給へ。茲が一そくなるはとおほせられければ、彼ものなか／＼何ともつけ申すべきころはなくと申しければ、一休仰られけるは、そこなるは我も汝に一則さづけしらすべき心はなしとしめし給へば、かのものおどろき、さては一休和尚さまも仰られがたく侍るかと申しければ、自心自佛と答へたまへば、よこ手をうつてかへり、終に自得しけるとなり。

洛陽にある遁世じやありけり。あるとき一休の草庵へたづね行き、はじめに見參に入り奉らんよし申しける。折ふし和尚御病氣にて、此間はたれにても御目にかゝる事まかりならず候。御用の事も候は、かさねて御出あるべき由申出さるゝに、此坊主かさねて申すやう、御病氣のよし御尤なり。しかしながら立ながら御見參に入たきよしたつて申しけり。一休かき御僧ゆる、あはまじきといは、さて臆したりとおもはれんもいかやと、やがてたち出たまひ、たいめんしたまふ。此坊主申しけるは、某は洛陽にまかりある坊主にて候。天台の法門をも、かたの如くうけたまはり候。しかれども御坊へすこし不審をたづね申したくぞんじ參り候。一休いかなるふしんばし候や。我等は愚僧の身に



て候へば、いろはの講釋もしらぬへら坊にて、返答申さんもおもひもよらざる事なりとのたまふ。其とき僧の曰く、いかなるをかこれ草木成佛。一休答へて曰く、草木成佛よりなんちが成佛をしるや。又とんせいしや、その成佛はいかなる所にかある。一休なんちが心にとへと、答へたまふとき、やがて此坊主閉口して歸りける。自心の成佛をもしらずして、なんぞや外をたづぬる事愚なり。たとへば盲目が黒白をあらそひ、ゑんかうが月をのぞむにさも似たり。それ道人といつば生死の一大事を心にかけて、むしのりんゑをたゝんとするをこそ、道人とはいふべきに、おのれが心をさへ悟らずして、外を求るといふぞをかして笑ひたまふ。

一休和尚、ころしも春の半の事なるに、花にこゝろをよせ給ひて、幾枝もあつめ、花籠にたてまじへて酒など参り、こゝろもわか／＼となりて、おはします所へ、一休の旦那の奥がた参りける。よくこそ來り給ふとて、さゝなどすゝめ、をかしきことなど御はなしありて、ひたもの酒のみて遊ばれければ、日もはや西山に、をちこちのたつきもしらぬ御寺に彼女房も、べん／＼とはなし居ける。和尚いかおぼしめしけん、こよひは御とまりあれと仰られける。女房の申しけるは、かりそめに参り永あそび仕候さへ、なにとやらん似合ぬやうに侍るに、一夜とまり申さば、うき名やたち申すべし。其うへ夫ある身の事に候へば、いかに心はさはおもひかなひ難く侍る。まづ御いとま申すとて立かへりしを、一休袖にすがりひらにこよひはとまり給へと、引とゞめ給ふに、女房申すやう、いま、では

一休さまは、生釋迦のやうに思ひしが、わらはに御心ありてとゞめ給ふかや。狂がるおほせかなと申しければ、一休笑ひたまひて、其方へ心をかくればこそ、愚僧も是非にと留め申せ、心かけぬ者が御とまりあれと申すものかと仰られければ、沙汰のかぎりや、夫ある身がかゝる事侍るべきかと、ふり切て輿に乗立かへりける。さて夫にあひて一休は佛のやうに思ひ、そなた様もおぼしめさんが、いたづらなる御坊なり。わらはに酒をすゝめ給ひて、今まで引とゞめ剩さへこよひは一夜とまれとかなに仰られる。かならずあの寺へ参り給ふなと、二心なきいけんをくりかへし／＼申しける。夫はさるものにて手を打てわらひ、さりとては佛なり、汝がかくいふも理なり、よく思ひ見よ、いかなるものにも、我をたのむ旦那の女房に、なれ／＼しげに一夜とまれとは、中々出家の身にていひがたし。よし一休和尚と枕をならぶれば、今生後生のうつたへ成るべし。我等をかね侍らず、急ぎ行て一夜遊びたまへ。なに／＼の誓言ぞ。我等のねたみ心はなしと申せば、左あらば引かへし参るべし。御よろこびあるべしと申しければ、急ぎ参りてゆる／＼と和尚をなぐさめ給へと申しければ、女房よろこび、一間の處へたちこもり、おしろい口紅、きつねの化たるが如く引つくりひ、衣裳をかざり、急ぎ輿にも一休へこそ参りける。一休はや寢給ひしに、門ほど／＼たゞく。おどろき立出給へば、かの女いかにも細々としたる聲にて、さきには是非に一夜とまれと仰られけれども、夫の心うかいはしくて、ふりきり立歸りしが、餘り御残り多くて、夫にいとまを乞候へば、苦しからんと申ゆゑ、おはづかしな



がら、とまりに參りたると申せば、一休いや／＼もはやいやにて候。御かへりあれ。先程は、こなたへ心かゝりたるが、はや心かゝらず候。はや御かへりあれ／＼とて、門戸をかたくしめ音もせず。さりとは御なぶり候かと申しけれども、あへて音もせず。是非なくかへりて夫にしか／＼と語りければ、さあらんと思ひける事とて笑ひて、天下老和尚なり。心うごくときは動かし、うごかざればうごかしたまはず。もはやいやとは、誠に行水の如き御心や、いさぎよし／＼。とかく凡人にてはなしとて、いよく尊みける。

さて一休和尚の時代までは、方々の寺々より七月十四日には、大裡へ燈籠をさゝげける。大徳寺にも開山大燈國師より、ゆるありてさゝげしかば、後々まで例になりやめがたくありければ、一休こむづかしくや思召しけん、あるとき大裡へ燈籠をあけるとて、狂詩を一首つゞり、燈籠にそへさゝげ給ひける。

性靈今日出來迎 雨露直供二萬葉棚  
挑得燈明天上月 松風流水讀經聲

と遊しければ、帝叡覽まし／＼とて、まことに一休の詩なるものを、やうなき燈籠を求めけるなり。自今以後大徳寺よりも、何方の寺よりも、七月に燈籠をさゝぐる事あるべからずと仰出されけるとなり。世の人これをき、さても／＼名僧かな、かゝる御心ざしにては定て御寺にも性靈祭りはあるま

じ。若あらば、さこそかはりたることにてやあるべし。いざ人々一休の御寺へ參りて見物し、末代の語り句ともなすべしと、四五人づれにて參り、一休へ御目にかゝり、此間禁裡へさゝげ給ひし燈籠の詩、洛中にて是のみきた仕候。定めてかゝる御心ざしにて候は、性靈まつりも遊し申す間敷候と申しければ、いや／＼われらは三界の衆生をおもふゆるに、有縁無縁の悪鬼をまつりて、しゆく／＼の物を手向候ゆる、廣大無邊なる性靈まつり仕候と仰られければ、皆人案に相違して、此御寺には見え申さず候が、何れにて御まつり候ぞと申しければ、これより四五町わきをかりて候と仰らる。皆人申しけるは、とても御事に見物仕度候。御人そへられ下されよかしと申しければ、きどく成る事をいひ給ふ方々や、人までもなし、我等同道申すべし。水むけし給へと、誠にやかに仰られければ皆々よろこび、御跡に付て行きければ、東の河原へ御出あつて、これ／＼見たまへとて兩手をひろげ給ふ。皆々どこもにて候ぞとう／＼しければ、一休は見給へとてくる／＼と舞ひ、手をひろげたまへども皆がてん行ざりければ、おの／＼は見物なるまじきぞ、といてきかすべし。只耳にて御聞あれと仰られければ、皆人あきれて立居たり。一休一越調あげて仰せられけるは、山城のうりやなすびをそのまゝにたむけになれや賀茂川の水聞給ひけるか、是大なる性靈だにてはなきかと仰られければ、皆人さても／＼いやともいはれぬ御意やとて、感にたへてかへりける。



あるとき、**蛭川新右衛門**来て、**佛法**ばなしなどしてあそびるに、**一休**の仰らるゝは、**今どきの出家**心ざし薄し、**佛**は**五百戒**をさへたもち給ひしとかや。せめて其かず取の**五戒**をばよくたもつべきことなりとのたまへば、**新右衛門**申されるは、**眞に沙門**は申すに及ばず、俗のうへにても、せめて**五戒**は持たき事に候と申すに、**一休**いや俗は是非なきことなり。**出家**にはもたせたく思ふなり。去りながら目に見て耳に聞ゆるもの**五戒**をたもち難し。わづか一尺の**扇**さへ、**五戒**をやぶるうへは、まして**僧俗**生としいけるもの、持ちがたきはことわりなり。**新右衛門**これをきゝて、**此扇子**さへ**五戒**を破り候や。中々破りたり。これ又**和尚**の**出来口**にて侍らん、いで一々とひ申さん、答へてきかせ給へ。いつもの**御頓作**の**御輕口**うけまゐらせんと申しければ、さらば一々とひ給へ。**新右衛門**とて曰く、

如何是殺生戒 答て曰 竹を切て骨とはなさるや。

如何是偷盜戒 答て曰 虚空の風をぬすまざるや。

如何是邪淫戒 答て曰 かなめとくあはせずや。

如何是妄語戒 答て曰 繪をらごとをかゝざるや。

如何是飲酒戒 答て曰 開てざんざいはざるや。

これ**扇**の**破戒**ならずやと仰られければ、**今に始めぬ御口**なりけれども、**一入**ありがたくぞんじたて

まよつる。さりながら**五戒**の中、**偷盜戒**のおん答に**不審**申たく候。**和尚**の曰く、いかなるふしん候ぞや。**新右衛門**のいはく、**古語**に、

扇是日本扇 風不日本風

ときく時は、**扇**こそ**日本**のあふぎをうごかしめ、**風**は**日本**ばかりとはかぎらず。**千里**同風とあるからば、ぬすむところいなやとおどけて一句申しければ、**一休**、**新右衛門**とのたまふ。やあといふ。音もなく香もなき人のこゝろにてよべばこたふるぬしもぬすびと

とあそばしければ、さてもよき御口や、先ほどよりの問答を御六かしながら、**一筆**あそばされとて、書でもらひて、其ま、掛ものにせられけるとなり。此かけもの都の中に持たる人あり、これを寫す。或人**一休**にとうていはく、何と**和尚**さま、世の中に化ものは、人毎にきどくふしぎと申すものと覺え候。さうやうにて候や。**一休**答て曰く、いや只中にぶらりとこたへたまふ。このをとこ大にはらをたて、さても御坊はきこえ申さぬ御返事かな。それ人の物をとひかくるに、凡そ法こそ有るべきに、中にぶらりといふあいさつは、つひにうけたまはらず。それは人をなぶりたまふか、御出家には似合はぬきぶんや。是非とも此うへは仔細をたづね申さで置まじ、坊主とはいはせまじ、諏訪八まんも御示現あれと大にいかり申しける。**一休**この有さまを見給ひ、さてもく其方はたんきなおそろしき人かな。そなたのやうなる人とはもの、咄しもならぬ、仔細は其はなしくはうといふ氣ぶんなり。先よく



合點しておみやれ。そなたはもの、不思議をとふゆゑに、そなたへ幾度も申し聞せる事なるに、同じ事をまたはいひまたは云ひをめさるに、がてんのゆかぬ人かなとおもひて、只今のやうに返事いたす事なり。それもの、ふしぎを立ればふしぎ、不思議もなしと思へば、ふしぎ成る事は一つもなし。また佛も神も有りとおもへばあり、なしとおもへばなし。さればあるにもあらず、無きにもあらず。扱あるときは中にぶらりといふ物ではなきかといはるれば、此人手を打てかんじけるとなり。

卷四

一休和尚の御弟子に雲知坊といふ者あり。江州にすみけるが、年月を経て師の御もとへとむらはんとて、紫野へ参り寺門へ入らんとするに、小法師棹をもつてうたんとす。こは何事ぞといはんとすれども、物もいはれずにげ去りぬ。是はいか成る事やらん。はるんと思ひたちて來りしかひもなく、むなしく歸るべきかとおもひて、又行くときに、小法師此うしはいかさま思ふ事のあるやらん度々來るといひて、まづかたはらに引入れつなぎおく。其時我身を見れば牛なり心うき事限りなし。是は日來の信施のつみふかきゆゑにこそとおもひて、尊勝陀羅尼こそしんせのつみをせうめつする功德あれと、さすが聞置て誦せんと思へども、ならはざる事なればかなはず、せめて經の名なりともとなへんと思へども、舌こはりていはれず、只そやめくばかりなり。此牛は病のあるにや、草もくはず水ものもすそやめくと人云ひけれども、心うさに食物の事をもうちわすれて、三日三夜そやめきしが、心ざしのつもるにや、尊勝陀羅尼といはれたりけるとき、本の法師になりぬ。さてつなをときて和尚の御前に行きぬ。和尚仰らるゝは、御坊はいつきたれりといひ給ふに、三日已前に参りたりと答ふ。いづくに今まで有りつるぞとひ給ふに、馬屋にさふらひつると、有りし次第をかたりける。和尚不便におぼしめして、彼尊勝だらにををしへたまへば、いよく此坊主得道しけるとなり。淺ましき事なり。



おそるべしはづべし。江州しやうれん寺に、一休おはしましけるとき、ある夜ふしぎの夢を見たまふ。其隣家に角助とまをすもの、親喜助といふもの、三年已前に死しけり。今生に居るときは、まさしく片目にて有りしが、一休へ夢中にかたり申すやうは、われは死して雉子になりたり。いつ幾日には地頭より御狩に出たまふ。さらば我命はたすかりがたし。此寺へにげ入る事あらばかくしてたべ、生々世々にうれしとおもはん。我もとより御ぞんじのごとくかた目しいたりしが、其折からなれば、定めてきじのかずも多く飛入る事あるべけれど、片目しいたるをしにたすけたまへと、ものおもひたるすがたにて、なくかたると見て夢覺めぬ。あやしく思しめす所に、次の日あんの如く地頭たか有りける。しかるにきじ一羽寺のうちへ飛入りぬ。和尚御覽じて扱はかの夢に見つるきじは是れならんと、取て見たまふに、彼がいひしごとく片目なし。やがてかまの中へかくしてふたをなし、さあらぬ體にもてなし給ふところへ、かり人うち入りて爰かしこ見けれどもをらず、力なくして出けり。和尚此きじを取出して、今の世繼角介にしじうをくはしく語りたまへば、角介なみだを流し、此鳥をもらひ、飼ごろしたると聞きはべる。ふしぎなりし事どもなり。江州に竹林寺といふ寺あり。此住持生質香低くして、三尺ばかりなりけるが、さる方に思ひ入りたる美少年ありしを、ひそかにかたらひ、折々寺へよびせねんごろせられしが、何とかしてうちたえ、

久しくきたらざれば、此住持大に氣をくさらかし、何事もうちすてねまにうちふしけるに、下人少しのぶてうはふありしを、腹だちまぎれに枕をなげうちして、さんくんに、悪口しける所へ、一休もとより竹林寺はしたしければ、はからず來られて、此體を見て、是は何事をいひて腹立し給ふぞ。まづまづかんにんめされよ、何とばしいたされしやと申されければ、住持ひそかにかたりて、かやうくの仔細ありて、此ごろは打たえまゐらす。何とぞしてよび度候が、親兄弟の前をしのぶよし承るが、何ぞ夫となきかこつけて、うちたえきたらざるはいかなる事ぞと、とひやり度候。御坊には才覺人なればよろしく頼むといふに、一休うちわらひ、夫は何より易き事なり。此ごろ澤山にある菜と錢と小糠とをすこしづつ紙につゝみて遣り給へ。竹林それはいかなる事ぞ。一休申さるゝはなせにこぬかといふ事なり。竹林きて、一だんおもしろく候。さらば明日はこれをもたせやるべし。今日は雨中にて猶さら心さびし、幸ひ坂本より珍酒をもらひたり。一つまゐられよ。我もたべ申さんとて、たがひにさいつさゝれつ酒宴なかばに、一休たつてをどられけるが、しやう歌に、  
君がこぬとてまくらがしろか、枕ななげそとがはなし。ちくりん／＼ちんちくりん、さなちくりん  
ぢやほどに、きのそんよな、をどりはなんよさで、ちやせんやころさ。

とうたひかなでてかへられけり。をかしかりし事どもなり。其頃江州鳥山村といふ所に、六條ながしどの、御領分にてありけるが、久瀬又右衛門と申す家老と



うよく心のもの成るがゆる、百姓をひたものせぶりとり、あまつさへ農具までもとりつくすにより、百姓おのづから耕作もならず、在所に住れずして、一人づつ行方しれずのく程に、やう／＼残る百姓わづかになり、何れもこれをなげき、いかいせんとひしめきあへり。其中に一人が申すやうは、いかに百姓なればとて、是は餘り無道なるしやうかな。耕作の道具までもとられては、何を以て作りをせん、しかれば在所にありても詮なし。とても死する命なれば、此事を一先うつたへて、其後はともかくもならんとおもふはいかにと申しける。この儀もつとも一同し、さて訴状を認むるに及んで、たれかれといふといへども、皆一文不知のものどもにて、たれか書んといふものもなし。折ふし一休はちに行き給ふを、幸のことなりとて皆々立よりて、訴状を書いて給はれといふに、一休き／＼給ひて、何事の訴へにやと問ひ給へば、しか／＼のよしをかたるに、一休聞て、いや／＼それは訴状までには及ぶまじ。是れをもちて六條どのへさ／＼げよとて、歌を書きてやり給ふ。

又もまたとりてもきかぬ一村のう具残らずくせやとり山とよみて、是れをつかはされければ、百姓どもかゝる事にては中々とり上候事、思ひもよらずと申しければ、一休いや／＼これにてよし。是非これをさ／＼げよと仰られて歸り給へば、いづれも如何あらんとおもへども、みな土百姓のあかりどものより合なれば、論ずれどもめづらしき分別も出ざれば、是非なくして彼のうたをさし上げければ、六條どの御らんありて、めづらしき訴状かな。百姓

の分としてかゝる事は思ひもよらず、定て人だのみて書きつらん、有のまゝに申すべし。若陳じなばくせ事なりと仰らるゝ。よつて一休をたのみしに、一休これにて事足と申せし趣を申上げければ、さればこそ其おどけ僧ならでは、かゝる事ははんもの有りとも覺えずと興じさせ給ひて、其のちは農具をもちかへして、百姓になさけふかゝりしとぞ。

さて一休江州にましますとき、ある寺の卒都婆がばけて、八尺ばかりの入道、よなく／＼そとばの影に立そつて居ける。下部のものども是れをおそろしがり、用事をとゝのへる事もならず。況てあたりへは猶參らず。いかなる子細ぞと知人もなし。或人和尙にかくとかたる。一休その卒都婆を見給ひけるに、文字のちがひあり。さてはとてやがて改ため書たてられける。或ときくだんの妄靈夜半のころあらはれ、一休の前にひざまづきて、なみだをばら／＼とこぼして曰く、我地獄の中に入りて、さま／＼の苦を受くる事たへがたし。あはれ御僧すみやかに救ひ給へと、たゞしほ／＼とくどきける。和尙のいはく、汝圓通より出て圓通にいたる。何れの所にか地獄ありやと仰らるれば、入道こたへて曰く、いや／＼くちうを論ずる事なかれ。たゞ此體を見よ。和尙のいはく、其體まつたく佛性同體にへだてなしとのたまへば、又入道申すやう、しからば名を付てたべといふ。一休のいはく、本空道入禪定と申さるゝとき、其まゝ靈きえん／＼としてうせにけり。其後は二度出ざりけり。一休にとむらはれんが爲に來れりと、皆人申しあへりける。あはれなりし事なりけり。



あるとき一休痴氣にてこしをいたため、のびかみも自いうならず、迷惑し給ひ、いろいろ養生し給へども、いたみやみがたし。さる人來りて申すやう、其せんきには鹽風呂がなによりもよく候。其いたむ所をいく度もふき付れば、やはらぎて即時によく候。私も此頃せんきさしおこりしを、風呂にてふき候へば、其まゝやはらぎ、あくる日はゆる／＼と、立ちも自由にいたし候間、御内の次郎太郎御つれなされ、かれに其いたむところをよくふかせ給へとをしゆるに、さらばとてやがて鹽風呂へ入り給ふ、次郎太郎もともに入りけり。さてかのいたむところをふけよとてふかせらるゝに、二人のものがやがてふきにかゝりける。其ふきやうに、ちくしやう／＼と聞いて、ひたとうちたゝいてふくとき、一休つく／＼と聞給ひて、何とか合點し給ふやらん。其儘返答に不奉公々々々々と答へ給ふ。太郎次郎もふしんにおもひけれども、主人の事なれば、いかゞと問ふこともならずしてうち過ぎぬ。ある人湯よりあがりかたすみにゐて、つく／＼と聞きてはらすぢをよれり。此人わざとだまり居て、あくる日和尙のもとへ行き申しけるは、和尙さま夕べ風呂へ、次郎太郎をつれさせられ御入りなされ候や。されば此中はせんきにてめいわくいたし居る所へ、ある人のをしへにて風呂へ行き、そのいたむ所をよくふかせよと有ゆる、夜前湯へ參り候。其方は何として知り候ぞ。いやさる人のはなしにて、夕べうけ給り候。しかれば世には風呂をふくものも多く、ふかるゝものもおほきに、なんぞちくしやう／＼とふけば、ふかるゝ者不奉公々々々と答へ給ふは、さて／＼めづらしきふきやうふかれ

やうと風聞仕候。さやうにふき又こたへ給ふは、いかなる事にて候ぞと申しければ、一休それは次郎太郎が、ちくしやう／＼といふは合點まゐらず、拙僧はもとより畜生にてもなし。またちくしやうといはるゝべき覺えなし。しかしちくしやうなるしわざがもしあらば、彼らが奉公のしやうがあしきゆるならん。さるによつて不奉公々々々とこたへたるなりとのたまへば、此人をどり上り手をうつて感じけるとなり。

江州堅田の浦に、彌五郎といふ船頭一人ありける。おのがわざながら、いやしきいとなみにやつれば、一生がま穂の襖楫の枕をそばだて、眞の道にうとくして、心ざしきながらえびすの九重の花にあそぶともがらにははるかおとり、おのづからいやしきになれて、いみじかるべき事を露しらす、かたくなに尊きをしへをはちてやまざれば、いとあさましきすがなりけるが、つひに身まかりて死しにける。妻子したひなげく事かぎりなく、さてあるべきにあらざれば、火にやせん土にやうづまんとかなしみける。せめていかなる知識をも頼みて、後世のくげんをたすけたきと思ふ折から、一休風雲の行方を思しめして、浦のかたにねまりゐて、四方の致景をたのしみておはします所に、妻子これを見て、衣のすそにすがり、たい今かやうのあさましきもの、相果候が、あはれ御じひをたれて、彼もの、後世のくるしみを導きてたまはれかし、生々の厚恩にて候べしとかなしみける。一休ふびんに思しめし、何より安き事なり。引導さづけ得させんとて、此家にきたり給ひ、其志給ふ様こそふしん



なれ、先々死人を米ごもにつゝめよとて、たはらに入て繩をかけ、丸太舟にかきのせ、湖水の波にう

かべける。おきにいたりて聲をあげ、高らかにのたまふやう、

此俵はこれ元來米俵にもあらず、豆俵にもあらず、

汝はかたの彌五郎俵なり。江河にしづんでうろくづのゑとなり、

佛果を得よ。喝。

との給ひ、水の底にぞつき入れける、是成佛の引導なり。

又一休堅田の庵におはせしとき、海はたへ立出給ひては、毎日つりをたれては魚をとりてまゐりけ

るに、御弟子兄弟の僧達、これは不律なる仕合なりとて、一休を一間のところへ呼入れ、口々に意見

しければ、一休の曰く、各たちは學問をするとして、何事をかし給ふや、我等はいにしへの祖師の眞似

が禪宗の學問と心得たり。しかれば例なき事は仕らず、いで古の例を知らずば見せんとて、もと

より繪はきやうなり。蜆子の海老をつり給うて、喰ふ處をありくと繪に書き、一首の歌をかゝれけ

る。

いにしへのかしこき祖しは蜆を釣し我はあほうで魚をつりてくふ

と遊し、かの僧たちにさし付、さはらぬふりにて居られける。みなくかの繪を見て、さても奇容な

る繪や、見事なる歌の書ぶりやと感じける。其中にての老僧あざわらひ、古の祖師の蜆を釣参りしと

て、貴僧の若きなりにて魚をつりまゐらん事、鵜の眞似して鳥の水をのむといひし類なり。さて貴僧

はこの蜆子和尚のえびつりて参りし、御心根をしらしめしけるか、中々及なき事やと笑れければ、一

休少しもさわがず色をもかへず、さて貴僧の愚なる心にては、蜆子海老を喰し心根がてんはまゐ

るまじ。それ人は若にもよらず老たるにもよらず、道においては老若はあるまじ。老たるが悟道せば

門外のむく犬も悟道すべし、世尊は三十成道とうけ給はる。我等が祖達磨大師のいにしへを承るに、

ある時般若多羅尊者の來り給ひて、光明かくやくたる壁をさゝげ、三人の皇子に見せ給ひつゝ、心を

ためさんとして、おのゝ此壁を寶としたまはんやと問ひしとき、御兄二人はこの壁にまさるたから

又あらしとの給ひけるに、達磨大師は七歳にて一の乙皇子なりけれども、此壁は世實にて實にあらず、

智光の珠こそ又なき寶なれとて、彼壁をなげうち給ひければ、尊者おどろきかゝるいとけなき身にし

て、ふしぎなる人かなとて、則御名を達磨と付られける。はじめは菩提多羅と申せしとかや。達磨と

は萬事に達し通じて、みがき立たるやうなる人なりとの心とかや。然れば悟道は老若にはよるべから

ずと、一休手を打て彼老僧が意見の拙きを笑ひ給へば、老僧は人中にて込付られ、赤面して申されけ

るは、かる口にまかせて申されたり。如何に口にてはいふとても、心はさもなきものなり。貴僧は實

正蜆子のえびまゐりし、御心根をしり給ふか。一休答へて曰く、中々存知たり。老僧申さるゝは、各

いかに思しめす。それ禪宗は以心傳心なり。いかで蜆子の御心が知るべき。蜆子の心は蜆子ならずば



しりがたしとあざわらへば、皆々尤もと打わらひて、蜺子の心はなか／＼凡人のしるべきにあらず、しかし一休は蜺子になりて御覽じけるか。一休少もおくせず、扱々おの／＼はおろかなる事をのたまふものかな。我等は蜺子にならねども、蜺子の心はよく知りたりと宣へば、みな／＼それはうけがたき返答ならん。一休さればとよ、おの／＼は此一休が心になり申されねば、愚僧が蜺子の心になりたるかならざるかしれ申すまじと、大に笑ひ給へば、おの／＼藤咲門にてにげられるとかや。

爰に一休の時代に、蜷川新右衛門尉親當といふ人ありけるが、禪法に身をやつし心をなやましけるに、一休の發明なる事をき、及びて、導師とたのみ奉るべしとて、あるとき一休の草庵へたづね行き、柴の扉をほと／＼とた／＼と、折節和尚出たまひて、いかなる人ぞと問ひ給へば、いやくるしうも候はず、佛法修行の大俗まゐりて候と申されければ、一休はやとひたまはく、

なんぢはいづくの人ぞ。  
國には何事も侍らぬか。

こゝはいづくとかしるや。  
いかにしてか染けるや。

ちりての後はいかん。  
原には何事か侍る。

鳥はかう／＼雀はちう／＼。  
むらさきに染たる野邊。

尾花、朝がほ、紅菊、紫蘭。  
宮城野がはら。

水は流れて沈々風は吹て颯々。

よき哉やこれ／＼と請じ、茶をまゐられよとて、

なにをがな參らせたくと思へども達磨宗には一物もなし

返歌

一物もなきをたまはるこゝろこそ本來空の妙味なりけり

と申されければ、一休のたまひけるは、聞及びしより蜷川どのには、道心者なりとて感せられける。さて四方山のはなし過て親當申されけるは、少し承りたき事あり。邪正一如といふ心得はいかなる

がよく侍るや。一休聞給へとて邪正一如の心を、

生ては死るなりけりおしなべて釋迦も達磨も猫も杓子も

又問ふ。空即是色とはいかん。答へて、

白露の己がすがたは其まゝに紅葉におけばくれなゐの玉

又問ふ。色即是空の心は、

花を見よ色香もともにちり果て心なくても春は來にけり

又問ふ。世法はいかに、

よの中ぞくうてはこして寐て起てさて其後はしぬる計よ

又問ふ。佛法とはいか成る心得をよしと侍らんや。



佛法はなべのさかやき石の髭繪にかく竹のともずれの聲

と、一々問ふ言葉の下に歌よみてこたへられければ、親當舌をふるはかして、聞及しよりたけき活僧かなと頼もしく思ひければ、いよ／＼道を示し給はれ、いつまで語るも濱の真砂のかす／＼なれば、先御いとま申すとて、しをり垣の邊まで歸りけるが、手をはたとうち立ち歸りて、一大事の安心わすれたり。佛にはいかゞして成りけるぞと申しければ、一休きやつはくせものかなと思しめし、それはいと易き事なりとて、ふんぞりかへりて目口をひろげて、かくして佛にはなるよとのたまへば、親當おどろき、活大禪師かなと心空及第してぞかへりける。

一休和尚は奈良のたき木といふ處に、折々はおはします。其邊の村々は近衛どの、御領地にて有りけるが、左近尉といふ家老、百姓をひたものせぶり取りけるに、百姓ども之れをなげきて、いかゞせんといひしめきあへり。其内老人申しけるは、いかに百姓にあたり、きつとしても武家とははるか違ふべし。御公家の長袖なれば訴へ申して見んとて、訴狀をたくみける所へ、折ふし一休鉢をひらきに出給ふ。百姓ども一休を請じ、この訴狀を御書き下されよとたのみければ、安き事なり。いかなる事ぞやとのたまふに、しか／＼の事よし申しければ、長々しき狀までもなし、是をもちて御館へさ／＼げよとて、

よの中は月にむら雲はなに風近衛どのには左近なりけり

とよみて、是れをさら／＼とした／＼めつかはされければ、村々の百姓、かゝる事にて免多たまはる事、思ひもよらずと申しければ、一休ひらさら此歌をのみさ／＼げよと仰られて歸り給へば、せんかたなくこれを御館へさ／＼げければ、これは何もの、よみけるぞと仰出されける。百姓申しけるは、薪木の一休の作にて候と申せば、その放者ならでは、かゝる事はん人今の世に覺えずと興じ給ひて、多くの免を下されける。

一休丹波路へおもむきたまふ。ある山里に二三日とうりう有りけり。在處のもの、申しけるは、いかにたびの御僧、この郷境に二町ばかり南郷に天台の寺の候ふが、この寺夜になれば、すさまじき家なりして、色々ふしぎなる事どもあるにより、我すまんといふ坊主なし。其仔細は去々年たびの僧たのみおきたるに、去方より三年忌の率都婆をたのまれ、此坊主の書きたるが、其より時ならず火焰もゆる。其火の高き事一丈計りあり。郷内は申すに及ばず、りん郷二三里の外までも其かくれなし。されば其坊主も、さま／＼經多羅尼を修しとむらひしかども、しるしなれば、いつの頃か此事はづかしくや思けん、夜ぬけて行方しれず。故にこの里の女わらべ、よるにもなれば、恐れて門せどへも出られず。其のち或坊主を入置きしに、是も三日とこらへずして又出られ、其よりわれ住せんといふひじりなければ、おのづからあき寺となり、朽はてんこそ惜う候へ、是はいかなる事にてや候らん。一休聞給ひて、さやうの事はいかほどもある事なり。それは別の事にてはあるまじ。定て率都婆の文



字の書ちがへしゆゑならん。それがし書なほし參らせなば、別の義あるまじ。さらば同道申さんとて、くだんの寺に行き見給へば、法華經の要品なり。あんの如く文字一字ちがひあり。あらため書き直し給ふ。其文字にいはいく、十法佛土中唯一乗法無二亦無餘佛方便説とかき、これを立おかれよ。かさねて仔細はあるまじとて、和尚はそれより西國方へこゝろざし給ふ。其後は此寺無事になりけり。ひとへに和尚を神佛の化現なりといはぬものなかりけり。

又丹波のそのべより、三四町南の在所に、かめといふ女あり。母一人にぞ有りける。その三四軒となりの喜八といへる者の方へ、かねて縁付のやくそくありしに、或者いかなる意趣やありけん、さまざままいひさがして契約返がへさせて、隣郷よりあるもの、娘をよび入けり。此女これを無念におもひて、病となり終に死たりしが、かの喜八なるもの、かたへ、亡靈よごときたりて恨をのべ、喜八の首をしむる事たび／＼にして、其恐さがざりなし。さながらかのむかへし女も、恐ろしとて親里へにげ歸れり。喜八が親類此事をなげき、神子山ぶしをたのみて、さまざま祈禱をなすといへども、さらし止ざりし折から、一休園部にましますよしをきゝて、此よしをねがひしに、和尚、破地獄の誦をかきて、これを喜八が首にかけねるべし。また家のうちにはるべしとのたまふを、教のまゝになしければ、其後ふたゝび亡靈きたらざりしとなり。

又讃州三木の郡より、二里ばかり奥の山里を修行し給ふに、在所のめん／＼申しけるは、修行者は何國より來り給ふ人ぞ。此邊は草ふかき山なれば、元より佛を供養する事なければ、況して御僧などには、一鉢の慈悲をほどこすといふ事もかつてしらす。誠に今生の罪人といふは我々が事ならん。あはれ是にしばらく逗留ましますせかし。一偈一句の道理をもうけ給はり、活佛にこそならずとも、せめて死佛ともならばなどいひて、四五日もこゝにとゞめ置けり。一休申さるは、是より北にあたり松林の見え候。いか成ところにて候や。在所の者こたへて、御尋なくとも申上たき事にて候。あの林につきて御物がたり有り。抑あの林のうちに古寺あり。しかるにむかしより變化ありて、其形何ともしれぬもの三人出て、よる／＼をどりくるふ。いか成る法師にても三日と住せずして立のくなり。此寺古來より由來ある寺にて、本尊は一刀三禮春日の作とやらん申傳へ候なり。尤什物もあまたあるよしなれど、かの變化にてたれか住せんといふものなし。御僧貴くましますせば、あはれ變化をもしりぞけ給ひて、此寺に住したまはは、これにすぎたるよろこびなしと、くはしく語りければ、和尚き、給ひ、それこそ一だんの望みなり。佛道修行もさ様の寺をとりたて、こそ、本意と申すべけれ。いづれもおたのみ申す。はや／＼肝煎られ給はれとのたまへば、いづれも大によろこびて、やがて同道し、彼寺にともなひ、和尚ひとりを残して、皆々にげかへれり。しかるに其夜五更にもなれば、聞しにたがはず人音して、三人の變化出きたりをどりくるふ。一番に出しはげものがうたをきけば、

東野のばづはいとしい事や、いつをらくともおもひもせいで、せばねはそんじあしうちをりて、



終にはのべのつちとなるく。

又二番目の化ものうたに、

西竹林のけい三ぞくは、あるかひもなきかたわにうまれ、人のなさを得かうむらで、竹のはや

しにひとりぬるく。

又三番目の化もの歌に、

南池の鯉魚はつめたい身やな、水を家ともじきともすれば、いつもぬれくひやくと、く。

とうたひ、ひたものをどりける。一休一々合點したまひ、何さまさやつらをしりぞけん事やすかるべ

しと思ひて、さて夜を明し、所の人々をよびよせ、變化のやうをかたり、先一ばんに東野のばづとい

ひしは、是より東の野原に馬のされかうべあるべし。又二番に西のやぶのうちに、三足のにはとりあ

るべし。三番はこれより南のかたに池ありて、其うちに鯉すむべし。これを取あつめ給へとのたまふ

ほどに、人々ふしぎにおもひ、それくさがし求むるに、其ものみなくありしかば、一休其品を葬

りて讀經し給ひしかば、夫よりかつて怪しき事なく、一休すなはちしかるべき僧を住持せしめ、和尚

はなほく奥へと心ざし給ふ。よつて今にいたるまで、一休を權者といはぬものぞなき。

さて又讃州に榊原兵内と申す武士あり。久々わづらうて醫術を盡すと雖も、さらに其しるしなし。

殊に重病なれば最後近づきぬ。折ふし一休郷内にましますよし、其かくれなく内々殊勝なる御坊のよ

しき、及ばれ、いそぎつかひを以て、此度りんじうの一大事をもきかせ給ひて、すぐなる道へ引入た

まは有がたかるべしと、申しつかはしける。一休聞しめし、之こそ易き御事なりとて、其まつか

ひとつれて參らる。和尚取つくらふ事もなく、やぶれ衣にやぶれ紙子の所々はのりはなれ、さなが

らとびの身ぶるひしたる風情も、之よりまだましならんといへる風體にて、病人の間近くより給ふ。

家内の人ども日頃き、およびし僧なれば、如何さま成佛安心至極のむねを聞くべきと、我もわれも次

の間につめかけ、かうべをかたぶけ耳をすましてきく所に、一休なにとなく病人の耳に口をあて、

大音にて曰ふは、

汝すでに末期や、我も行き、人もゆく、只これ一生は如レ夢 如レ幻

と、かくいひ捨てかへり給ふ。何れも勝手には一門家の子あつまり、扱もくめづらしからぬ一休坊

主のすゝめかな。夫りん終をすゝむるといふ事は、成佛かんじんをいひきかせて、心安くをはらす

をこそ、りんじうの一大事をすゝむるといふものなるに、かゝる語は坊主のいふ迄もなく、皆がんせ

んに人毎にいふ事なり。さても一狂の坊主かなと口々に申しあへり。かゝる處へある出家きたり、此

よしをき、いやくそれは何れもの不合點なり。一休ほどこそ候へ、かやうの語こそいかにも殊勝

におぼえ候。總じて禪宗悟道の坊主などといふものは、餘宗などのやうに、あるひは念佛題目をと

へ尊ぶところへ御參り、やれありがたき事のおはするなどといふ事は、禪僧などは申さぬなり。い

一休諸國物語圖會 卷四

六百七十三



かにもいかにも右のすゝめ、しゆしようやと申しければ、いづれもはじめてさこそと會得なし、皆一同にかんじける。さて御内に恩を深くかうむりたるものども、御さいごの殉死の面々、たれくなくぞと、其用意とりぐくにひしめきけるを、一休ほのかにき、給ひて、其夜門前に一首の狂歌をたてられける。

世の中に生死の道につれはなしたゞさびしくも獨死獨來

明れば御内のものこれを見付て、さつそく老士へもち出て、何れもうちよりいかなるもの、立つらんとせんぎしける折から、又かの僧申さるゝは、この作者別人ならず、一休禪師に必定せり。實に尤の狂歌かな。此のうたはみな人はひとり來て、ひとり死する身なれば、たとへ誰かれ冥途の供をすればとて、便にはなるべけんや。五十人百人殉死するとも自業自得果なれば、めいくの罪障により、百人が百所へわかれ行きて、主人に付従ひ行くものにあらず。さればあたら若者どもを殉死なさせんを歎きて、此歌を立られたるならん。今殉死せん命をもつて、世繼の君を守護なし給はんこそ、御家長久ならんと、理を盡して申されければ、みな此理に同じつゝ、かさねて殉死のさはなかりけり。されば死するに定りたる面々は、一休を活佛と尊みしは理りせめて道理なり。爰に一休津の國の山里を通り給ふに、二人の山がつ有り。一人は伏し倒れてあり。今一人は畑をうつ。父子なり。よりて見給ふに、むすこ毒蛇のためにさゝれて俄に死したり。父なげくけしきもなく、一

休にむかつて、御房そのおはする道のほとりに小家有り。これ我等の内なり。それよりめしを持きたるべし。只今息子は俄に死したり。さすれば一人の食ばかりもちて來れと申してたべといふ。一休ちかくより給ひて、それ父子の別はかなしかるべきが、いかなれば汝はなげきの色なきぞと問ひ給へば、男こたへていはく、親子鳥夜林明方々如飛去と答ふ。此の意は親子のちぎりは鳥の夜、はやしにより合て夜あけては方々へとびさるが如く、わづかのちぎりの間なれば、なげく事なしといふ心なり。一休それよりをしへの家に行き、くだんの通りを女房につぶさにかたたるゝ。扱はとて二人のこしらへ置きし食物を一人分さしおき、只一人のばかり持て出る。一休とひ給ふは、其死たるはなんぢが爲にはいかにと問はれければ、わらはがためには夫なりと申して、少もなげく氣色なし。一休仰けるは、それ世の中に死するといへば、他人の身としてさへあはれをもよほすに、まして夫ならばかなしかるべし。殊に女性ははかなきものなれば、いかゝあるべしと、ひたまへば、女こたへていはく、夫婦契市人行合要事過方々如散とこたへて行き過ぎけり。この意は夫婦のちぎりは、市により合ひてようじをとゝのへをはれば、めいく方々へちるがごとし。ながらへそふべきものにあらずといふ心なり。一休もふしぎの思ひをなして、さてもかやうなる山家に、かゝる生死無常のことわりをよくあきらめたる男女もありけるよと感給ふ。

一休伊豆の國にて、ある山人猿を一疋とらへ、柱にしばり付けなさけなくもうちたゝき、すでに打殺



さんとすべきところへ、和尚行あはせ、ふびんにおもひ乞ひ取てはなしやり給ふ。折から夏の頃なりしが、或夕ぐれに、くだんの猿いちごといへるものを、ふきの葉に包みもち來り一休へさし出しける。一休かはゆく思しめし、布袋に豆を入れてとらせらるれば、とりて歸りかさねて又其袋に粟を入れてきたり、みぎの如く和尚にさし出してかへりけるとなり。畜生といへども、命を助けられし恩の程をよくしれり。然れば人間の身として、是非のわかちを知らぬは、猿にも劣れりとかんじ給ひ、此事を旦那がたにもかたりたまふ。すこしもいつはりのなきことなりけり。又其のころ猶右衛門といへる百姓あり。常に百姓の業をなさず、殺生をこのみ大酒博奕はいふに及ばず、其外わるき事のこりなく、大いたづらなるもの有り。常々猿をかひ置ける。然るに猶助といふ一子あり。嫁をむかへしうち、妊娠にて七ヶ月といへる頃、右飼おける猿何やらんすこしいたづら致しけるとして猶右衛門大にいきり、猿を柱にくり付七八日も食をあたへずせめければ、終には飢死なしけり。かくて此嫁十月に満て出産する處の女子、目つき面つき猿の如くにして、全身しかも五六分ほど毛生て、さながら猿のごとき小兒なり。これ全く親の邪見孫にむくふ處にして、和尚まのあたりに見給ひしとの物がたりなり、おそるべし。

一休初發心のとき、越後路へ修行にくだり給ふに、信濃上野のさかひ近きところに、湯澤といへるところにて、はや日の西山にかたむくゆゑ、宿をこひ給ふに、在所のもの申すやう、御房宿を求め給ふ

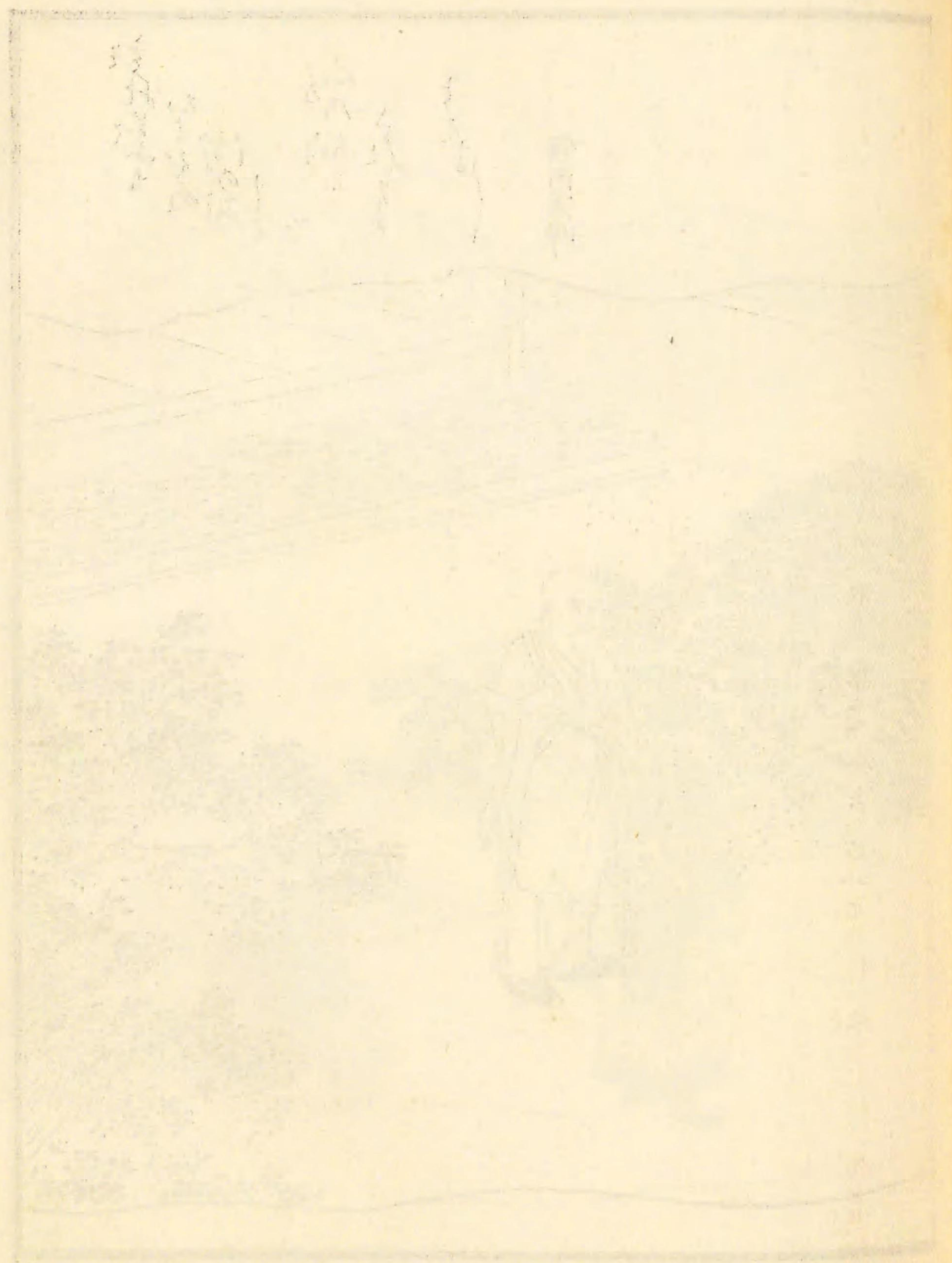
ならば、むかうに見ゆる山中に古き堂あり。これへ行き一夜を明し給へ。さりながらかの堂には天狗住むよしいひて、住持するものなく久しき空院なり。その心して行き給へ。和尚それこそ望む處なりとして、やがて行て見給ふに、此邊すべて山多くして陸奥の方へ峯續きにて、駒ヶ嶽、坂戸山、清水、白峯、松ヶ岳などとして、いづれも高山ありて物すごき土地なり。和尚かの堂へ行きて佛だんの上にあがり、隱形の印をむすび心をしづめておはしけるところに、夜半のころうへの山より、人ならば二三十人計の音して、さゝめきわたり來る。一休すはやと思見給ふ所に、堂のうちへむらがり入るを見れば、色白ききよげなる法師を手ごしにかきのせて、小法師ばら二三十人、前後をかこみて來りしが、此法師小法師ばらを庭におひ出して、なんぢらはあれにて遊び候へといふ。かしこまつてばら／＼と外に出て遊ぶときに、此僧一休を見て、それにかくれ居給ふ御房、これへ出られ候へといふ。一休さては見付られたりと思ひて、何の用に候やと申さる。いや御房の隱形の印のむすびやうのあやしきゆゑ見え申すなり。是へおはしませ教へ申さん。さらば物見給へ。所詮なきやつばらに見せ申さじとおひ出したり。先印むすびて見たまへ。さらばとして一休むすびたまへば、よし／＼只今は見えたまはぬぞというて、その／＼ちは主従ともになまじはりて舞あそび、あかつきがたに奥山へかへりけり。

一休關東心外寺にしばらくおはせしが、此住持もそのかみ同學なれば、むかしのよしみを思ひ種々馳走したまふ。あるとき一休とせんのあまり客殿に出て、四方をながめておはする折から、地侍と覺



しき人供四五人をつれ來りて一休にむかひ、いかに御坊、此寺の寺號山號はなにと申すぞ。一休こたへて山號は別法山寺號は心外寺と申す。貴殿はいかなる御方にてましますぞ。某は矢奈木雪折と申して、此邊近き在所ものなり。此寺をかねく承りおよびしまゝに參詣申すなり。しかるにめづらしき寺號山號なり。それ三界唯一心外無別法にして心の外に法なし。いか成をか是別法心外寺とたづぬるに、一休とりあへず答へていはく、それ柳の枝に雪折なく、いか成が雪折と答へ給へば、此侍大にかんじ、さてもく答話かしこき坊主かな。我等は内々たくみてさへ、さしあたれば失念する事あり。又はかつて出ざる事多し。そく時にかやうのへんたふせられし事、あつばれの御坊かなとぞかんじける。

又御雲水のころ、駿州富士郡大石寺に知音の僧おはすとて尋ね給ふに、互ひになつかしう思召し、しばらく足を留め給へとて、少しの滯留ありしより、近村の凡俗を集め、寺僧の法談などし給ふを、助講などありし折から、隣り村の村山といふに喜兵衛とて大百姓あり。常に隙なる身なれば殺生のみ樂みとせしが、庭先の柿木に鳩二羽來りとまりしを、得たりと鐵砲とり出したちまち一羽をうちおとしけるに、一羽の鳩おどろき飛去りしが、また元の枝へきたりとまりしを、又も玉をこめかへ同じく打落せしが、ふと一休和尚の法談を思ひいだして、鳩に三枝の禮ありと聞しが、まさしく此鳩はつがひのはとにして、雌をさきへうちしや雄を先へ取りし事や、残りし鳥の元の枝へ來りしは、死を共に









せんと我が玉さきを待ちし事うたがひなし。扱々鳥だにも夫婦の約あるものを、まれに人間とうまれながら、殺生をこのみ、是まであまたもの命をとるを樂しみと心得し、業因の程こそ恐ろしやと、たちまち發心して、一休のもとへはしり行き、若きよりの我があやまりをさんげして、御かみそりをさづけさせ給へとて、其座にて剃髮染衣の身となり、全證居士と法號をうけ、明くれ念佛三昧に入り、八十有餘の年齢をたち孫榮えけるとなり。其とき法名を下さるゝとて、

こゝろよりくびにかけたる傀儡師鬼をださうと佛出さうと

越前の府中に長野銀助とて、馬上の名人あり。一休福井よりのぼり、此の府中に二三日とうりうして萬をとり行ひ給ふに、彼銀助きおよび、御齋も上げ申したしとて和尚をむかへ、御齋もすぎて四方山のものかたりのころ、さる方よりはね馬を曳きてきたり、御六かしながら此馬を只今一馬場せめて給はれと申すに、やすき事なりとて、やがて馬引よせのられしが、此銀助と申すは、元來せんきの病にて陰囊大に腫たりけるが、鞍の前輪につかへて事のほかのりにくきやうすを、一休見てをかしくおもひ、

はね馬のまへわにかゝる大ふぐりきんふくりんと此をいふらん

とよませられければ、銀助大に興じけるとなり。

又下總國相馬郡を通り給ふ頃、和知川といへる水上に大ぬまあり。此近村にあるもの、妻、十二三歳



なるまゝ子むすめを、右の大沼のほとりへつれ行き、此の沼ぬしに申しけるは、此娘を其方へ參らせ智にし參らせんと、たび／＼いひけり。あるとき又件の沼へつれ行き、かくの如くいひけるに、俄に空すさまじくなり、雨風しきりにして、沼の水立、すさまじき事かぎりなく、いそぎ家につれ歸りしに、物のあとより追くるやうにおぼえければ、いよ／＼おそろしく思ひ、かの娘父に取りつき、日頃我等を沼へ母のつれ行きいひし事をかたるに、其夜大きな蛇來りてくびの上へ舌をうごかして、此むすめを見てはしばらくありてはうせぬ事度々なり。爺親此事なんぎに思ひ、いかゞあらんとなげきかなしむ。其頃、一休同國にまします事、國中にかくれなければ、知識と聞きたづね行き、因果の仔細を語りあかし、なみだを流して頼みければ、一休さても不便の事やとて猶もくはしく尋給ひ、さらば我文を書いて得させん。かさねて蛇きたるとき、此文をとへ聞かせよ。二度きたるまじとて其文にいはく、

此女我女也母繼母也無我免爭可取

かくとなへきかすべし。重て來るまじとかきてつかはさるゝ。此文の心は此女は我子なる母はまゝはなり。我がゆるしなくては、いかでかとなるべきといふ心なり。男よるこびくだんの蛇の來るを待ける所に、又れいの如くすさまじくして來る。さればこそとおもひ、さづかりし文を一々となへ聞かせしかば、たちまちきえて失せにけり。畜類といへども物の道理を能わきまへ、二度來らずと申し傳へ侍る。

こゝに常州徳念寺とまをす淨土寺あり。住持の長老の旦那にて有りけるが、いかゞおもひけん、先祖より代々淨土にて候が、不斗禪寺へ參り久しくわづらひて程なく死しけり。其子すなはち禪寺の住持にいんだうを頼むよしを、かの徳念寺ほのかにきゝて、中々先祖よりわが旦那にまざれなし。しかるをなんぞや禪家へわたしていんだうさせん事、前代見聞の耻辱なるべし。たとひ此事に於てはすくびにおほふ共、わが引導せんものと思ひ定めて、在所のもの其外あふれものを二三十人ばかりかたらひ、みちんになさんとひしめくを、此よし禪寺に聞えしかば、いや／＼さやうな六かしき死人を、取おかざるとも何かはくるしかるべし。入らざる事なりとて打すてぬ。三十五日のとぶらひすぎて、此徳念寺俄に狂亂して狂ひ出で、色々の事を口ばしりけるを、何れも旦那衆めいわくして、座敷牢を作りおし入れおけば、牢をやぶつて出で、尿をたれては手ににぎり、あるひは貌にぬり、又は己が食する飯器に入れて、在所をもて歩行き丸裸になり、着ものすん／＼にくひさき、家々へとび入り、人の妻子をおし付うち倒しなどして、さまざま悪わるくるひけるほどに、終にくるひ死にし、ける。やがて火葬にしけるに、石などを打くべたるやうに、黒くはなりけれども、灰にもならず。ふしぎにおもひ炭木を山のごとくにつみて焼ども少しも焼けず。弟子もこれをみて大におどろき、これ只事にあらず。いかゞはせんと評議なす折から、一休和尚其ころ常州にましましけるが、或人の申すやう、



上方より一休和尚といふ知徳の僧下りゐたまふ。此和尚に子細を尋ね見たまへかすと申しける。弟子房主幸ひの事かな。さらばとて弟子一休へ参り、しかぐと申しける。一休き、給ひて、そは不便のことかな、それ佛法と申すは人我の相をとめて、心を納るをもつてせんとす。まして僧法師は大じひ心をもつて、専らとして人ををしふるものなるに、愚痴放逸にしてかばねをあらそふ事、生ながら犬に似たり。あさましき次第なり。それがしたちまちまち灰にして参らせんとて、諸行無常の四句の文を書たまひて、是を死人のうへへなげかけ給は、即時に灰となるべし。早とくとあれば、忝なしとてとりて歸り、彼ふすぼりたる死人の上へなげかければ、あぶらをかけてやくが如く、べらくと焼て忽ち灰とぞなりにける。ふしぎなりし事どもなり。さるによつて和尚を佛の再來といはぬ人こそなかりける。

一休北國より京都へのぼり給ふとき、越前敦賀の宿をうち過ぎ、かいつの山中に一宿し給ふが何にものがいひけん、今よひ此宿にとまりしは、都に名高き舞まひの大かしらにて、いまは入道して世間をすて、諸國を修行し給ふと承る。いざう方々みな参りて一ふし所望せんはいか。皆々是は一だんの事かなとて、大勢旅宿へ詰かけて一休に對面し、御坊はうけたまはり候へば、都がたにて舞の大かしらどのよし、遠國遠里までも其沙汰かくれなし。幸これに一宿し給ふこそ、後のかたり句になし申さん。一ふし舞てきかせ給ひ候へとせめかけて申しければ、一休は大に迷惑し、これは思ひも

よらぬ仰かな。見給ふごとき坊主なれば、經陀羅尼などは少しぞんじたるが、其舞といふものはさらにしらすと斷られければ、在所の者ども、いやうなにとのたまふとも、たゞ一ふしの所望に候。せひせひ御舞なきならば、今宵の御やどはかなふまじ、いかにくとせめかけて所望す。一休さて、それは迷惑千萬、さだめて人違ひなるべしとさまぐわび給へども、皆もんまうなる里人なれば、更に合點せず。是非ともくと所望すればし案じて、愚僧けつして其舞まひにてはなく候へども、一ふし舞はざれば御かへりなくばせんかたなし。愚僧わかきときに、高館といふ舞を少し見覺えたるが、おぼつかなく候へども、一ふし舞て見申さん。先鈴木三郎が紀州藤白より奥州衣川まで着し所を、少しまひ申すべしといふに、在所もの、高だちが何やらんしらざれども、早くといひけるに、一休座をあらため扇をちやうとうちて、さる程にすゞきの三郎しげ家は旅のしやうぞくめされつ、藤白を立出て、奥州さして下られける程に、くだられけるほどに、く、くと、凡二十もくだられる程にとばかり、くりかへし、申されければ、里人等はふしぎして、いかに御坊さき程より、同じ事をくりかへし、のたまふは、いかの事にや、早や舞をまうて見せられ候へ。一休さあらぬ顔にて、三郎が紀州より奥州まで、七十五日が日敷をかゝりて、衣川へつかれたる事なれば、先くだられけるほどにを、三十日も五十日も申しつゞけにして、それから衣川に着しての舞をまひて見せ申すべし。おのくにも此處に八九十日逗留して、衣川の處を見たまふべしと宣ひければ、いづれ



も顔を見合せ大にあきれしばらくの間さへ、くだられけるほどにてたいくつし侍るに、いかでか七十五日が間、さく事はなるまじとて、皆々家にぞかへりたるとなり。是も一時の才智なりと人申しあへり。

今出川通によしや如齋といふものあり。兼て和尚とまじはり厚かりしが、打ちつづき用事しげくて、久しく和尚のもとを尋ざりしかば心にやかゝりけん、文をしたゝめて此頃は用事つどひ候ゆる、御見舞も申し上げず、御ぶさた申候。いづれ近々御見舞申上ぐるなど、斷りの文をつかはしける其返事に、見舞とて見まうてくれを見まはずとしやじよさいと思ふ身ならば

とよみてつかはされける。如齋これを見て、御坊の今にはじめぬかるき御事かなとかんじけるとぞ。一休和尚高野山へのぼり給ひ、四方の山々をながめて、さても聞きしより尊きけしきかなと、ながめおはしけるに、高野ひじりども立いできて、一休を見ていかなる人ぞと尋ねければ、愚僧は名もなき道心者にて侍るが、此山はじめて一見仕候へば、餘り風景がおもしろく侍れば、こし折の詩か歌か一首つかまつらんとぞんじ、つくぐとして侍るとのたまへば、ひじりども一休とは中々おもひがけねば、しほらしき事をいふ御坊かな。ことわざにいへるめくらの垣のぞき、すぐちの嘯て心なぐさむとや。その身はかがみてこそとて、うそさむげなる形ふりにて、衿は此山の名産高野がみそりの及よりもうすきえり付にて、細首のいとあぶなき體にて詩歌を案ずるとはできたりと、口々にいやしめ笑

ひけるに、一休耳にもかけず空うそぶきておはしけるが、やうぐ一首仕りたり。硯紙たまはれと申されければ、何一首出来たるとや。さらば拜吟仕るべしとうち笑ひ、硯紙を出しければ一休筆をとり、彼東坡居士が徑山寺の詩を山がたに作りしを例として、

七山秋葉落

- 五山春開花發空
- 三山迎連峰報下佛心亦
- 一山高近都卒内院土上進空
- 二山閑表華藏世界地醒寂
- 四山平幽臨化佛惱亦
- 六山夏涼風煩寂
- 八山冬素雪

かくのごとく即時に筆をとり、さらくと認め給へば、一山のひじり大におどろき、さても形容に似合ざる見事なる筆跡といひ、又目なれぬ詩の體かなと、明たる口をふさぎかね、扱々先刻は皆々よしなき事どもをいひて、御僧をはづかしめ候事かへすぐはづかしうこそ。いかなる人ぞ御名をなり給へと口々に申しければ、其詩の下に候とのたまへば、まことに小文字候が何一とか申すぞとたづ



ねける。其中一人のひじり眉をしばめ、此詩の筆跡をよく見ると、京紫野なる一休和尚の書なり。さるから一とするされたり。さればこそ曲者なりとふり歸り見るに、和尚は彼方へ下向したまふ。ひじりたちそれとめまゐらせて、過言をあやまれとはしり付て引とめ、一休和尚も存せずして段々無禮を申したり。御免ありて先々坊中へ入らせ給へといんぎんにのぶるに、一休いやく、何も斷り給ふべき事にはさらしなして、さげんよく坊へ歸り給へば、ひじりたちさまぐ馳走をまゐらせける。さて厚く禮をのべて下向し給ひける跡にて、一人のひじり申すやう、かゝる名僧また登山し給ふ事まれなり。願くば大師の御影に、贊をたのみ申したらばいかにといふに、いづれも尤と同じ、さらば今一たびよびかへしまゐらせんと又追かけ奉るに、一休は何事にやと仰らるればしかく、のよし申すに、一休わらひ給ひて、夫ほどの事また立歸らずともなることなり、御影を急持きたられよとて、道なる茶屋に休ておはしける。人々おどろき大師の贊を請ふに、立ながら思案もなくなさるる事、聞きしより大博學の祖師かなと、舌の根をふるひけり。扱大師の御影をもち來りければ、

弘法大師活佛死ねば野はらの土となる

と一筆にさらしとした、め給ひて下向し給ふ。人々ふかき事もありと、いそぎ登山して學匠に見せければ、格別のおどけ事ありしかば、またひじりども口を得ふさがざりけるとなり。

卷五

さて一休和尚能州蜷川村の草庵にましませし頃、泉水のきしに水の上へおよんで、横ばひにねたる松のありける。弟子衆をあつめて、此松を真直に見たるものやあるとたづね給ふ。皆々立かはり入かはり見られけれども、横ばひの松なり。其とき蜷川新右衛門参り合せて、われらいかにも真直に見て候と申されければ、さては如何にと仰あれば、まことにいがみてこそ候へと申されければ、和尚手をうちてよく見られたりとて、五十則をゆるすと仰られける。

和尚熊野山へ御参詣ましまし、本宮へあがりたまふ。ころしも春の半ばなれば、山々谷々の櫻、都三月の頃よりもいと目出たかりければ、拜殿にうちのぼり、四方の風色をながめましましける處へ、社僧一人まかり出て、客僧はたゞ人とは見参らさずと申しければ、中々われらはたゞ人にては候はず。御らん候へ出家にて候と申されければ、彼僧はきもをつぶし、こは興がる御僧かなと、ひとつふたつと物がたりし給ひて、和尚この僧は少しはなせる者とおぼしめし、高野山の詩の事をおぼし出させ、此山にても一首を作りてなぐさまんと矢たてをとり出し、さらしと書て彼僧に見せ給へば、其ま、神前へそなへて、さて一御筆跡見事にて候。都人と見申すはひがめかと申しければ、和尚答へてよく社察しられたり。われは都紫野の一休といふものなりと仰られければ、さてはかねてきつたへし



和尚わしやうにてましますかとて、かの神前しんぜんにさげおきしをとりきたり、とても事の御名おんなを書付かきつけ給へとねがふに、さらば後の代のちかたり草ぐさともなりなんと、一休老人いっきうらうじん偶題ぐだいとを記し給ふ。其詩そのしに、

七山里放光

五山瀧吟落碧三

三山海浪高船片雲社

一山廟等一扶桑神片漲景

二山客成群數萬人輪塵春

四山樓鐘動月輪惱宮

六山谷洗流煩本

八山花猶馥

一休老人偶題

さて彼僧かのそうは一休和尚いっきやうわやうなりとて自宅じたくへ招せうじ、横槌よこづちで庭にはをはき、杓子しやくしで芋いもをすり、御馳走ごちそう申事まうすことおろかならず。折をりふし花はなのさかりなれば、庭前ていぜんのはなをも見たまへとて、酒肴しゆかうをいだしてなぐさめ申す。さてかの僧そう申しけるは、此山このやまへまた御越おんこしなさるゝ事もはかりがたし。末代まつだいの實たからともなすべければ、何なににても一筆遊びつあそびし給れと申しければ、安事やすきことなり、御望おんのぞみあれとのたまへば、さても拜殿はいでんにての御作ごさくの詩體していは、

いにしへよりもかゝる體ていの侍はべりけるかととふに、いかにも古いにしへよりありし事ことなり。唐土たうどの東坡居士とうはこじが徑山寺きんざんじにて作りし詩體していなりとかたり給へば、さてくめづらしき詩しや。されどかゝる山奥やまおくに住すみて、ことに學文がくもんもなき文官もんかうの我々われが目めなれ耳みみなれず候あひなる。相成あひなるべくは思おもはる我々われが耳みみなれ目めなれたる事ことを、ねがふなりと申し上げければ、和尚わしやううちうなづき給ふ折をりから、春風はるかぜふきて櫻さくらのばらくとちりければ、貫之つらゆきのうたを思おもひ出いだされて、

櫻さくらちる木のした風かぜはさむからで空そらにしられぬ雪ゆきぞふりける

これはいかにとのたまへば、彼僧かのそういや是これもいまだ耳みみなれ申まをさざる處ところなりといふ。又またさくらの花はなの風かぜにちらされ、さつくとみだれければ、其そのまゝ、

雪ゆきやこんこあられやこんこ御寺おんてらのかきの木きに一いぱいふりつもれこんこ

是これはいかにと申まをされければ、彼僧かのそう大おほにうちわらひ、さてもおどけたる御僧ごそうかな。いかに耳みみなれ目めなれしものとても、それはあまりにと申せば、一休いっきうもわらひ給たまひて、實げにもつともなり。いでく其望そのぞみの目めにも耳みみにもなれしことをかきてまゐらせんとて、かく、

さねが鈴海山木すいみやまきこり谷たにのこゑ入いりあひのかねに庭前ていぜんのはな

とあそばしければ、かの僧そうさてもよき御おんかる口くちや。實げにに見みなれ聞きなれしものを、のぞみけるこそ思おもはれとて、御口おんくちのかるきをかんじ侍はべる。かくて色々いろくち馳走ちそう申まをしければ、次手ついでなればかの東坡とうはが詩しを書かきおく



べしとて、

一山花發茂林。片。食。道。  
 二山遠路幽深。沈。吟。尋。  
 三山雲飛一片。偷。問。  
 四山水碧沈抱。相。  
 五山鳥菓來。僧。  
 六山猿樹還。相。  
 七山客

山花發茂林  
 山雲飛片々  
 山鳥菓偷食  
 山僧來問道  
 山遠路幽深  
 山水碧沈々  
 山猿樹抱吟  
 山客還相尋

かく書あたへて、いとま申してぞかへり給ふとなり。  
 爰に堺にてのことなりしに、一休和尚へ常に参りて、御心安く御意を得たる又次郎といふ町人ありける。あるとき河豚汁をした、か食ひてけるが、殊の外に酔ひ、終にその日のうちに死しけるが、今はの時に申しけるは、我世にありしときは死る事はいつの頃ぞやと、思ひけるなれば、後世とて願ひ置し事もなく、され共一休和尚へ、常にしこう申し御物がたりども承りし結縁あれば、引導をもたのみ奉れ。かゝる不慮の死を仕けり。さこそ哀れとも思召すため、かならずといひ置て終にむなし

く成りにける。妻子眷屬なげきかなしき、遺言の通りつぶさに一休和尚へ申し上げければ、いとやすき事なり。扱々ふびんの仕合と仰られける。しかる處へはや時分もよく候間、和尚様御出をあふぎたてまつると、再三人をおこしければ、一休仰られけるは、いやしくわれら罷出るにおよばず、引導つぶさに書てつかはすべし。誰にてもよみあげてはうむれよと仰られければ、妻子なげきて遺言にて候間、ひらに御出下されよ。御慈悲なりとさまよく願ひければ、一休のたまひけるは、いやしく我等が

海中有毒魚 名云河豚魚  
 面腹白背斑 人不食此魚  
 嗚呼痛哉 又次郎食之忽死來  
 彼歳五十四 彼歳五十四  
 合て數珠一連百八煩惱のきづなをふつとぎつて行たい方へつとゆけ。  
 木曾十七寅の年角のないこそ添よけれ。

とあそばしてつかはされけるとかや。しかればおのゝ肝を消しけれども、仰なれば其如くにおこなひけるが、其引導の書きたるを、其子供秘藏して今に傳へ、其家のたからとし、又もなき墨跡にて代所持仕りて有りけるとなり。



扱一休和尚の御袋は淨土宗にて有りしとかや。一休常にかな法語をかきてつかはし、または水かみといふ雙紙を送りて道を教へ給へども、しかく御さとりもなく、明暮たゞ念佛のみにて過し給ふ。一休聞しめし一段の御心入なり。念佛にて佛にならせ給はん事はうたがひなければども、此所より愚僧が庵へ御出あらむに、何のうたがひなく御出あるべし。是よく常に道しり給ふゆゑに、苦もなくうかうかとありき給ひても、庵へは御出有るなり。又かた田舎人がわが庵をたづね來らんに、いか程道にまよひても、我等が庵ある上は何れたづねあふなり。そのたづぬるまでの心苦しきあびだがまよひなりと仰られければ、しからば何にても示し給へと仰られける。一休さあらば一句申て見まらせんとして、

目なしどちく聲についてましませ

皆人のさとりとやらんいふことを悟る。其ならひはじめに父母もなく、とつと已前の我身は何なるぞといへどもといふものを知らず、とがむるものもしらず。然ば釋迦彌陀はよしなのとはすがたりやといふものは、とはすがたりかといひければ一黙してをりける。此心を見給へと仰られければ、御袋のいはく、

いへばいはすいはねばむねにさわがれておもはぬさきや佛なるらむとあそばしければ、一休よろこびたまひてとりあへず、一首をよみたまひける。

いまははやこゝろにかゝる雲もなし月のいるべき山しなれば

とよみ給ひて、御工夫 尤々としてよろこびてかへり給ひける。

一休和尚の旦那に、狗子佛性の話をさづけたまひしに、この人狗子とは犬の子なり。これに佛性とは何とも合點まるらずと申しければ、聞て見給へとて仰せられけるは、

犬の子にあやかる人のしわざこそほとけともなれ地ごくへも入れ

むかひ殿のゑのころはまだ目が開ぬお壺にまゝを入れてころくや

と仰られければ、いま目があきて狗子のところはやう／＼わかりて候が、趙州の有無の處は、千年工夫 仕り候へども、愚痴の我等は得道 仕る事はなりがたしと申しければ、歌よみてさかすべし。此歌を常に吟じて心得て見られよとて、

なしといへばなしとや人のおもふらんこたへもぞする山びこの聲

ありといへばありとや人のおもふらんこたへてもなき山びこの聲

とあそばしければ、彼ものしばらく工夫して、しからば有ともなしともしれぬものにてござ候かと申しければ、

有無をのする生死の海のあまをぶね底ぬけてのち有無もたまらず

と仰られければ、彼人此うたにて得心して、一首、



有無ぞしるなにおもひけん趙州もなかりしさきの犬の一ころ  
と申しければ、一休きゝたまひて、おつぼのまゝを、一くちまゐりけるよとてわらひ給へば、旦那禮  
拜して歸りけるとなり。

さてこゝに頃しも八月下旬なれば、大風大雨しきりにして、洛中の家堂社塔もそこねければ、蜷川新  
右衛門取る物もとりあへず、一休和尚へ御見舞申して、御坊御内に御さるか、何とくことの外なる  
大風大雨、御寺はいづくもそこね申さず候やと申しければ、一休出合たまひてよくこそ御心付候  
ものかな。誠にめづらしき大風にて候。さりながら當寺は何事も候はずとて、

わが宿は柱もたてずふきもせず雨にもぬれず風もあたらす  
と仰られければ、其御庵はいづくのほどにて候ぞと申しければ、一休わらはせ給ひて、さればこそ大  
事のことをおたづねあれとて、

わが庵は都のたつみしかぞすむよをうち山と人はいふなり  
と仰られければ、さては喜撰法師と相住なされ候かとはふれければ、いや喜撰法師にかりて居るな  
りとありければ、さては借家どのにて候かと申してわらはれしかば、一休また一首をよみ給ふ。

かりの世にかしたる主もかり主もかすと思はずかと思はず  
とよみ給へば、新右衛門此歌を感じて扇子にかき留め、かりそめに參りても得道の徳侍るとてよろこ

びて歸りけるが、門より立かへりて、さてくをかしきたはふれ事仰られしに、うかひ申すべきと  
思ふ事を打すれ、かくすでに歸らんと仕り候。此心はいかゞ心得申すべきとして、

吹ときはものさわがしき風なるがふかぬ時にはいづちなるらん  
と申しければ、そのまゝ御返歌ありける。

吹ときはうべさわがしき山風もふかぬときにはふかぬなりけり  
と仰られければ、新右衛門ものをいはず、うなづきて暫く禮拜をなして歸りしとなり。

こゝに西の國の大名身まかりける。今端のときに申されるは、我死してのち、種々の佛事をもつと  
むべからず、紫野の一休禪師を請じて引導を頼み申せ、是より外に望みなして死したりける。人々  
なげき御遺言なればとて、急ぎ都へ使者をたて一休を請じける。一休折節在庵にて、易きことなりと

て、かの使者とともにうち連て下り給ふ。既に葬送の日限極りしかば、音に聞えし紫野の一休和尚こ  
そ、此國の某どの、御引導の爲とて御下向ありしとて、國々島々より聞ほどの人、足を空にまとうて  
貴賤くんじゆし、御引導を聽聞せむとぞひしめきける。葬禮の儀式天には花をふらし、地には錦を散  
して其よそほひ詞に延がたく、其日になれば數萬の見物、かの一休の引導をぞ聞くべけれど、おしあ  
ひへしあひける。扱玉のこしをかきするければ、一休立出たまひ寵の前に一黙し給ふ。諸人すはや今  
や今やと耳そばだてゐるに、一言をいひたまはず、天を仰ぎ口をくわつとひらき、地を見て口をふ



さぎて、其まゝすつと退き給ふ。彼大名の御れん中きん達をはじめ一門家來のともがらまで、是はいかなる御事やらん、せめては一句をしめし給はれと、御衣の袖にすがりつゝ、諸人の見物も興をさまじければ、一首の歌をよみおき、都をさして上りたまふ。人々は非なくその歌を見れば、

我はたゞ後世の教をしらぬなりあうんの二字のあるに任せて

とありければ、皆人これをきゝて、あともうんともいはれざる御僧かなと、黙して感じあへりしとなり。

また一休堺へ御下向のとき、淀の河瀬舟に乗りたまひけるに、乗合に山伏ありける。御坊は何宗ぞと問ふ。一休われは禪宗なりと答られければ、禪宗には我等が如ききどくはあらじといひける。一休申さるゝは、いかにもきどく多し。其方に何にてもきどくあらば見せたまへと仰られければ、いで我等が法力にて、此船のへさきに不動をいのり出して御目にかけて、一にこんがう二にせいたかをはじめてもみにもんで祈りければ、皆々のり合のものども、目とめを見合あるところに、あんのごとく、舟のへさきにたちまち不動の像、火焰をはなつてあらはれたり。其時山伏ちうめんを作り、おのゝをがみ給ふかと申しければ、皆人ふしぎの思ひをなしけれ共、一休はさらにふしぎにもましまさぬふりなり。いかに禪僧かゝるきどくは如何にし給はんとせぐりかけて申しければ、我等が奇徳には身より水を出して、あの火焰をはなつ不動尊をけして見せん。随分いのり給へとて、かの不動の像の火えん

に、小便をしたゝかしかけ給へば、火焰はそのまゝ、きえて山伏の法力つきけれ。皆人一休を禮拜して奇異のおもひをなしけるなり。さて舟よりおりて陸路をうちつれ行處に、むかひよりなるほど大なる犬の、山河にもひゞく計りにほえてかゝりければ、山伏申すやう、いかに御坊さきの行くらべにこそまけたりとも、あのおそろしき犬のいかりを止め、たゞ今はよび寄る法力をあらはさんが、御僧はいかにと申しける。一休是はいと安きことなり、まづ祈りて見給へとの給へば、山伏大いらたかの赤木の數珠をさらりゝとおしもんで、一祈りこそ祈りけるが、一切犬は吠止まず、手元へ來るねんもなかりければ、たつさまやよこさまかけて、十文字犬ののんどめよ、あびらうんけんそわか、といへども、犬はほえやまず。一休をかしく思しめし、そのき給へ、某はそれほどのことに、あびらうんけんもそわかも入る事にはあらず、あのにぬのいかりを止め、たちまちこへ來らせんと、ふところより晝飯のやきめしをとり出し、かの犬に一目見せて、ころゝゝとのたまへば、さしもいかれる犬なれども、やきめし一目見て、くんゝゝとて尾をふり來りければ、山伏もきもをけし、皆人さても格別なる心得かなと、感世ぬものこそなかりけり。こゝに一休和尚の末期の句とて、世の人の口にまかせけるは、その數多し。是が實なり是は虚なりといふも不實なり。いかにとならば彼も御影を書付て賛をもとめ、これも賛をもとむは、其賛には出るままにあそばしけるとなり。ある處の御影の賛に、



朦々而三十年 淡々而三十年  
朦々淡々六十年 末期肺糞捧二梵天一

此句々もあり、又の語には、

借用申昨月昨日

返濟申今月今日

借置し五つのものを四つかへし本來空にいまぞもとづく

又ある末期とやらんに遊しけるとして人のいへるは、

生や死や 死や生や

柳はみどり 花はくれなる

喝

柳不緑花不紅 御用心々々々

一休題

またある人一休の御寺へ用事ありて参りけるが、或夜沙彌小喝食をこまづけて、一休の御遺言どもを  
をがみ侍りしに、一々名譽を極めたる事ども多かりし中にも、自畫自贊の御影を拜し侍りしに、かう  
べはいかにも長髪にして眼をきつと見出し、うす赤き衣をめし、丸竹の柱杖をつき、いすに腰をか

け侍りし贊に、

柳は緑 花は紅

行脚事畢 今日時節

折主丈子 焼六月雪

虚堂之再來天下老和尚一休宗純末期書之

またある舊家に所持せる自畫自贊を拜見せしは、是は蜷川村の草菴にいませし頃によ、是も髪長くま  
しまし、卓にかゝり給ふ山居の御影なり。

山居窮僧聽二松風

不須臨濟德山禪

一箇住山三十年

公案工夫了畢後

長松風破罷二參眠

虚堂七世龍寶門客東海純一休老

畫與詩一筆印

とぞ有りけれ。見る目もすさまじくて身の毛もよだつ事なり。



一休の御ころざしをおもひ見るに、寒山子の風相にかはる事なし。寒山子の詩句に、

我心如寒月 秋水清無底

とありしが、一休の道歌に、

我ころそのまゝほとけいきばとけなみをはなれて水のあらばや

とよませたまふ。これ寒山子の詩の心なり。寒山は文殊なりといひ傳へしが、一休は定めて普賢なるべし。されば狂雲集に其詩文多しといへども、たゞの人の目には見えぬをにくみて、其中より金つんぼの耳へも入れやすき詩を書きぬき、盲の目にも見あきらむべきひらがなにてしぼりつゝ、子供にも覚えさせ、大人にも未だしらぬ人に見せ侍らんと、かたことをかへりみず、反平をわきまへず、人の書あやまりをもつてわがあやまりとす。我あやまりても苦しからず、かくなん出しぬ。

一休和尚狂詩二十首

題鉢敲

晝不笠分夜不齒 東西南北自由身

瓢箪扣罷有無何益 花發十方淨土春

題影法師

元來有物不離身 揚手同揚伸足伸

全體分明無二面目 起居動靜似侮人

彼岸

今日彼岸欲開鉢 餘身貧乏雨晴稀

無篋無笠又無杖 結句食犬引腰歸

梅法師

往昔江南沒落時 起青道心成法師

欲問橫斜疎影古 伊勢壺底暗皺眉

虱

獨臥寒衾患幾千 餘身貧極有誰憐

夜深依被半風食 天至曉鐘未作眠

男根

一生忍衆動焦身 八寸推根尙勝人

入道修行若時事 須臾老去革頭巾

女姪

元來有口更無言 百億毛頭擁二丸痕



一切衆生迷塗所 十方諸佛出身門

寄少人三首

紅顏綠髮冠沙喝 況忘御年十二三  
若有貧僧憐感志 寮前吹味致推參

其二

少年十五月如出一笑紅顏花似開  
木石無心多世上 嗚呼是此玉瑕哉

其三

若衆天然好富貴 摺切爭可入御意  
無酒無茶又無餅 山僧風流只文字

贊兒文殊

看畫忽忘七佛師 雲鬢霧鬢少年姿  
手中經卷是何字 定有愁人小艷詩

贊阿彌陀佛

汝是桑願 一人不救 我無一願

萬民不泄

贊大黑

大黑尊天其面黧 諸人信仰置棚陰  
平生愛鼠是何事 足下米囊無用心

贊布袋

菩提煩惱 睡裏乾坤 寤寐恒一

佛無虛言

青地扇切箔

本真白物染青々 日本晴時如見星  
又有假茲思出事 宇治川畔亂飛螢

八島之壇浦合戰圖

射手名人能登守 兵法達者源九郎  
秋風有恨八島浦 狼藉忠信亡菊王

一谷合戰圖

萬騎下山源氏兵 平家運盡出堅城



長江不洗英雄恨 日夜風濤戰鼓聲

源九郎流弓圖

漫々滄波已落弓 恰如初月掛晴空

忽伸左臂取來者 天下英雄在設中

熊谷招於敦盛圖

生年十六美男兒 身命碎珠回馬時

熊谷道心從此發 法然庵室念彌陀

佐々木四郎宇治川先陣圖

萬騎如雲宇水邊 東關諸將各爭先

功名誰出四郎上一 一馬化龍何着鞭

右

一休和尚往生道歌百首とて

阿彌陀佛さすれば即ち古此不遠まよへば遙にしにこそあれ

三國の法はしなく多けれど釋迦のをしへにまされるぞなき

儒釋道三つのをしへの別ならず善に善報あくに惡報

むかしより智恵ある人の佛道は二世安らくのをしへとぞなる  
三國の世々のかしこき君臣にしやかのをしへを仰がぬはなし  
三寶に歸依する世々のためしみよこく土あんをん土民福らく  
一心にまことの道にいる人のそのゆくするは子孫はんじやう  
公家武家のぼだい信する手ほんにはかまたり大臣多田の満仲  
道にいるするはんじやうのためしには藤氏源氏の家をみてしれ  
せんぢやうは忠孝多しとんせいはげにたぐひなきわかき武士  
ものゝふのとんせい修行手本とて西行法師さてはくまがへ  
いまでも又十緇八素の友がなしろさんのむかしおもはれぞする  
とんせい是不遇の人はさもあらめ名とげて菩提入ばうどんげ  
大唐の如福禪師と樂天はともに念佛産禪とぞきく  
熊谷がとんせいしゆぎやう功德みよおんしん平等自他の成佛  
四大五蘊みなくうにして申すこそまことの念佛座禪とぞいふ  
家にあり不忠不孝のともがらはとんせい修行あやしかりける  
成佛は異國本朝もろともに宗にはよらず心にぞよる



おや主しゅに忠ちゆうや孝かうある人々ひとびとは家いへにありてもぼだいたのもし  
 萬法ばんぽうの行ぎやうはよろづの事ことなればこゝろへんに道みちをつとめよ  
 世よをのがれ修行しゆぎやうの道みちは別べつでなし智者ちしや愚者ぐしやともに座ざ禪ぜん念ねん佛ぶつ  
 貴賤きせん智愚ちぐ僧俗そうそく男女なんにょ別べつなれどぼだいの道みちはひとつ事ことなり  
 佛説ぶつせつはぼだいねはんの眞理しんりにて二世にせ安樂あんらくのをしへなりけり  
 善修ぜんじゆすれどあく事じきたると恨うらみなよ先世せんせざいごふ即そく爲み消しょうめつ  
 皆人みなひとのねはん常樂じやうらくしらずして生死しやうじ無常むじやうをなげくあはれさ  
 佛ほとけだに定業ぢやうごふのがれ給たまはねばはやくいんぐわのむくふ幸さいはひ  
 佛性ぶつじやうは不生ふじやう不滅ふめつの物ものなればまよへば生死しやうじ流轉りゅうてんとぞしれ  
 何事なにことも定業ぢやうごふなりといふ人もまことのときはおどろきぞする  
 佛道ぶつだうにさとれといふは何事なにことぞいんぐわぼだいを得えとくするなり  
 よの常つねに工夫くふう觀念くわんねんつとめなばまことのとときに心こころうごかじ  
 智惠ちゑあるは若わかきも道みちをつとむるに老おいてぼだいをしらぬおろかさ  
 人はただ平生へいぜい志願しげんなかりせば修身しゆしん齊家さいかもいかゝあるべき  
 何事なにこともせんせのごうといふ人のぼだいつとめぬこれぞ猶なほぐち

我等われら今悲願いまひぐわん祈誓せきせいをするをみて有爲うゑの法のりとてそしる佛ぶつ陀だや  
 ふくとくはねがふに來きたるわざはひは慎つしむかどに入いぬとぞきく  
 一いちさいの諸佛しよぶつ菩薩ぼさつもひがんよりぼだいなはんの成就じやうじゆし給たまふ  
 一念いちねんの中うちよりまよふ雲くもおこりりんゑ永劫やうこくやみちとぞなる  
 つらくとみやうりもとむる人ひとみればじひある人は佛ほとけならまし  
 神儒しんじゆ佛ぶつ三さんつのをしへをとく人の何いづれの道みちもいらぬあさまし  
 一念いちねんのじひ眞實しんじつぞたねとなる九品くほんのれんげひらけこそすれ  
 よの人のいんぐわぼだいを知らずして五逆ごぎやくの罪つみをつくる哀あはれさ  
 戒かいたもちざせんねんぶつつとめつゝじひある人は佛ほとけならまし  
 比丘びく々々の其身そのみのつみは扱さておきぬ人の道心だうしんやぶるうらめし  
 當來たうらいの三會さんゑのはるの花はなもまた現世げんぜのじひぞたねとならまし  
 世中よのなかに我われぞさるとと自慢じまんして名利みんりもとむる人ひとのおほさよ  
 正法しやうぽうの花はなぞの山やまの草くさや木きをむかしのはるとなすよしもがな  
 名なと利りとを求もとむることのくげんやな人ひとに遣つかはれざいにつかはれ  
 今いまとても天地てんちの道みちのかはらねばまつせのわれらぼだい頼たのもし



財寶は身のあだなりと聞ながらなほもとむる心はかなさ  
 釋迦も又あみだもとは人ぞかし我もかたは人にあらずや  
 惡念は起り安くてじひしんは起しがたきぞものうかりける  
 道はたせけんせ外のことどもにじひしんじつの人にたづねよ  
 極樂もちごくもわれにあるなれば惡念おこることろせいせよ  
 わが氣にはたとひ入ざることなりと人のいさめを用ひしたがへ  
 人の非はしり安けれど己が非は智るもしること難きとぞ聞く  
 なにごとも人のこゝろにさかふこそ世法佛法さはりなりけり  
 身を入れて鳥獸を救ひしは釋迦のゐんちの修行なりけり  
 眞佛は有さう無相にかゝはらず四相なきこそむさう成けり  
 煩惱をそくぼだいぞとなすことは一ねん回向そのうちにあり  
 賣僧して物とりくらふ沙門こそこれぞ地獄のかすところなれ  
 本來のむしん無さうの佛をも五よくにひかれんぶとぞなる  
 華麗なる沙門をみれば皆人の冥加しやなりといふぞをかしき  
 體ありて凡夫こゝろのなかりせば本らいくうのむさう眞佛

今時の僧はなか／＼俗よりもいんぐわばだいをしらぬ佛だう  
 戒たもち座禪念佛つとめてもこゝろあしきは造地獄から  
 儒佛道をしへはたとひ得せずとも生死大事とおもへ人々  
 物ごとに執着せざる心こそ無さう無心の無住なりけり  
 皆人のをしへの道にまかせなば本來空にかへりこそすれ  
 みな人のとんじんぐちの惡水は三づの川のながれとぞなる  
 生は寄死は歸るぞといふことはふるきふみにぞおほくみえけり  
 六根に作るさいくわのちりほこり四手の山路の高根とぞなる  
 旅は只うき物なるにふる里のそらにかへるをいとふはかなさ  
 極樂の月まつ夜半の念佛はくもきりはらふ秋のにし風  
 障なく本來空にかへることこれや西方往生としれ  
 老の身の月日をおくる所作はたゞ香花にとくじゆ座禪念佛  
 西方の本來空に往生しむりやう壽佛となるぞめでたき  
 口ほどに身の行ひのならざればわが心にもはぢられぞする  
 わが禪はをしへの外の宗なるに往生要歌よむもをかしき



わが禪にきらふべき法あらざれば心のうちに一もつもなし  
 古のちしきのをしへじひとのみ今はなにとてがまんけんどん  
 まやはたうりいたいけ夫人極樂へこれぞ佛のわうぎせつぼふ  
 佛性は四大和がふの體なるに五欲のちりをいか引けん  
 佛乘をせち辨僧やわる知識世わたるものとするぞかなしき  
 妙にして神あるものはこゝろ哉天地にわたりみじんにもいる  
 不義にして集め蓄ふざい實はつもりてのちは二世の身のあだ  
 心より四聖六凡いでぬるに何とてあくしゆごふは作るぞ  
 名と利とにかゝはる心引かへてまことつくさば二世は安らく  
 何ごとも今日の歡樂すぎぬれば明日はかならずくげんとぞなる  
 書寫寺の僕のころもと虱とりむかしの御僧今ぞこひしき  
 現在の苦修善行ぞ種となるかならず來世安樂のはな  
 をしへなる道は世外に事多したしん實に慈悲をたづねよ  
 罪障の露霜ふかき身にもたゞ座禪念佛題目ぞよき  
 まつしまやみなみの海も極樂の池水と同じ法の陸奥

十方は唯一心の淨土なれ衆生もつとめ己身彌陀佛

已上

眞珠庵は末代まで出世すべからずと仰られ、和尚自の一代にも出世はましまさざりけれども、出世  
 の法語どもは名譽なるを書置き給ふ。和尚號は贈號なり。自のたまふは虛堂の再來なりと、其外ふし  
 ぎなる事を書おき給ふ事多し。又遺言のおくに、我死て百年すぎて唐土より禪師來らば我再來とおも  
 へ。また二百年にあたる年、我死骸を土よりほり出し見るべし。もしかたち朽たらば、いひ置し事は  
 皆たはごととおもひて火中すべし。大かたは死骸はそこねまじとのたまひしとなり。然るに百餘年に  
 して隱元來朝なり。これ相違なき隱元和尙は一休和尚の再來なるべし。しからば御死骸とても、定て  
 かはり給ふ事あるまじきなり。又今の御木像ははるかののちの作佛にて、諸旦那あるひは弟子衆まで、  
 一休和尚の御そり髪を守袋に納もちけるが、彼御像を作り奉るとき、御長髪の體なればとて、直  
 の御剃髪を御眉御髪にいたるまで、佛工が植けるとなり。さても御剃髪をすゑの代の、我々拜し奉  
 る事有がたからずや。さてかく集めぬるに、昔の人の書誤るも聞たがへるも有るべけれども、今ま  
 たつたなき筆に記したれば、猶あやまる事も多からめ。こはわがおろかなる故ぞかし。ゆるし給へ。  
 必しも古人をそしり給ふべからず。たゞ此書は兒童がひる寐の伽となし給は、おのづから耳底のか  
 すともならば、あしきかすにもあらざらめ。かくいふおろかなる我も筆記せるまに、にこれる心